

はたらく魔王さま! 12

観望となった澤城の病室に集まった一同。皆の前で恵美の降誕であるライラがこれまでのことを告白すると、勇者として、娘として、恵美の怒りが大爆発! 過去の真相を知った恵美は、ライラとの大喧嘩の末に病室を飛び出してしまふ。追いつける千鶴と鈴乃だったが、二人は恵美を見失ってしまい……。

一方マクロナルド種ヶ谷駅前店では、新サービスのマッグデリバリーがスタート。レッド・デュラハン号（店のバイク）で街を駆け巡る魔王も、母編と大喧嘩した恵美のことを気に掛けていた。

虎民家ファンタジー、混沌の第12弾! 勇者と天使の壮大な母娘喧嘩に決まれて、魔王さま大ピンチ!!



電撃文庫

和ヶ原聡司  
イラスト 029  
Satoshi Wakahara  
Illustration Oniku

12

わ-6-13

はたらく魔王さま! 12

和ヶ原聡司

電撃文庫



ISBN978-4-04-068252-6  
C0193 ¥580E

ASCII MEDIA WORKS  
アスキーメディアワークス  
KADOKAWA 角川書店 KADOKAWA

定価 本体590円

※消費税別価格となります



和ヶ原聡司  
はたらく魔王さま!

【行方不明のドツボに落ちる魔王を見つけた精神!】

和「一寸先も見えぬ!」  
和「……」  
和「何も言わんの?」  
和「……」  
和「……仕事するから何か買って」

【電撃文庫新装】

はたらく魔王さま! 1~12  
はたらく魔王さま! 0

イラスト 029

いつも差し入れて頂くお書きを作業中にもぐもぐして生きています。2015年も魔王さま! とともに楽しくお読みいたします。



## CONTENTS

**魔王、普通の生活を堅持する**

P011

**勇者、新たな道を探し始める**

P061

**魔王、ダンテナンスを語る**

P173

**魔王と勇者、取引を持ちかけられる**

P251

**純専**

P316



# はなごころ つむぎ

12

Kanako Wagahara  
Illustration ■ Genbu

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029





雪が、おどろおどろしい



和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

Satoshi Wagahara

Illustration ■ Oniku

12







THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY  
ASTOR LENOX TILDEN FOUNDATION  
500 5TH AVENUE  
NEW YORK, N.Y. 10018



住み慣れた我が家というのは、何ものにも換えがたい安心感をもたらす。

例えば旅行に出たとき、道中宿泊した宿がどんなに素晴らしいとしても、不意識と偶然とした我が家に増宅すると、旅の終わりの寂寥と共に奇妙な安心感を覚えるものだ。

だが、

「なんだよこれっ!!」

彼の場合、

「魔王様と私の魔力の塊だ。他に置いておける場所が無い」

しばらく家を空けていたと思つたら、

「はあ? 魔力の塊? バカじゃないの? お前達バカじゃないの?」

「久しぶりに帰ってくるなりその物言いか」

「当たり前だろ! 色々突っ込みたいの、きつと僕だけじゃないぞ?」

住み慣れた「我が家」が壊れ取られていたのである。

長きに渡る入院生活から解放された彼等半蔵は、ようやく帰ってきたヴィラ・ローザ様邸

二〇一号室にあつた「白室」である押入れの上の段が、新聞紙とビニールひもでくくられた、微妙な柔らかなさを持つ巨大な半蔵状の遺物等に占拠されているのを見て目を丸くした。

彼等にしてみれば、訳の分からないまま強制的に入院させられて、監視付きの病室から出ることもままならず、やつと帰ってきたと思つたら私室が封鎖されているのである。

その上私室を隠れているものが、自分達の生命エネルギー源とも言うべき魔力ときた。

これまで凄原はもちろん、今凄原の抗議を右耳から左耳へ受け流すところかはね返している。声聞四郎も、二人の主にしてこの部屋の主でもある真奥真夫も、この魔力が無かったからこそ日本で悪魔の身にあるまじき不自由を強いられてきたのである。

だが今押し入れを埋める魔力の総量は、ちよっと測っただけでも、魔王サタン全盛期もかくやというほどのレベルである。

真奥と声屋が今更魔力と暴力で日本に覇を唱えるつもりが無いことは凄原にも分かる。

だからと言ってこれだけの「資源」をただ無為に貯蔵するだけで、これまでと変わらない生活を送ろうとしている姿勢にはさすがに理解をさせなかった。

「声屋お前これを有効利用しようとは思わないわけ？ 資源やお金は、そこに置いておくだけじゃ価値を生み出さないんだよ？」

「貴様に金のことを今更教授されるいわれはない。先々のための貯金だと思え」

「老後はたまた貯金取り崩しながら生きるつもりかよ？ 声屋ってそんなに野心の無い奴だったわけ？ せめて生活環境を改善しようとか考えなかったの？」

凄原の必死の訴えに、声屋は本気できょんとした顔で問い返した。

「生活環境を改善？ どういう意味だ？」

「どういう意味って……」

真顔で問い返されて、それがあまりに意外で、渡原は虚を突かれ一瞬言葉を失つてしまふ。  
 「い、いや、だからさ」

渡原は押し入れを開け放ったまま、きろきろと部屋の中を見回した。

「そ、そうだな食費！ 魔力は僕らの生命エネルギーだろ！ これだけ魔力があつたら、もう食事なんて必要ないんじゃない？」

渡原はそう言いながら冷蔵庫に飛びつくが、扉を開いてみれば中にはこれまで通りの肉、野菜、魚、牛乳、豆腐、納豆、各種調味料などが入っていて、それが声屋の落ち着く音段の幅域であることは渡原もよく承知していた。

「食事は生活の基本だ。魔王様のお働きのおかげで、一日三食を食べるだけの余裕はあるのだ。無闇に魔力を消費することもあるまい」

「声屋が言つてることのおかしさを一言で表す言葉が僕の語彙に存在しないのが悔しい！」  
 渡原は冷蔵庫の扉を叩きつけるように閉める。

「じゃ、じゃあ電気水道ガスなんかは、もう使わなくて平気だろうか」

「魔力で電子レンジが動くか」

「動かせる魔大元帥だろ」

「魔力で日本の交流電源対応の電化製品が動かせる電撃を延々出し続けられればいいな。雷撃の魔術などに比べて極めて小さな力だ、我々にはさぞ難しい微細な調整が必要だろう」

「う……じゃ、じゃあ……」

漆原はまたも言葉につまり、はっと思いついたように手を広げた。

「そもそもこの部屋だより」魔力が戻ったってことは、人間の法律に従う道理も無いだろう。暴力的な手段を使えば言わないけど、いくらでも人間様ってこんなボロボロアパート出て、せめて一人一部屋でもっと広いキッチンがあつて風呂トイレ別のマンションに引っ越したっていいんじゃないの？」

「一年前の私なら、同じことを考えたかもしれないが」

「……いや、その、同じこと考えられてたら考えられてたで、僕はお前の悪魔大元帥としての器の小ささが嘆かわしくなるんだけど」

一年前といえば、まだ漆原は身の回りにいる人間達との交流が全く無い頃である。

吉屋四郎は、悪魔大元帥アルシエルは日本や人間へのいくばくかの情も無い頃から、広いキッチンと風呂トイレ別のマンションに引っ越したがっていたのかと思ふと漆原としてもやるせなくなつてきてしまうのだが……。

「今の我々にはこのアパートを出る特段の理由が無い」

「なんでだよ」いつも色々と設備面でぐちぐち言つてくるくせに」

漆原は魔力を利用してもっと整えたいことをしようと言いたかったはずなのに、いつの間にか魔力を利用していかにか快適な生活環境を作るかに話題がシフトしてしまっていることに氣

づいていない。

「それはもちろん、調理台は広い方がいいし、私の身長ではこのキッチンが低すぎる。ペランダがあつた方が洗濯物も干しやすい。佐々木さんがいらつしやるときに男物の下着が日に見える場所に干しっぱなし、という状況は良くないことだと思つてゐる。だがキッチンの高さも致命的な障害というわけでもないし、洗濯も工夫次第でどうにでもなる」

「だからあ……」

「それに、引越すと言つてもどこに引越すつもりだ。考えてもみる。今や佐々木の町には地味も多くでき、我々の生活に必要なものは全て揃つてゐる。翻つてアパートの「二重所」のことを考えれば、隣にはベルが住んでいて、下階はノルド・ユステイナ。住人全員が全員の事情を理解している集合住宅など滅多にあるものではない。その上基本的には敷同士の関係だから、近所付き合いで過剰に気を使う必要もない。私は新しいマンションに引越して、その隣人に貴様の存在を随分考へただけで要領になる」

「日本全国のニートに謝れ！」

「やる必要性が微塵も感じられんな」

「齊屋はふんと鼻を鳴らす」

「それに引越したければ電気ガス水道テレビの手続きをしなければならんし、引越した業者も頼まねばならん。住民票だって移さねばならないし、銀行やクレジットカードなどの手続き

も……」

「たあああああー だからー そういうの全部魔力一括で……」

くどくどと生活環境を改善しない理由を並べ立てる宮屋に、漆原は痺れを切らしてじたばたしはじめが、宮屋には寸毫の動揺も無い。

「だから魔力を使わなくても今の我々の生活を維持するのに一切の支障が無いということが何故分からんのだ」

「まずこの生活を維持しなきゃいけないって前提条件を曉えよ……」

「何を言う」

宮屋は心底呆れたように押し入れを、否、開室を指差した。

「我々が日本の、もっと言えばこの世界の規範を外れて行動しはじめることを、許すあの人と思ふのか」

その瞬間、

「さすがは宮屋さん。弁えていらっしやいますわね」

縮説されている事実を無視し、自動で勢い良く開く二〇一号室の玄関の扉。

「出たあああああああああああああああああああああああああああああああああ？」

そこに立っていたのは共用廊下に差し込むくすんだ陽光すら接光の如き神々しさへと変えてしまふ、クリムゾンレッドの髑髏に極楽鳥の羽根を突き立て、クリムゾンレッドのエナメル

ピンヒール、クリムゾンレッドのフレアスカート。クリムゾンレッドの元はゆるふわ今はめちよむちよなカーディガンを羽織った、いつもよりいささかラフな格好のヴィタ・ローザ嬢の大家、志波美輝だった。

「人間相手に弁えるている訳ではありませんが、常に合理的であろうと思っておりますので」「いい心がけですわね。漆原さんも、あまりやんちゃなことを仰るものではありませんよ」「ひ、ひ、引越しててそんなやんちゃ行為に分類されるわけ!?」

漆原は志波から少しでも距離を取ろうとして意図に身を寄せるが、それでも志波の影響からは逃れられないらしい。

「漆原の紫の髪色が少しずつ薄くなってゆき、数秒の後には薄く茶みがかった銀色に落ち着いてしまった」

「わわわまた色がーもう勘弁してくれよー」

「まーそう言うなよ、似合ってたんじゃない。大園イメチェンって感じするし」

「うるさいよー お前も何へらへらしながら大家さんと一緒に行動してるんだよー」

漆原の髪色の変化をからかい半分で茶化したのは、勿論戸屋でも大家でもない。

大家の傍らに立つ、青髪と同じくらい上背のある大男だった。

髪色は今漆原と同じ青みがかった銀色。

秋も深くなってきたというのに相も変わらず「I LOVE LA」の半袖T



シヤツを着用している青年は、肩を凍めた。

「お世話になってるしね。ミキタイが困かけるんなら荷物持ちくらいしなきゃダメかなって」

「お前はお前で今の自分に要開持たなすきたろ!!」

セフィロトの守護天使の称号も今や昔か。

大天使ガブリエルは、忠告の荷物持ちに甘んじることに全く抵抗が無いらしい。

「あ、タレスティア・ペルがね、お宅の押し入れに魔力塊が詰まってるって防音効果が高いらしくて、そのままとしといてほしいって言ってたよ」

「どいつもこいつも、もおおおおおおおおおお」

遼原は今度こそ頭を抱えて謙遜することなく叫び声を上げる。

そんな苦悩をスルーして、高屋はガブリエルに尋ねた。

「ペルを訪ねて大家さんがいらっしやることは聞いていたが、貴様が来るとは知らなかった。一体ペルにどんな用があったのだ」

「んー、僕は今言った通り、本当にミキタイの荷物持ちしてるだけなんだけど」

そう言う彼の大きな手には、タリムゾンレッドのワニ革ハンドバッグが抱えられている。

「こっちがね、とにかく誰かに話を聞いてもらいたいからって。ミキタイが付き添えば少しは話聞いてくれるかもって思ったから僕からお願ひしてみたんだけど」

ガブリエルは頭を掻いて、後自身の長身と忠告の体積で完全に埋まっていた二〇一号室の玄

間から、一歩身を引く。

ガブリエルが身を引き、大家の体のわずかな隙間から見える向こう側に立ったのは、一人の女性だった。

「まあ、残念ながら喉の痺だったわけで」

ガブリエルが苦笑しているのが声だけでも伝わる。

「無理もあるまい」

声屋もまた、そこに立った女性に向けて言った。

「クレステイア・ペルにも物語話を聞く義理は無いはずだからな」

「彼女は聖職者だからそんなあからさまにやないけど、それに近いことを言われたかな」

「私のやり方が決して賣められたものではなかったことは重々承知しているわ……でも、本当にもう、どうしようもなかったから……」

大家とガブリエルに連れられて現れた女性は、悲愴な声で声屋に訴える。

「お願い、サタンに会わせて。もう一晩、話を聞いてほしいの」

「断る。来たら追い返せとの命令だ」

声屋はするような大天使ライラの声を、冷徹に斬って捨てた。

「魔王様はご多忙の身だ。特に最近ではエミリアのせいで仕事のお疲れが蓄積しているし、最前にも大変にお辛い思いをされたばかりだ。これから新しい事業に関わる身で、これ以上負担を

おかけするわけにはいかん」

これまで女性に対しては常に紳士的な対応を取ってきた芦屋だが、今この女にはわずかな隙も見せるわけにはいかない。

「言うまでもないこととは思いますが、もし魔王様の勤め先に押しかけるような真似（まね）をしてみる。

金輪際、貴様は魔王様に目通りすることは叶わなくなる。分かったら去れ。今の貴様が何を言おうと、我らの主の気持ちは変わらない」

「そんな……」

女の顔と声が花壇に暮れる。

「出直すのが上策でしょう。無理強（むりこわ）いしても、良い答えは得られせんよ。私も窓口にはなれませんが、気持ちを無理に曲（ま）げさせることはできませんしね」

志波（しな）が促（う）すと、ライラは微（さ）かに頷（うなづ）いて、芦屋に小さく一礼してから去っていった。

「まー仕方ないか。ごめんねミキティ、無駄（むだ）足になっちゃって」

「店子（みせこ）の様子（ようす）を見るのも大家の務（む）めですから」

「そう言（い）ってくれると助（たす）かるよ。ああ、僕（わ）ちよつと二人に話（わ）があるんだけど、残（のこ）っていていい？」

「構（わ）いせんよ。夕食（しゆじき）の時間（じかん）までにはお戻（もど）りなさい」

「はいよー」

芦屋（ろや）の目（め）から見れば信じがたいほどフランクに志波（しな）と接（あ）するガブリエルは手に持（も）っていたハ

ンドバッグを志波に爆すと、去つてゆく二人に向かつてへらへらと手を振った。

「つれないねえ」

そして、皮肉げな笑みを浮かべて声屋を振り返る。

「我々は悪魔だ、天使が相手なら、これが普通の反応だと思つうが」

「ま、そうかもね」

声屋の厳しい声色に、ガブリエルはそれ以上は食い下がらなかつた。

「これまで恐ろしいほど気長ありにやってきたんだ。ここでも焦つても仕方が無いってことは、

ライラも分かつてるはずなんだけどね。この局面だと、どうもいかないんだろうなあ」

## 第 五 章

エンテ・イストラに囚われた悪魔を無事に助け出した真奥達を待っていたのは、徳原の入院と、ヴィラ・ローザ病院の大床、志波英輝による「世界の真実」の開帳であつた。

徳原の病室で、志波は語つた。

エンテ・イストラと地球という二つの世界は、言葉通り異世界でありながら、一つの宇宙の中で繋がっている。

その事実が周知に事態を動かすものではないが、それでも二つの世界を行き来する者達と事

象に新たな物事の捉え方を与えるには十分すぎる情報だった。

二つの世界は人知を超えた次元の接触を起こしたわけではなく、同じ宇宙のどこかで同じ物理法則の下に存在し、現状では無理でも遠い将来「ダート」を使わずに相互に行き来できる可能性は理論上ゼロではないということになる。

そして、それは悪魔達の生きる「魔界」すら例外ではない。

悪魔の住む世界は地の底や神話の古代ではなく、宇宙に浮かぶ星の一つに存在した。ならば「天界」は？

これまで階段となく真実や悪魔達の前に立ち上がった生ける存在、天使達の生きている世界はどこにある？

『天』と『魔』に挟まれたエンテ・イスラの民がそれを知った瞬間、魔王と天使と人が一所に集まる病室に現れたのは、一人の天使であった。

大天使ライラ。

天界の住人。幼いサタンの命を拾った存在。セフィラ・イエソドから生まれた少女達の『母』。そして何よりも、エミリア・ユステイーナの実の母。

これまで真実達の周りにかすかな気配だけを残していた天使が遂にその姿を現した瞬間明らかになったのは、世界の新しい真実でも、全てを解決する伝説の聖具でも、理想郷への道でもなく、実の母親の、絶望的なまでに煙のがたい漢であった。

これまでの日本での生活の中で、恵美は自分の身の周りに起こった悲劇もトラブルも、元を辿れば大体がこの母に起因するものだということを知った。

だがライラを、母を目の前にした恵美の頭の中にあつたのは、それらの不幸運に対する怒りや悲しみといった負の思いではなかった。

ひたすら真っ白になった頭が体に命じたことは、存在の拒絶であつた。

傍目には恵美が無表情のままライラに往復ビンタをかましているだけに見えたのだが、その実、恵美は母に対して憎しみや青豆ちをぶつけていたわけではない。

かすかでも自分が目の前の存在の面影を睨んでいるなどと思いたくもなかった。平手打ちの連打の最中、恵美はライラの顔を見ているようで、見ていなかった。

真美に止められるまで、視界すら真っ白であつたように思う。

気がつけば顔を真っ赤に腫らした「どこかの誰か」に父が寄り添い、父と「どこかの誰か」を恵美の視界から隠すように真美の体が目の前にあつた。

エニシロの長袖シャツの布目を眺めながら、恵美はエメラダが自分の手を押さえていることに気づいた。

二人が自分を止めたのが分かった。何故止められたのかは分からなかった。

それでもきつと、このまま「どこかの誰か」を拒絶し続けることは、この場の全員が許さないただろうということを恵美は理解した。

そして、恋愛は何も聞かないまま、アラス・ラムスをアシエスの手から奪い去ると、それ以上ライラに一言もくれずに瀧原の病室から立ち去ったのだった。

巻

「せめて君だけでも話聞いてやればいいのに」

「やだよ。お前だって僕が面倒くさがりなの知ってるだろ……ああ、ようやく髪の毛の色が戻ってきた」

ライラと大塚が去り、ガブリエルだけが残った二〇一号室の中で、瀧原は伸びた前髪に目をやり色が戻ったのを確認する。

「だって魔王やエミリアが話聞かないんなら、君が聞くしかないじゃん。ある意味唯一の、当時の関係者なのに」

「知らないよ。僕自身は好きで巻き込まれたわけじゃない。まあ、あの退屈な世界から出るきっかけを作ってくれたのは感謝しないでもないけど、昔すぎて正直なところ記憶も曖昧なところだらけだし、結局あいつら、僕を無責任に放り出してくれたからね。そこでチャラだよ」

「なんの語が知らんが、どうして貴様は当たり前のように部屋に上がり込んでいるのだ」

「別に、君達が頑なに彼女の話を聞かない理由はなんなのかなって思ったただだよ。それに、

そういう君も陸軍を顧しながら当たり前のように僕にお茶を淹れてくれるあたり、魔王軍は教育が行き届いてるね」

魔屋は覗みつける視線だけはそのまま、ガブリエルの前に煎茶を差し出す。

「これは貴様に出すのではない。大家さんの付き人に出すのだ。大家さんの後ろ盾が無ければ、貴様などには基どころかこの部屋の空気すら吸わせたくない」

「手厳しいねえ。ま、来るなり魔王にぶつ飛はされないだけマシかな。いただきます」

特に感じ入ることもなく、ガブリエルは熱湯す湯のお茶にも躊躇わずに口をつける。

「まあ真鳥は、一度ケジメつけたらあんま後には引きずらない性格してるしねー」

「引きずっててはしくないなあ。本当、あんな痛い目見たのいつ以来か記憶に無いくらい昔だったからなあ」

魔屋の言葉にからっと笑うガブリエルだが、実際のところエンテ・イスラ東大陸での戦いでアシエスの力を得た真鳥から致命傷に近い傷を負われ、日本に連れてこられた後は志波宅で完全看護されていたほどである。

そこからどのような経緯で志波の付き人のような真似をしはじめたのかは誰も知らないし知りたくもない。

「お前は大家さんと一緒にいて、体に異変とか無いのかよ」

志波が近くにいと髪の色が抜けてしまう津原は嫌そうに聞く。



「んー、別に何も。なんだかんだでミキティ機のこと大事にしてくれるし？ 体や日本の環境  
考<sup>かんが</sup>えて聖法<sup>せいぽう</sup>氣の使用は制限されてるけど、まー普通に生きてく分には聖法氣を無<sup>む</sup>闇<sup>あん</sup>に使う場面  
なんか無いからね、この国、折角一つで大体の家電動くしき」

「お前もか」

夢魔はげんなりして畳の上に腰を下ろした。

「ところでさ、さつきアルシエルが、魔王が辛い<sup>くるしい</sup>思いした、みたいなこと言ってたけど」

「……」

ガブリエルの言葉に夢魔の顔が弛<sup>しな</sup>張<sup>は</sup>る。

「君が気分悪くすること承知で聞くけど、何かあった……っていうか、やっぱライラが原因？」  
夢魔の病室でライラが明かした事実<sup>じじつ</sup>は、真奥達に間違<sup>まちが</sup>いなく大きな影響<sup>えいさう</sup>を与える話ばかりだ  
った。

だが、ガブリエルの目から見ても体も心もタフにできている真奥貞夫<sup>まおくさだお</sup>という男が「あの程  
度」の語<sup>かた</sup>で病<sup>や</sup>んでしまうとも思えない。

「そ、それは……」

夢魔が珍しく口こもった。

「え？ 何かマシな話？」

夢魔の反応に驚いたガブリエルが畳み掛けるが、

「ぶふっ」

漆原の方が、遂に耐え切れずに噴き出してしまった。

「あはははははー いやー、多分声屋が言ってるの、アレのことでしょう？ 傷ついたとか大げさなんだよ。よくあることだって言うじゃん？」

「黙れ漆原！ 貴様は魔王様のご心痛をなんと心得るか！」

「心痛も何も、自業自得じゃん」

「は？ 何？ よくあることってどういうこと？ 自業自得って？」

ガブリエルの問いに声屋と漆原は対極の反応を見せた。

「まー、折角頑張ったのに、あんなことになったんだから気の毒と言えば気の毒だけどさ」

漆原はにやにやしながら言った。

「真奥、遂に免許取ったんだよね」

「メンキョ？ どゆこと？ メンキョって運転免許のこと？」

ガブリエルは、予想だにしない言葉に首を傾げる。

「確か今日までに提出とか言ってたから、今日の真奥はずっと囚んだ気分です仕事してるはずだよ」

「……漆原、今日は貴様、飯抜きだ」

「なんだよ！ 本当のこと言っただけだろ！」

「我々が顔をしのいでいられるのは魔王様のおかげなのだぞ、口を使め！ 真実であっても、秘めておかなければならないことはある！」

「だからもう魔力があるからそんなあくせく労働する必要ないって言ってるんだろ！」

「貴様はもう少し『仕事』というものの精神的な重要性を認識しろ！ 労働と仕事というのは厳密にだな……！」

「僕に言わせりゃ仕事も労働も同じだよ！ 僕の耳に念仏だね！」

「言ったな浅慮！ 今日という今日は許さんぞ！」

「あのさあ……二人共さあ……」

ガブリエルの存在を忘れ、二人の悪魔大元帥の、不毛を通り越して実りが時間を進行して種まで戻りそうな言い争いは、それから夜まで延々続いたのだった。

マダロナルド轄々谷駅前店は夜十時を回ろうとし、本崎が関もなく勤務を上げる音達に声をかけてまわっている最中だった。

二階のカフェに入っていた千鶴に声をかけにきた本崎は、フロアの隅で空席テーブルを拭きあげている真奥の背を見て噓いた。

「今日のまーくん、なんだか表情が暗いようだが、何か知らないか」

「えっ？ あの、その、ええと」

水崎の問いに、千穂は乾いた笑いを上げるしかなかった。

魔界の王であり、マダロナルド・輔<sup>タツノ</sup>谷駅前店の店長代理として日頃陽気な笑顔を浮かべる真奥貞夫の表情には、今日に限って近しい者だけが察せられる陰りのようなものがあった。

笑顔に無理がある。

真奥は一日置いている店長の水崎真弓はさすがに目ざとく、彼の不調を一発で見抜いた。学校終わりに出勤してきた佐々木千穂は、水崎の問いの答えを知っている。

知っているが、こればかりは本人が明かさない限り、江國に居る人間がどうこう言っていない話ではなかった。

「私もちゃんと知らないんですけど……その、真奥さん、失敗しちゃったらしいんです」

「失敗？ まさかまた原付免許の試験に落ちたのか？」

「ああああああいえ、そうじゃないんです、免許はちゃんと取れてるんです！」

水崎の無遠慮な声が真奥に聞こえやしないか、千穂は気が気でない。

「ならいいが、デサバサ……業務開始日前というところで、主力が免許試験に何度も落ちたとなれば士気に関わるからな」

「で、ですよね……」

結果的にはあるが、真奥は二度、運転免許試験に落ちている。

一度目は絶然たる点数不足、二度目は試験音漏れ。

両方ともやむを得ない事情があったのだが、それはそれとして同じチャンスを二度も逃した真真に、原動機付二輪車運転免許試験は深い習根を残したと言える。

それでも真真は果敢に挑戦を続けた。

エンテ・イスラの騒乱を乗り越え、日本での生活を立て直し、宿敵たる東美のマダロナルド・タルー探用や、自分の願望の原点とも言える大天使ライラの邂逅などを経て、真真は新たなステージに突入するはずだった。

だが、運転免許試験は、最後の最後で悪魔の王に非情なる刃を向けられたのだ。

「ふむ、少し尻を叩いてやるかな。まーくんがアレでは圓りに示しがつかんし、もし何か悩んでいることがあるなら、まーくんとして人間だ。誰かが支えてやらねばなるまい」

「あ、あの本崎さ……ああ、行っちゃった」

まーくんはそもそも人間じゃないのだが、とにかく藤下の心理状態を気にかける理想的な上司は今、悪意なく残酷な問いを発しようとしていた。

「まーくん、今日はどうした。動きに精彩を欠いているぞ。何か悩みでもあるのか？」

「あ、い、いえ……悩みなんてそんな……」

「そうか？ 君も超人じゃないんだ。何か悩みがあるなら、あまり溜め込むものじゃないぞ」

「は、はい……」

「あ、良かった、なんとかなるかも」

真奥と本崎の会話を遠くから聞いていた千穂は、本崎が真奥にあまり強く踏み込まなかったことに胸をなで下ろしかけて、

「ああそうだ。後で君の免許証を見せてくれ。デリバリー業務に就くクルーの資料として控えておかねばならないのぞな」

「あ」

すぐに凍りついてしまった。

見れば真奥も、明らかに細を強張らせている。

本崎はプライベートの痛みに踏み込んでくるようなデリカシーの無いことはしないが、仕事となると話は別だ。

従業員を監督する立場として、万が一にも無免許運転などということが発生しないよう管理する義務がある。

だがその免許こそが、真奥の憂鬱の原因なのだ。

「み、見せなきゃ、ダメですか？」

「当たり前だろう。何を言ってるんだ。丁度お客様はいないようだし、ちーちゃんがまだいる間に下に来て提出してくれ」

「わ、分かりました。……………はあ」

真美はまるで花刑を宣告された罪人のような絶望的な表情を浮かべ、水碓の後に続いて階下へと下りていった。

「真美さん……」

千穂は真美の様子を、遠くから沈痛な面持ちで見つめる。

千穂は真美が元気を失っている理由を全て把握している。他ならぬ千穂自身、誰にも話したことは無いが同じ悩みを抱えているからだ。

ただ、千穂と真美では、抱える悩みの性質は同じでも、その悩みが解決するまでにかかる時間は天と地ほどの差がある。

だから千穂は、軽はずみに真美を助めることなどできはしないのである。

「やっばり、まーくんどっか変だよなあ」

一方、水碓と同じように真美のかすかな異変に気がついていた同僚タリーの川田武文は、水碓に進行される真美の姿を見てぼつりと溜めすが、川田と同じ一階ボジションにしている恵美は川田の意見を華麗にスルーした。

「そんなことないと思いますけど」

恵美も千穂と同じく夜十時上がりになっており、今のうちにできる仕事を手早く片付けているため川田の声にも顔を上げずに答えている。

「そうかなあ。なんか動きも遅かった気がするんだけど」

「拾い食いでもしてお腹填したんですよ」

「拾い食いって」

川田は恵美の物言いに苦笑した。

「最初頃から思ってたけど、遊佐さんでもしかしてまーくんのこと嫌いなの？」

「幸いにして、好きだったことは一度もありませんね」

はつきり言い切る恵美に、川田は苦笑する。

そこで会話は途絶えたが、そのとき丁度千穂が二階から下りてきた。

時計を見ると十時を少し回っている。

「それで、原因はなんなの？」

恵美はカウンターの内側から身を起すと、しょんぼりした千穂に少しだけ怒気を和らげて尋ねる。

すると千穂は顔に負けずにしょんぼりした声で言った。

「……免許証です」

「免許証？」

「正確には、免許証の顔写真です」

「ああ」

「どういうこと？」



「二輪の免許を持っている川田は何か気づいたように手を打ち、運転免許証を持っていない恵美はなんのことが分からずに首を傾げる。」

「もしかして、変な顔になっちゃった？」

「そんなんです……」

「はあ？」

川田の指摘を千穂が肯定し、恵美は真剣に呆れた声を上げる。

「免許証の顔写真がその、気に入らないらしくて」

「そんなことで、あんなに落ち込んでるわけ？」

「私はよく分からないんですけど、免許証の顔写真を免許センターで撮ったらしいんです。カワちきさんでバイク乗ってますよね？ 免許の写真ってそういうものなんですか？」

「うん、そうだね。結構流れ作業でパシャパシャいくよ」

「それで何か、真実さんが言うには『一瞬の隙を狙われた』らしいんですけど」

「でも証明写真の顔の写りをなんてそんなものだと思うけどね。大学の友達の話聞いても、大体みんな不満言ってるよ」

運転免許証は身分証明書として機能することは誰でも知っているが、その性質上掲載されている写真の内容にはかなり厳密な決まりがある。

眉毛が隠れたり、表顔や顔の形を類推できなくなるような髪型や服装や背景は認められない

し、基本的には無表態で写る必要があるなど、他人がその個人を識別できないような写り方のものは一切認められない。

逆に条件を満たしてさえいけば免許更新時に持参した写真を使用することもできるが、それでも各免許センターや警察署で撮影されたものを使うのが一般的だ。

そして一度に多くの人間が免許取得および更新にやってくる都合上、ルールに達した写真さえ撮影できれば随分直しなどということとはまず起きない。

結果手渡された免許証に掲載される写真は、往々にして想像したものと違う写り方をしているものなのだが……。

「その、私も学生証の写真が暗黒とか失敗しちゃったんで、そんなものですよーって言つて照めようと思つてもらつたんですけど……」

千穂はもじもじと視線を泳がせる。

「その、鼻が……」

「鼻……」

「鼻の穴が、丁度大きくなった瞬間だったみたいで……」

千穂が困惑して言う。

真実<sup>マコト</sup>に想いを寄せていることを隠さずともしない千穂がそこまで困惑するからには、それなりに昔の真実の容貌<sup>モウバウ</sup>に比して違和感があるのだろう。

もちろん免許センターの職員が免許証に適合した写真と判断したのだから、真実を知らぬ人が見れば当たり前前の証明写真にしか見えないはずだ。

しかし彼と書校授している人間にしてみれば、きつと面白い顔になっているに違いない。折悪しくそんな瞬間に、木崎に免許証を提出してきたらしい真実がカウンターの前を横切つてしまう。

千穂も川田も、真実の顔が意地悪く笑うのを見逃さなかった。

「ちよつと見せなさいよ」

「あ？」

「免許、面白い写真撮れたんでしょ。見せなさいよ」

その瞬間、真実はこの世の終わりのような悲痛な顔で、千穂を見る。

「ちーちゃん、裏切ったな？」

「あ、えっと、その、あの、ご、ごめんなさいい！」

千穂はバイザーを手にしたまま視座を泳がせると、きつと身を翻してスタッフルームへと逃げた。いつてしまった。

「千穂ちゃんは無くないわ。私達が無理やり聞き出したのよ。私免許持っていないから見てみたいわ。どんな感じになったの？」

「誰がお前になんか見せるか！ お前もとがりだろきつきと燃れ！」

「いいじゃない減るものじやなし」

「俺の所持と壽命と精神とその血色々なものが減る——爆れ——失せろ——もしくはお前も免許取って変な顔で写っちまえ——」

「なんだかなあ」

そんな三人の様子を見て、真奥の後から出てきた木崎が厳しい声色で注意する。

「こら、何をしているお前達！ まだ営業時間中だぞ！」

別に騒いでいたわけでもないのに、一緒に怒られた川田は首を捻ってため息をついた。

「ひたすら煩した気分だ」

深夜0時半、閉店作業を終えた真奥は電源を切った自動ドアの扉を外からかける。

昔ながら駐輪場に来ればシタイサイクル・デムラハン式号を前に大きく伸びの一つもすると、今日の真奥には仕事を終えた者の達成感や解放感といったものは皆無だった。

「番生、真奥の奴……」

真奥は結局真奥に免許証の写真を註銷されて休日になっていた。

「免許の写真、そんなに気に入らないの？」

真奥と同じ時間まで残っていた川田が通勤に使っているバイクに跨ったまま尋ねると、真奥



は胸を落とす。

「木崎さんにもちよつと笑われた」

「そ、そりやあ、災難だったね。そこまですとなると僕も見なくなってきたよ」

川田はヘルメットをかぶりながら言う。

「絶対嫌だ！ つたく恵美が来てから本当ロクなことがねえ」

「いいじゃん、最近遊佐さんも元気なかったし、面白写真のネタでタリーの活力を取り戻したと思えばさ」

「ええ？」

真美は川田の言葉に目を瞬かせる。

「誰が元気なかったって？」

「誰って、遊佐さんが」

「どこがだよ」

「どこがって、なんとなくそう思っただけなんだけど」

川田はヘルメットの具合を確かめながら何かを思い出すように視線を上げる。

「遊佐さんが採用されてすぐくらいかなあ。一日だけの凄く落ち込んでるっていうか、元気の無い目があったの気づかなかった？ あの日には木崎さんいなかったから、まーくんは間違いないはずだけど」

「ああ」

川田の言う「一旦」、仕事中の惠美の様子は覚えてはいないが「落ち込んでる」原因についてはよく分かっている。

「それで、シフト的には僕が次に一緒になったのは三日後くらいだったけど、第一印象通りに戻ってるようで、まだどこか神経質になってるところが見えたというか……」

「カワっち、惠美のことよく見てんな」

「変な誤解しないでよね」

真奥の言葉に、川田は少しだけ慌てたように手を振る。

「遊佐さん、なんだかんだで注目の的だからさ。木崎さんが最初から随分見込んでるし、まーくんやまーちゃんも前から知り合ってたから気にしてるだろう？　なんかつい見ちゃうんだよ」

「あいつはやめとけよ。本当、面倒な奴だぞ」

「だからそういうんじゃないっつたらー」

夜の闇でも、川田の表情が慌てふためいているのが分かる。

「と、とにかく、まーくん、遊佐さんの研修担当なんだから、少しさういふところ気を配ったら？　彼女、強そうに見えて忘は案外脆いかもよ」

「……」

真奥は少し呆気にとられる。

「……カワっち、本当によく見てるな」

川田が東美と過ごした時間など、東美がマダロナルドに採用されてからのほんの数日ではないはずだが、その短い間に東美の人間性を確実に見抜いている。

「だからあー」

「いや、本気で感心してんだよ。カワっち、今からでも本当にカウンセラーとか目指した方がいいんじゃないか？」

真美は朗と本気で言っているのだが、川田はバイクのエンジンをかけると首を横に振った。

「やだよ。他人の人生に責任なんか持ちたくないし。最初からそういう道目指してないしさ」

「……そりゃまあ、な」

「それに確かにいろんな相談事は持ちかけられる体質だけど、友達や知り合いだからなんとかそうかなって思うこと話してるだけで、僕の言うことが正しいなんて保障はどこにも無いからね。薬佐さんに、僕がこんなこと言ってたなんて言わないでよ」

「言わねえよ。まあ、一応心には留めとくけどな」

「頼むよ。んじや、またね」

川田は一瞬黙わしげな目を真美に向けるが、それ以上は何も言わず、テールランプを光らせながら帰っていった。

真美は川田のバイクが見えなくなるまで目で追うと、口を堅く引き結んだ。



「他人の人生に責任なんか持ちたくない、か」

川田が何げなく漏らしたその言葉は、思いがけずに真実の脳裏に深く刻まれる。

「全くもって、その通りだよなあ」

真美は駐輪場に駐めてあったデュラハン式号の鍵を外しながら一人ごちた。

※

「お、をねがうい……はなひをきいてはひいひい……」

あの日、睡れ上がった頭をもこもこ動かして床にへたり込みつつライラは言った。

「あなたから聞くことなんか無いわ」

少しだけ赤くなった掌を見ながら、真美は冷徹に言った。

「そこに直りなさい。素っ首刺ねてあげるわ」

「待ってくださいい……落ち着いて……」

「真美おいお前、それは機を斬る以上にマズいぞ落ち着け！」

エメラダが胸を導き、真美が真美の前に割って入っても、真美は止まる様子を見せない。

「どいて」

生死を共にした仲間のエメラダすら、生死を賭けて戦った宿敵であるはずの真美すら、見た

ことの無い冷徹な目。

「どいて、私は怒ってるのよ」

「そ、それは分かりますけどー」

空気が凍結するのではないかと思ふほどに冷たい声。

恵美は決して、ライラに對する怒りで我を忘れてゐるわけではない。

本気でライラを締めつけようとしているのだ。

「エメ、魔王、それにお父さんも」

恵美はエメラダと真央が背後に應うライラとノルドを視線で射抜く。

「私達は訳も分からずその女に振り回され続けてきたのよ。命の危機に陥ったことや、大切なものを失ったことも一度や二度じゃないわ。どんな理由があれ、その女が私達の周りでやってきたことは、許しなきゃいけないと思わないよ」

「で、ですがー」

「エメだって、この女に散々辱められてきたんじゃない。随分長いことご飯タカられてたんでしょ？」

「そ、それはその通り確かにそういうこともありましたがー」

エメラダは初めて日本に来た頃に、セント・アイレの法術監理院の私室にライラが監禁されており、していた時期があつたのを許して恵美に冗談半分のダチをこぼしたことを思い出し蒼白になる。

「でもそれはそのうちこまでするほどのことじやう」

「こままでつて何。まさかその女が私の母親だから託<sup>たく</sup>つてゐるわけ？」

「そ、それだけではありませんけれどこのままでは……」

「ええ、きつと救しちやうでしょうね」

「エミリアー」

エミラダは悲痛な声を上げるが、惠美を止める方法も言葉も見つけられないでいる。

「惠美—— 気持ちも分かるが冷静になれ！ 気持ちをぶつけるにしても、今じゃなくていいだろう？」

真央もまた、惠美の本気を測<sup>はか</sup>りかねているが、一つ間違えば今の惠美にはアラス・ラムスを聖<sup>せい</sup>剣<sup>けん</sup>化してライラに切りかかりかねない危<sup>あや</sup>うさが見て取れた。

「あなたに私の気持ちも分かるなんて言つて欲しくないわ。あなただってその女が神消滅<sup>しんしょうめつ</sup>なのは知つてゐるはずよ。今述<sup>の</sup>したら次に私達の目の前に現れるのはいつになると思<sup>おも</sup>うの？ 何百年、何千年後かも知ね。そうしたらあなた、私の代わりにその女殺<sup>ころ</sup>してくれる？」

「おい惠美……」

「……」

惠美と真央が睨<sup>にら</sup>み合う。

奇しくも魔王が天使と人間を睨<sup>にら</sup>み、勇者が天使と人間に好<sup>よ</sup>し牙<sup>か</sup>を削<sup>く</sup>ごうとしている瞬間に、

病室内の誰もが囁きを吞んで見守るが……。

「……冗談に決まってるでしょ」

恵美の方から、ふっと視線を外した。

「あなたは私が制すのよ。あなたに代わりを頼むはずないでしょ」

「ん……何かおかしい気もするが、今お前が思いとどまったんなら……」

「エミリア……」

それは、あまりに決断が過ぎるというものだった。

真美とエメラダの間を、一陣の風が駆け抜けた。

真美もエメラダも、恵美の長い髪が視界を横切るのを見るのが精いっぱいだった。

誰も確認すらできない恵美の超速度の移動を証明するのは、大きく閃いだ病室のリノリウム  
の床のみである。

振りがざされた拳には、恵美にしか為し得ない超速度の魔法気が凝縮されていた。

真美が追いつけたのは思考だけだった。恵美は、本気だった。

「まあ、落ち着きなつて」

だが、魔王も大魔法術士も制することができなかった怒りに逆巻く閃光を、黒い風が音も無く留める。

「本当に、普通の人間じゃないんですね」

「まるで自分は普通の人間だとでも言いたそうな口ぶりだね」

聖刻こそ隠らなかつたものの「普通の人間」が食らえば骨まで消し飛ぶほどの拳を涼しい顔で受け止めるのは、大黒天様だった。

さしたる力を入れるでもなく、まるで野球のボールを受け止めるような気軽さで、天祿は惠美の拳を片手で受け止めていた。

不意を打たれた真奥とエメラダは一拍遅れて背後を振り返り、惠美と天祿の様子を見て息を呑む。

「え、エミリア……」

「惠美……お前、そこまで」

「そっちはそっちで消滅しすぎだね。遊佐ちゃんがあとどう何パーセントか本気だったら」と天祿は背後に顔をしゃくつてみせた。

「おじさんの方は、この世から消えてたかもよ」

「……………」

天祿の背後には、震える体でライラを庇いながら、惠美から目を離さなかつたノルドの姿があった。

惠美はノルドを見ていた。父が決して自分から目を離さないであらうことは分かっていた。父がライラを決して見捨てないであらうことも分かっていた。だから真奥とエメラダを出し抜

いても、恵美自身、これ以上タイラに対して何かできると思っではいなかった。

タイラにはどんな非道なこともできる。だが、父にはできない。

恵美のこの行動はただの試験だ。

「帰るわ」

恵美は天幕から離れると、呆然とする真奥とエメラダには一言もくれず、

「え、エミ……」

「ま……」

アシエスからアラス・ラムスをはとんど奪い取るようにすると、濃厚の病室を後にした。

ドアが開まるまで、誰も声を上げることができなかった。

たった一人を除いて。

「なんだかよく分かりませんが」

手帳だった。

「私は一応、初めましてじゃないですよ、タイラさん」

「あ、あなたは……」

ノルドの背後で凝固したままのタイラ。

その前に臨く手帳。

「何があったか分かりませんが……きつと前るときと同じように、あなたは私の体を使った

「……そうですね？」

真美の因行に動揺する室内で、千穂の様子は一人青段と変わらない。

だがその顔は笑顔でありながら、得も言われぬ迫力を持っていた。

「ち、ちーちゃん？」

「真美さん、大丈夫です。少し話をさせてください」

千穂は声をかけてくる真美を振り返らず、真っ直ぐ正面からライラの目を見た。

「この部屋にいる間に遊佐さんが……エミリアさんが何に一番怒ったか分かります？」

「え……」

ライラは呆然として、千穂を見る。

何千年もの時を渡ってきた天使が、たった十七歳の少女の問いに言葉を失っている。

「前に私がこの病院に入院したとき、力を貸してくれましたよね。私、今の今まで感謝してなんです。あのとき、ようやく真美さんや遊佐さんの力になれたって思いました」

「そ、それは……」

かつて裁定の天使ラダエルが日本にやってきたときのこと。

ラダエルは天界を出奔したライラを捜す際にテレビの電波に乗せた捜査法術「ソナー」を

発信した。

千穂はそのソナーの影響を強く受けて昏睡状態に陥ったのだが、ラダエルとラダエルの背後

で閉鎖していた、ガブリエルを避けるに当たって、千穂の身に力を留めた何者かが存在した。

そのとき千穂は、自分に力を貸してくれた存在の声を聞いていた。

その声は間違ひなく、目の前の天使の声だ。タイラの声だ。

「でも、違ったんですね」

「え？」

「あなたは自分が前に出たくないから、仕方なく私に力を貸してくれたんですね」

「――」

タイラははっとして顔を上げると、千穂ではなく背後を振り返った。

今しがた恵美が出ていってしまった病室のドアは、特別室だけあって適当に閉鎖してもしつかり最後まで閉まるようになっていた。

「タイラさん、強いですよね。少なくとも『普通の人間』……ノバドさんよりは」

「あ……」

「エミリアさんだって話して分からない人じゃないんです。でも、どうしたってお母さんには色々複雑な思ひがあるのは分かれますよね。タイラさんがどうして今まで表に出てこられなかったかは分かりませんが……少なくとも今は、ダメですよね。前に出てこなきゃ」

千穂の献しい言葉にタイラは言葉を失う。

千穂が言う「今」とは、まさに言葉通り、恵美の拳を天狗が受け止めた瞬間のことだ。



亜美の思いが集った幸は、どのような形であれライラが受け止めなければならなかった。

だが実際には、ノルドと天祿とエメラダと真実（まこと）に成（な）われ、ライラは亜美の視界から倒置（たうし）にも隠された場所から「話を聞け」と叫（こゑ）ぶだけだった。

それは今までずっと亜美の神経を逆（さか）なでしてきた、見えないところからちよっかいばかり出（で）しては場（ば）を掻（か）き回（まわ）すだけだったライラの行動（こうどう）を象徴（しょうてい）している。

ライラが何か大きな目的（もく）のために動（うご）いていたのはこの場の誰（たれ）もが先測（さくそく）承知（しやうち）だ。

だがその目的（もく）のためにこの場の誰（たれ）かを巻き込（ま）むなら、立つべき時には自分が立たねばならなかった。

そして今ライラは、大きなチャンス（チャンス）を失（う）ったのだ。

今や人類（じんるい）最強（最強）の存在（そんざい）となった娘（むすめ）、エミリア・ユスサイーナに自分の目的（もく）を話すチャンス（チャンス）を。

「数々（かずかず）天祿（てんろく）さんに退院（たいえん）したいって言った僕（わ）だけど、病室（びやうしつ）内でこれ以上（いじやう）暴（は）れられても困（こ）るんだけど……うぐっ」

壁（かべ）原（はら）は空（くう）気を吸（ひ）き取（と）るによう吹（ふ）いて衣（え）流（りゅう）に流（なが）し目（め）を食（く）らったりしている。

「あ、わ、私（わたし）……」

ライラは重大（じゅうだい）な事実（じつじ）に気がついたように声（こゑ）を絞（しぼ）ごうとするが、千穂（ちほ）はいつそ非情（ひじやう）に徹（てつ）して首（くび）を横（よこ）に振（ふ）った。

「私は聞いても何もしてあげられませんし、エミリアさんに伝言（でんごん）もできませんよ。私は『普通（ふつう）

の人間」。エミリアさんの友達ですもん。友達が嫌がること、私できません」

千穂はそう宣言するとライラの返事も聞かず、すつと立ち上がってエメラダの手を取った。

「あ、あのう？」

「行きましょうエメラダさん、誰かが追いかけてあげなきゃ。多分、エメラダさんが一番適任です」

「そ、そうでしょうか。わ、私よりもベルさんや魔王の方が……」

「な、なんで俺だよ」

鈴乃はともかく、突然指名されて真央は慌てるが、千穂は首を振る。

「真央さんは絶対のためです。こんなことの後でめめめするような悪佐さんじゃありません。

今の悪佐さん、絶対に凄く怒ってます。そんなところに真央さんがのこのこ出ていったら火にガソリンです。世界征服を諦めるって言ったって断られちゃいます。今は悪佐さんが断りかかってこないからエメラダさんが鈴乃さんじゃないとダメです」

もの凄く分析もあつたものだが、千穂の言葉はなぜか全員の胸の中に違和感なく収まった。

「エメラダ殿、行ってくれ」

「ベルさん……」

千穂の言うことを理解した鈴乃も、エメラダを後押しする。

「千穂殿、この場は私が引き受ける。エメラダ殿を連れて早くエミリアを追ってくれ。今のエ

ミリアには舞臺條件に受け止めてもらえる相手が必要だ。それはこの場の誰よりも、エメラダ殿が適任だろう」

千穂とエメラダが病室から出ていってしまえば、残る人間はノルドと鈴乃だけ。

だがノルドは、どうしたってライラ寄りには行動できない。

そうなれば如何に志流や天降がいるとはいえ、事情を一から十まで理解する「純粋な真黒達の味方」がいなくなってしまう。

その点鈴乃は、知と力のバランスから言っても適役だった。

「分かりました！ 行きますし、エメラダさん、それじゃ津原さん、お大事に！」

千穂はエメラダの手を取ると、飄然と病室を飛び出してゆく。

後に残された真黒達は、呆然と扉とライラを見比べている。

打ちひしがれた様子のライラは目を見開いたまま床に手をつけて驚い息を吐いていた。

嵐のような展開に、真黒は眩暈を起こしそうになる。

最初は何百年越しの再会に喜ぶ気持ちは無いではなかったが、次々と巻き起こる予想外の展開にそんな気持ちは宇宙の彼方に飛び去ってしまった。

「ライラさんが地球にいらしたのは、十七年前のことでしたかしら」

そこに追い打ちをかけるような志流の言葉。

「十七年前の……」

真奥と西屋と鈴乃の聲が唱和する。

ノルドの語からも、真奥や恵美よりは先行しているのだらうと察しはついていたが、まさかそれはど前のこととは思ひもよらなかったのだ。

「待つていただきたい志波殿、十七年前ということば、つまりそれは」  
鈴乃は何度も、ノルドと大家の間で視線を往復させる。

「エミリアが生まれてすぐ、ということか？」

ノルドの問いに、ライラは小さく頷いた。

ライラが恵美を産んですぐ家を離れた際に、ノルドはライラを追いかけるように空を走る流星を見た。

「あなたと……エミリアが、見つかつてしまっただったから……」

天界の追跡を振り切ることは簡単だった。

だが今回はそうはいかない。

ノルドとエミリア、そして二人に預けたイエソドの欠片の存在を察知されてはならなかったのだ。

そのためには、ぎりぎりまで追跡者に自分を大きな獲物として見せておく必要があった。

「でも……さすがにそこまで接近を許すと全く振り切れなくて」

ライラ自身は大天使の称号を得てはいるものの、ガブリエルら守護天使のような像を圧倒す

る強大な力を誇っているわけではない。

直接的に比較してしまえば、恐らくサリエルやラダエルといった悪魔なのではなかろうか。

「それで、一瞬の望みを賭けて飛んでいらつしやったのが、地球、というわけですよ。現れたのはカイロの郊外。とても星が美しい夜でした」

「カイロってエジプトのか？　なんでそんな所に……」

「ライラさんのお持ちのイエソドの欠片が私達に引きつけられたから、としか申し上げられないでしょうね。丁度親戚一同がカイロに逗留していたときで、あの頃は天幕も今のような放蕩娘ではなく素直な女の子で、親戚の集まりにもよく顔を出していましたから……」

「ミキティ伯母さん、余計なこと言わないで」

「大家さん、ライラとそんな前から知り合ってたのかよ」

ライラの登場から今に至るまで、全く表情を変えずに泰然としてゐる志波に真央が問う。

「追跡してきた天使は何故、追跡を諦めたのですか」

苜屋の疑問もまた、どちらかといえばライラ本人よりも志波に向けられたものだった。

すると答えたのは、志波ではなく天幕であった。

「諦めたんじゃないよ。私達がちよつとどくらせたの」

「私達とは、天幕様と志波殿、ということか？」

「うん、まあそれも間違いないけど」

鈴乃の問いに、天寿は首を横に振る。

「うちの親戚連中が、つてこと」

「親戚連中って、まさか、それは……」

「そ、地球のセフィラ一家だね。私みたいな二代目三代目もいたけど、こっちはたまたま親戚集めてカイロに旅行に行つてたんだ」

と、天寿は病室で睡り広げられる展開に早くも飽きて、津原のベッド脇にある、明らかにいじってはいけなさそうな機械に手を出そうとしているアシエスを見た。

「確かあんときはジョージ叔父さんのうちに夏休みフルに使つて遊びにいったような気がする。あ、ジョージ叔父さんってのは、ケセドの昔ね」

「ケセド？ 日本にケセドがいるノ？」

「ちよー！ 今こいつ何か押したさ」

第四のセフィラであるケセドの単語に反応したアシエスは、勢いで津原のベッドの傍らにある、明らかに素人が押してはいけないスイッチを押して、津原が慌てふためく。

「ううん、ジョージつつたでしょ。住んでるのがカイロで国籍はイギリス。あとアシエスちゃん知ってるケセドとは別もんだからね？ あのとときはジョージ叔父さんの招待で昔でカイロに集まつてて、大黒家とミキティ伯母さんと、あとゴールドマン一家もいたっけ？」

「あのとときハワイのゴールドマンは急な仕事で来られなかったから、末っ子のティミーが一人

で来ていたと思つたけど」

「あー、タイム、あのタソ生意氣。あんどきあいつ、私がジョージ叔父さんに買ってもらった船のおもちや連攻で壊してくれやがったんだよな！」

「タソ生意氣でも、今ではゴールドマンの後を継いだ立派な海運会社の若社長よ。今ならおもちやと言わずクルーザーくらい丸ごと一隻ブレゼントしてくれるのではなくて？」

「私だって大黒屋の跡取り娘だよ！ ああ、確かに一回くれるっていうからもういに行こうとしたけど、なんか客船みたいな写真がメールで送られてきて、こんなの北の海に浮かべらんないって断つたことあったな！」

他人には毒にも薬にもならない親戚トータを繰り広げる志波と天祿にしばし暗然とする真実だが、ある地名に引つかかるものを覚えて首を傾げる。

「エジプトと……ハワイ？」

「でもそっか、思い出してきた。インドネシアのバリアナタがいた！ 二人でタイムを騙してラタダに乗せたまま一人で砂漠に半日放り出して、めっちゃくちゃ怒られたんだった！ 懐かしーな！」

真実は会ったこともないタイムという名のアメリカの青年実業家に同情するが、それ以上に今の親戚トータの中に、大きく引つかかるものがあつた。

「エジプトにハワイにインドネシア……む、どこかで……」

「な、何か、思い出しちゃいけない感じがするけど……」

声屋も漆原も、何かがアンテナに引つかかっているようだ。

「もしかして、あれではないか」

すると、答えを出したのは鈴乃だった。

「ハワイ、インドネシア、エジプト。どれも志夜殿が我々に手紙や写真を寄越した国……」

「うおわああああああああああああああ……」

鈴乃のその一言で、悪魔三人の脳裏に最まわしい記憶が蘇る。

それは、決して触れてはいけない、濃縮されたバンドラの精。

全身黄金色の孔雀。ドラミッドをバックにしたベリーダンス。

そして最後に魔界の王と二人の悪魔大元帥の記憶が到達したのは、恐るべき水着の……。

「し、失礼！ 少し外の空気を！ ふぐうわっ！」

音屋は誰の返事も聞かずに病室を飛び出していった。しまい、

「……っ」

漆原は奇妙な唸り声を上げて卒倒し、髪の手とところか隅も目の色も抜けたというかかきかきになったというかとにかく何も起こってないのにベッドの上で勝手に下からびはじめ、アシエスが勝手にいじった機械が妙な電子音をけたたましく鳴らしはじめる。

「う、ん、ぐっ！ ま、負けるもんかあああ！」



「魔王、どうした？」

「マオウ、例、トイレでも我慢してんノ？」

真奥一人が、顔から滝のように冷や汗を流しつつ、心の中に湧き上がる熱情と戦っていた。

「な、何が起こったのだ？」

「さ、さあ……」

悪魔二人のあまりに劇的な反応に、ノルドとライラすら呆然とするばかり。

決して人の世に解き放つてはならない、早まわしき「伝説のアノシャシ」の記憶に苛まれながら、真奥は必死の形相で大家を睨んだ。

「あんた……まさか……俺達のことまで最初から……」

「ライラさんの一件以来、グートの閉閉には、親戚一同常に神経を尖らせていましたわね」  
 志波は真奥の問いにあっさり頷く。

「もちろん、真奥さんと分かって待っていたわけではございませんわ。ライラさんに続いて、エンテ・イスラからやってくる存在を待っていただけですのよ。エンテ・イスラで何が起こっているかはライラさんの口から伺っただけですけれども、少なくとも彼女を追ってくる存在は、あまり地球にとって良くない存在だろうことは予想していましたから」

だが結果的にライラの次にやってきたのは、約十五年後のノルド、そしてその後の魔王と真奥と吾輩だった。

「ノルドさんは最初からライタさんの手引きでいらつしやることが分かっていましたし、蓮佐さんは、彼女には気の毒ですけれども、優先順位的に後回しにされたというところですね。」

蓮佐さんよりもあなたの方が、地球にも人間にもとても危険な存在だった。ライタさんのお話を忘れたわけではありませんでしたけれども、はつきり申し上げて蓮佐さんの性質と力は「危険」には直接繋がら得ないものでしたから、ノルドさんも蓮佐さんも、地球に害を及ぼさないのなら極力関わらないのが我々地球のセフィタの方針ですの」

「エミリアは聖剣を……イエソドの欠片を既に押っていたのですか？」

ここまで来れば、志波が既にライタから彼女が関係している事象にまつわる話を聞いており、イエソドの欠片のみならず場合によってはセフィタの大元とも言えるセフィロトの樹についても知っていることは分かる。

鈴乃がそう聞くと、志波ははつきりと首肯した。

「形こそ本来のものと違いますがそれでも、蓮佐さんは既に聖剣とやらのヤドリギとして機能していましたし、あんなった以上、蓮佐さんの体からイエソドが離れるには、イエソド自身の意志が必要になりますから」

聖美にしてみれば、自分も未知の世界の異邦人なのに危なくないから放っておかれたということになるが、確かに聖法気を減衰させ、天使から天使資格を奪うほどのサリエルの「墮天の邪眼光」ですら聖美から聖剣を引きはがすことはできなかった。

「ヤドリギからセフィラを離すには、ヤドリギが死ぬか、セフィラが自分の意志で離れるか、あとは『最後の手段』しかありません。ですが今現在、エンテ・イスラの状況を見るにその最後の手段を用いることはできない。だから特に蓮佐さんの方は、様子を見るのを後回しにしても、問題ないと判断しましたの」

「なるほど、しかし王様殿」

「何ですの？」

「『地球に害を及ぼさないのなら暴力関与しない』と仰っていましたが、ならばこれはどうなるのです？」

「おい、おい鈴乃、俺を指差して『これ』とか言うな」

「魔王は魔王です。人類に仇みす悪魔、天使などよりよほど地球に有害おかつ」

「おい鈴乃、聞き捨てならんぞ、俺が天使よりも地球に有害だあ？」

真兇が鈴乃の束ねられた髪を纏んで後ろから引つ張ると、

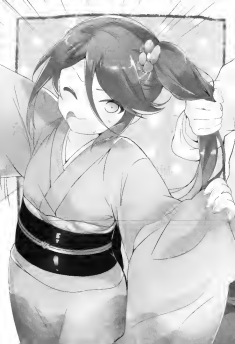
「な、何をするっ!!」

神妙な顔をした聖職者は突然吊り上げられたサリガニのように手をわたわたさせた。

「ですから真兇さんと高屋さんがいらつしやつたときには、私が自ら出向きましたのよ」

「え？」

「え？　こちら——離せ魔王!!」



「あなた方が大層危険な力の持ち主であることにはすぐに気づきました。魔力……食の力こそ失つてはいるものの、とても凶暴な性質を持っている危険があった。しばらく見張って、少しでもおかしい動きをすれば滅するつもりでおりましたんですよ」

「え」

真奥は思わず片足（ひとあし）の姿を隠し、先ほど口を押さえて病室を飛び出したまま戻ってきていないことを思い出した。

「結果的には嬉しい無駄足にはなりませんでしたけれどもね」

「つ、つまり、魔王が全然凶暴ではなかった、と？ だからいい加減離せっ！」

「まさか最初に口癖を取って住む場所を探そうとなさるとは夢にも思いませんでしたわ。ライラさんですら、それはどの社会性を見せませんでした。その後も聞いた魔力を使わずに、来て三日で栄養失調に倒れて救急車で搬送されて、退院したその足で履歴書を貰ってアルバイトを見つけてくるような方なら、大した危険は無いと思いました」

つまり真奥は、日本に来てから真奥と出合ってから（ここから）健康を削すまで、常に志波（しな）に見張られていたということになる。

「栄養失調で救急車？」

「う、うるせえ！」

一方、自分が日本に来る前の真奥達の行動を初めて知った鈴乃は、しっぴを剥（は）かれたまま（うしろ）

しむように真実を見る。

真実が鈴乃の目に射まられず、とうとう鈴乃の髪を離した。

「まったく……妙な顔がついたらどうしてくれる」

鈴乃は濡まれていた髪の手でさっと手巾で拭き、

「……まったく」

しばらく髪の手を指先で弄んでいた。

「ま、まさか不動産屋さんまでセフィラの関係者とか言わねえだろうな」

真実が志波が帰国するまでアパートに関する様々な相談の窓口になっていた不動産屋の社員達を思い浮かべるが、志波は緩やかに首を横に振った。

「単純に、あなた達の行動を先回りして地域の不動産屋さんに一斉にヴィラ・ローザ警報の不動産情報のお金をお預けいただけですわ。唐突なお預けだったので多分ない額のお金がかかりましたが、私もこう見えて手広く商売をしておりますので、どの不動産屋さんにも快く認めてくださいました」

大家の手広い商業の経験など知りたくなかったが、元がセフィラだとしても先ほどから濡れ固まってくる志波の服事情と服装事情は、真実には計り知れない次元であらうことは察する。

「その後も近所の方やマダロナルドの皆さん、佐々木千鶴さんや蓮佐さんとの関わり合いを見て、私は真実さん達は衣食住が安定している限り、安全なお人柄な上に進んで異世界からの害

を排除してくれることも知りました。アパートを修理しなければならなくなったときには少々肝を冷やしましたが、大黒屋が引き取ってくれて一安心でしたわ」

最初からセフィラの掌の上で睡っていたことを知り、真真は不愉快そうに顔を歪める。

海の家大黒屋に密入したときも、真真達は最初、大家からの紹介ビデオを固く封印したまま何日も見ずにいた。

だがいざ電話をしてみれば、天幕にも大黒屋にも真真達以外の人員を募集していた気配は無く、そもそも海の家も天幕も、普通の存在ではなかった。

「そういうことかよ。氣にいらぬえな。俺はつまり、あんたがラクするために利用されてたってことか？」

確かに真真は、主として自分の生活を守るために、サリエルを始めとして多くの異世界からの密入者を排除してきた。

だがそれが志波の手の上で睡らされてのこととなると、あまりいい気分はしない。

挑戦的な真真の問いにも、志波は涼しい顔で即答した。

「では真真さんご自身の意志では日本やあなたの生活を守ろうとはなさらなかったと？」

「……いや、そういうことじゃねえけど」

「私は真真さんと声屋さんを一人の『人間』』として信頼に値すると判断しましたのよ。真真さんはいつも立派に信頼に応えてくださった」

「まあ、あんたに言われると贈<sup>くわ</sup>たが、俺は地球も日本も好きだ。今の生活も、いつかは抜けなきゃならないが、快適なものだと思ってる。だからこそ……どういうつもりなのか、話す気はあるんだろうなあ」

真奥は必死に精神を立て直しながらライラと流浪を文互に睨<sup>にら</sup>む。

「俺は言っておくが、今かなり機嫌<sup>きげん</sup>が悪いぞ」

「も、もちろんよ、私はこの時をずっと待ってたの！ あなたやエミリアみたいな強い存在が、こうして同時に現れるのを……」

ライラは顔を上げて、懇願<sup>こんがん</sup>するように真奥を見る。

その表情には、かつて自分を喰<sup>く</sup>し、導いた神々しさは微塵<sup>みじん</sup>も無かった。

両頬<sup>りょうほ</sup>が思い切り腫<sup>は</sup>れ上がっているのだから神々しさを醸<sup>か</sup>し出せというのは酷<sup>こ</sup>な注文かもしれないが、それを差っ引いても表情には全く余裕が感じられない。

娘に真正面から存在を拒絶されたショックがそうさせてしまったのか、それとも……。

そして皮肉にも、真奥はずっと知りたかったライラの真意について、彼女の不用意な一言によつて興味を失ってしまったのだった。

「世界を……エンテ・イストラを救うために……あなた達の力がひつよ……」

「やめろ」

話せ、と言われたのに唐突<sup>たうたつ</sup>に言葉を遮<sup>さへ</sup>られて、ライラは目を圓<sup>まる</sup>めた。



を排除してくれることも知りました。アパートを修理しなければならなくなったときには少々肝を冷やしましたが、大黒屋が引き取ってくれて一安心でしたわ」

最初からセフィラの掌の上で睡っていたことを知り、真真は不愉快そうに顔を歪める。

海の家大黒屋に密入したときも、真真達は最初、大家からの紹介ビデオを固く封印したまま何日も見ずにいた。

だがいざ電話をしてみれば、天幕にも大黒屋にも真真達以外の人員を募集していた気配は無く、そもそも海も海の家も天幕も、普通の存在ではなかった。

「そういうことかよ。氣にいらぬえな。俺はつまり、あんたがラクするために利用されてたってことか？」

確かに真真は、主として自分の生活を守るために、サリエルを始めとして多くの異世界からの密入者を排除してきた。

だがそれが志波の手の上で睡らされてのこととなると、あまりいい気分はしない。

挑戦的な真真の問いにも、志波は涼しい顔で即答した。

「では真真さんご自身の意志では日本やあなたの生活を守ろうとはなさらなかったと？」

「……いや、そういうことじゃねえけど」

「私は真真さんと声屋さんを一人の『人間』』として信頼に値すると判断しましたのよ。真真さんはいつも立派に信頼に応えてくださった」

「まあ、あんたに言われると贈<sup>くわ</sup>たが、俺は地球も日本も好きだ。今の生活も、いつかは抜けなきゃならないが、快適なものだと思ってる。だからこそ……どういうつもりなのか、話す気はあるんだろうなあ」

真奥は必死に精神を立て直しながらライラと流浪を文互に睨<sup>にら</sup>む。

「俺は言っておくが、今かなり機嫌<sup>きげん</sup>が悪いぞ」

「も、もちろんよ、私はこの時をずっと待ってたの！ あなたやエミリアみたいな強い存在が、こうして同時に現れるのを……」

ライラは顔を上げて、懇願<sup>こんがん</sup>するように真奥を見る。

その表情には、かつて自分を喰<sup>く</sup>し、導いた神々しさは微塵<sup>みじん</sup>も無かった。

両頬<sup>りょうほ</sup>が思い切り腫<sup>は</sup>れ上がっているのだから神々しさを醸<sup>か</sup>し出せというのは酷<sup>こ</sup>な注文かもしれないが、それを差っ引いても表情には全く余裕が感じられない。

娘に真正面から存在を拒絶されたショックがそうさせてしまったのか、それとも……。

そして皮肉にも、真奥はずっと知りたかったライラの真意について、彼女の不用意な一言によつて興味を失ってしまったのだった。

「世界を……エンテ・イストラを救うために……あなた達の力がひつよ……」

「やめろ」

話せ、と言われたのに唐突<sup>たうたつ</sup>に言葉を遮<sup>さへ</sup>られて、ライラは目を圓<sup>まる</sup>めた。

「なーんかサ」

アシエスも黙然<sup>もくねん</sup>としないものを感<sup>かん</sup>じつつも、病室を去ろうとする。

「アシエス」

その背にかけられたのは、ノルドの声だ。

「……オトーさん、悪いんだけどサ」

「分かっている。お前も決して今度<sup>こんど</sup>でここにいるわけでは……」

「それは違うヨ」

アシエスはノルドの言葉を遮<sup>さへり</sup>って言う。

「本当の一番初めはマジで例もかもが嘘<sup>うそ</sup>だったケド、今は私、ここ好きだよ。昔もネ」

アシエスは病室の一同を振り返る。果たして彼女の言う「昔」に、アシエスが誠茶<sup>まこと</sup>苦茶<sup>くちや</sup>スイツチを押してしまった機械の隣で干からびて倒れている海<sup>うみ</sup>原<sup>はら</sup>が含まれているかどうかは定かではないが、とにかくアシエスは少し寂<sup>さび</sup>しげに首を横に振った。

「マオウの言うことも、チホの言うことも、エミの思いも、私分<sup>わかれ</sup>かる。オカーさんを恨<sup>にく</sup>んではないケド、もっと早くナンとかしてはしかったサ！ っと思わないでもないシ。フタザツなんだヨ」

「アシエス……」

「……オカーさんもさ、悪いんだケド、私、まだしばらくマオウ達と一緒<sup>いっしょ</sup>にいたいんだ」

「アシエス？　で、でもあなた……」

「分かってる。分かってるヨ。バカな真似はしないヨ。ただ……今はオカーさんの味方にはなれナイ。オカーさんも……天使だ」

「……っ!!」

アシエスはそう言っ、志流を見る。

「ミキナイ」

「なんですの？」

「私、今「一人」になってるヨネ？　ミキナイ、なんかシタ？」

「……ええ。「最後の手段」を」

珍しく、志流が言い変む。

「エンチ・イスラでのあなたが、真央さんの魔力の影響を受けて、悪い方向に傾いているような気がしたものですから……」

「勢いだったカもしれないケド、マオウは私が決めたヤドリギなんだ。ミキナイにどうこう言われるスジアイないヨ」

「……もうでしたね、ごめんなさい。差し出がましいことをしました」

「ミキナイはミキナイ連のイエンドを大事にしてあげテ。私は……」

アシエスはさっと身を翻すと、真真流を追って病室を飛び出した。

「マオウんとこ戻るカラ」

それぞれがそれぞれの言葉と意志で、ようやく現れたライラの前から一人ずつ姿を消す。後には志波と天崎、ノルド、千からびた凄惨、そしてライラが取り残された。

「どう……して」

呆然としたライラの声は、廊下を出たところで倒れて衝撃していた首屋を肩に担ぎ、エレベーターに乗ろうとしてアシエスに追いつかれた真奥の耳には届かなかった。

※

あの日のあと、千穂とエメラダが恵美を追いかけて何をして、何を話したのかは真奥も特に聞かなかった。

表面上、恵美も千穂も普段通りに、つまり凄惨の病室でのことなどまるでなかったかのように過ごしていたから、真奥も話を蒸し返したりはしなかった。

首屋によると、ノルドがライラを伴って水稲町に行つたのではないかと思われることが何度かあったらしいが、恵美の様子を見ていれば顧すら合わせてはいないと思われる。

真奥はデュラハン式号を消しながら、いつものように帰宅し、いつものようにアパートの共用階段を上がる。

閣下のノルドの部屋には灯りがついていますが、中に誰がいるかまではいちいち気にしない。帰宅すれば、吉屋の夕食と漆原の後ろ姿が真奥を待っているのだ。

それが、いつもの真奥の暮らしである。

彼が日本で作った、小さな魔王城の姿である。

今は、これがあれば十分なのだ。

だが、この夜はそこにある種会計なものが混じっていた。

「なんだよ、こんな遅い時間に」

鈴乃が待っていたのだ。

「今日、ライラが来た。志波殿とガブリエルと一緒に」

「ふうん。吉屋、今日の晩飯何？」

真奥は本心から興味なさそうに返事をする。

「とりあえず、揚げ出し豆腐と味噌汁です。足りないようでしたら、冷凍の豆腐ハンバーグをすぐに用意できますが」

「いいや、今日は休憩しつかりとれたから、晩飯はあつさりめで」

「かしこまりました。すぐに温め直します」

「魔王が話を聞きたくなさそうだったから、私も心を鬼にして彼女を追い返したが……」

「なんでお前が俺に合わせる必要があるんだよ？」

「そ、それは……」

鈴乃は、なぜか一瞬だけ顔を赤らめるが、すぐに何かを思い出して唇を正す。

「さ、聞いてしまえば私は相手の話に納得してしまいそうで……」

「お前は別に聖戦者なんだから問題もねえだろ。相手は天使サマだぞ」

「それは、その……そうだが……で、では逆に聞くが」

鈴乃はやはり少しだけ顔を紅潮させながら、声屋がてきばきと夜食を準備するコタツの天板を叩く。

「例えお前はあそこまで頑なにライラの話を聞こうとしなかったのだ！」

「おい、時間考えろ。下に響く」

「っ……。なんなんだ、一体……」

下にはノルドと一緒に、もしかしたらライラもいるかもしれない。

今ライラがどこに住んでいるのかは分からないが、少なくとも新稲道郊のどこか、ということだけは確実だろう。

ライラを恐ろしく邪険にしたかと思えば、こんなところで集合住宅に住む者らしく生活音に気を遣ったりする。

そもそも話を聞かなくないと言っている魔王く、話を聞いてほしい大天使が、畳と床板、そして天井板という、二人にとっては全く物理的障害にならなそうなものだけで仕切られている

のも妙な感じだ。

「訳が分からん」

鈴乃は正確した腰の上で人知れず拳を握りながら、大きく息を吐いた。

「正直、あそこで言ったことが全部だ、聞く気が失せたつてのが正しいが、あの流れからいって、話の先は想像できるだろ」

「話の先？」

「悪美と俺。もちろんお前やエメラダ、古屋に達郎、場合によつちや天澤さんやアルバートとかも助定に入ってるかもしれねえけど、全精力を合わせてエンテ・イスラの危機とやらを救つてくれるに決まつてんじやねえか。その危機がどういう危機なのか知らねえがよ」

「む、それは確かに……」

「んで、エンテ・イスラの危機にはアラス・ラムスやアシエス、それにイルオーンあたりが密接に関わつてて、多分そフィラをどうにかしなきゃいけないやつてなるわけだろ？　そうすりゃ必然的に『マドリダ』とかいうのにされてる俺や悪美は無関係でいられなくなる。そんな話、聞く必要あるか？」

「必要があるか無いかと言われれば、私の立場からすれば有る、としか言ひようがないが」

「俺の立場にしてみれば、無い、としか言ひようがねえ」

真美は笑いながらそう言つた。



「……」

「お待たせいたしました、魔王様」

津原はパソコンと睨めっこしたまま何も言わず、声原は真奥の前に膝を並べていく。

「だって俺らにしてみりゃ、エンテ・イスラの人間が滅ぶなら願ったり叶ったりだしよ。大家さんの話が本当なら、あと何百年かの幸福なんだろう？ 人間だって支配すりゃ使えるかもしれねえけど、やっぱこれ以上戦うのも難しいし面倒だし、どっちかといえれば俺はエンテ・イスラに滅んでもらいたい方だからな。あ、いただきます」

「……」

鈴乃はどうも本心からその言葉を言っているらしい真奥が食事に取がかかる横顔を不審げに眺める。

言葉だけ聞けば、大層非道な発言に聞こえる。

残念ながら彼が魔王である以上、ごく自然な内容だと言えなくもない。

だが、鈴乃はもう知っている。

彼の本性。魔王サタンや真奥貞夫の名に縛られない、彼の本性は、今の言葉を宇宙週りに吐いてなどいないということだ。

今の言葉の裏には、必ず別の意思がある。

鈴乃は相槌を打たず、真奥の次の言葉を待った。

味噌汁をすすり、揚げ出し豆腐の熱さに目を見開き、結局ご飯を二度おかわりする真奥の横顔を、ひたすら見続けた。

「……お前もしつこいな」

「性格でな」

「これ以上何も出ないぞ」

「お前は嘘つきではないが正直者でもない。それは私だけでなく、皆が知っていることだ」

「はいはい、それはどうも。もう帰れ。女一人で男の部屋に夜遅くまで入り浸るとか、破戒僧もいとこだらうが」

「帰らんぞ。今更だ」

「……夜々木千穂に関われたら、結構怖い会話してない？ 帰わないって何に對して？」

「……やめんか。最近のペルは本当に妙なのだ」

背中でひそひそと言葉を交わす男二人を無視し、真奥は深くため息をついた。

「一人の人生まで、責任持ちたくねえ」

「何？」

真奥は、川田の言葉を自分なりに引用して言った。

「それに俺には、エンテ・イスラの人間のためとか、ライラの話を聞いてとか、とにかくあの場でどんな理由を押しつけられても行動しなきゃならない理由が無い」

鈴乃は相変わず余計な想構は打たず、真奥の一言一言を注意深く探る目つきだ。

「あいつに背助けられたことには恩を感じてないわけじゃないが、その恩を過剰に著せられる譯れもぬよ」

「……」

「そんな顔したって、これ以上何も無いぞ。本当に、それ以外理由ねえんだから」

「……どうやら、そのようだな」

鈴乃はしばらく真奥の顔を正面から見ていたが、やがて諦めたように視線を外し立ち上がった。

「となると、私もどうしたものかな」

「だから、俺に合わせる必要ねえってのに」

「エミリアも千穂殿もあだつたからな。友一人に暫定的主のお前までそう言う以上、私も皆に準じていたい。私の聖務は潰しが効かないから、いざという時のために悪魔大元帥の再就職口は残しておかねば」

「聖職者とも思えん発言だな」

「邪魔をした」

鈴乃が皮肉な笑みを浮かべ、車輪を蹴いて、二〇一号室を辞そうとしたそのときだった。

「鈴乃、お前、冶金には詳しいか？」

その背に、全く予期だにしない問いが投げかけられた。

「やきん？」

鈴乃はきよんとして振り返る。

「それは夜間の勤務のことか？ それとも鉱石から金属を精製する作業のことか？」

真奥ならどちらかといえば夜間勤務が似合っているが、どうやらそうではないらしい。

「俺な、まだ魔王軍ができたところ、初めて鉄でできた武器ってのを持ったんだ」

「それがどうした」

「鉄って人間の歴史の中でも重要な金属だろう？ 石とか銅に比べて威風凛々していて、古代社会をひっくり返すレベルだったらしいじゃないか」

「ああ、そうだが……」

鈴乃は真奥の言わんとしていることが分からず、玄關に立ったまま首を傾げる。

実際にエンテ・イストラの古代には鉄器を持った国が覇を唱えた記録が残っているし、地球でも紀元前十五世紀にヒッタイトが世界で最初の鉄器時代を築き歴史を刻んだ記録がある。

だが冶金や鉄器が、これまでの話にどう繋がるのだろうか。

「でもさ、魔界には『手入れ』って発想がなかなか行きわたらなくてな。最初は随分冶金の鉄の武器をムチャな使い方して無駄にしちまったんだ」

「だからそれがなんだというんだ」

「睨びとめたわりに内容がとりとめがなさすぎて、鈴乃は少し苛立った様子を見せたが、

「いや、そんなだけ。ふと思っただんだ。悪いな」

唐突に話が終わってしまい、拍子抜けする。

「なんなのだ、一体」

「いや、何事にもメンテは必要だと思って思っただけだ。ほら、もうすぐデリバリー始まるからさ、またバイク運転するから、なんかそう思っただんだよ。エンテ・イスラでお前と走らせたあれは、メンテ以前の問題にしちまったからな」

惠美を助けるためのエンテ・イスラ親征で用いた鈴乃の二台のバイク、ジャイロルーフは、未だに日本に残ってきいていない。

真美とアシエスが無茶な運転をして東大陸の皇都・蒼天臺で破壊されてしまい、アルバートが責任を持って全ての部品を回収すると胸を張っているものの、未だに返却されてはいなかった。

如何なエンテ・イスラとは違う文化圏で製造されたものとはいえ、そもそもアルバートにバイクのパーツが分かるのか、という問題もあるが、今更真美や鈴乃が蒼天臺に取りに戻るわけにもいかない。

「結局、デリバリーすんのに人足りなさそうなんだよ。ライラが現れたならノルドの用心棒だつてする必要ないだろ？ お前もマクロナルド来いよ」

「遠慮しておこう。竹葉スマイルというものはどうも私の性に合わん。敢しい顔をするのは得意なのだかな」

「もったいねえの」

「……………に、人間の男に言われれば、ま、まだ素直に喜べたな」

「結構素直に喜んでる気がしない？」

「やめんか」

「で、ではな」

藤原と宮屋が呆れている声が聞こえて、鈴乃は慌てたように二〇一号室から出ていった。

「ははは」

真鳥はそんな鈴乃を笑って見送ってから、声原と漆原を振り返った。

「今の機嫌に、火急の用事は無い。今やるべきことは、この生存環境を維持して日本で暮らすスナップアップをすること。そうだな？」

「おっしやる通りでございます、魔王様」

念を押す真鳥に、声原は少し違和感を覚えつつも大げさなくらいに頷いてみせ、

「どいつもこいつも現状維持現状維持か。まあ、それでもいいんだけとさ」

漆原は、これまでにないほど不自然な「停滯の中のさらなる停滯」に感嘆することなくぼやくのだった。



**お宝に気づく瞬間、**

夕方、電話を終え帰宅しようとしていた千穂は、携帯電話の着信画面に表示された見慣れた番号に首を傾けた。

「もしもし……」

三コール以上待ってから出る恐る着信ボタンを押すと、

「もしもし、ササキさんですか？」

「あ、エメラダさんー びっくりしたー どうしたんですか？」

千穂は、エメラダが携帯電話を持っていることを知らなかった。これは今度、メールアドレスもきちんと聞いておかわねばと心で思っていると、エメラダは意外なことを聞いてきた。

「突然お電話してすみませんー 実はお尋ねしたいことがー……」

「はい？」

「エミリアの行方をーご存じありませんか？」

「……え？ 行方？」

千穂は思わず立ち止まって目を瞬かせる。

「実は、ルシフェルの病院でーライラに会った日の二日後から家に帰ってきてなくてー」

「はい？ あの日の二日後から？ え？」

千穂はエメラダの言うことに理解が追いつかない。

「おうちに帰ってないんですか？」



「帰ってきてないんですよりその日にお仕事に行くと言ったまもなく三日も……」

「待ってください!? だって遊佐さん、昨日まで三日連続でバイトのシフトに入ってたんですよ?」

「え」

電話の向こうでエメラダが息を呑むのが聞こえた。

「私昨日も普通に顔合わせしましたし……帰るもいつもみたいに、遊佐駅で別れました。遊佐さん、ちゃんと電車で帰りました」

「え、ええええええ? そ、そんなありや?」

どうやらエメラダも千穂の答えに混乱しているようだ。

「この前、ノルトさんと鈴乃さんがライラさんに付き添って遊佐さんのおうちに行ったって聞いたんですけど……もしかしてその日も?」

「その日は……確か夕方にお仕事が終わるはずだったんですけど結局帰ってこなくて」

「あの日には……もう」

千穂は徳原が退院する直前に、グイラ・ローザ警塚に向けたおかずの差し入れを空振りしてしまった日のことを思い出す。

「遊佐さんに電話はしてみたんですか? この番号、エメラダさんの携帯電話ですよね」

「はい、私とアルは初めて日本に来たときにエミリアに持たされてまして……電話はもちろ

んしましたよう。でもどうしても出てくれなくて……エミリアは今日はお仕事あるんですかー？」

「え、ちよ、ちよっと待つてくださいね」

千穂も千穂で状況が呑み込めないまま、靴の中の手帳から直近二週間のシフト表を取り出し、ざっと斜め読みする。

「あ、今日はお休みですね」

「ええい」

エメラダの逢方に暮れたような声。

恵美が出勤するならマドロナルドで待ち構えていれば良い話だが、来ないとなると今日中には行方を頼めない恐れがある。

大体一番信頼できる仲間であるはずのエメラダに何も言わずに永福町の自宅を留守にすることはどういうことだろうか。

エメラダの言葉を信じるならやはりライラのことが影響していると思われるが、それではエメラダに何も言わずに姿をくらます理由が無い。

ライラと会いたくないなら恵美の性格から考えると自分で拒絶したり、エメラダに言い含めたり色々できるはずである。

千穂は、漆原の研究室から飛び出した恵美を追ったときのことを思い出す。

「い、いませぬねうどこ行っちゃったんでしょ……」

「こっちですー」

病院の外でエメラダがきょときょと左右を見回す中で、千穂は片手に携帯電話を持ちながら迷うことなく代々木駅<sup>代々木駅</sup>の方向へと走り出す。

「な、なんで分かるんですかー？ デンシャに乗るつもりでことですかー？」

「そこまでは分かりません！ ただ、乗客さん間違いないく駅の方向に……あっ？」

「代々木駅に向かう上り坂を駆け上がった千穂は、唐突に叫び声を上げて停止した。遠くなった……タクシー乗っちゃったのかも」

エメラダは今度こそ驚いて千穂の顔を凝視するが、千穂はそれには気がつかず、携帯電話を握りしめたまま遠くを見るような目つきになる。

「駅の前の変装点から……多分、あっち」

千穂はビルの特設から東美の行く先を正確に指差すが、

「ど、どこに向かってるんだろう。水稲町に帰るのかな……こっちって水稲町の方？」

どのような理由か、東美の位置を追尾しているが、東美がどこに向かっているかは分からない

いらしい。

「あ、だめだ、悪い。酔っちゃう」

やがて千穂は諦めたように大きく息を吐くと、手の中で携帯電話をばたんと閉じた。

「……多分、道佐さんタクシーに乗って家に帰ってるんだと思います。エメラダさん、道佐さんのおうちに泊まってるんですよね」

「は、はい……で、でもササキさん、一体どうされたんですか？　なんだか？　エミリアの行き先を、整理とかじゃなくて、気配で感じ取ってたように見えましたけど」

千穂は手の中のピンク色の携帯電話を見せると、困ったように微笑んだ。

「緊急時以外には使っちゃダメなんですけど……携帯電話を使った概念送受です」

「概念送受って」

エメラダは飛び上がらんばかりに驚いた。

「道佐さんの携帯に向けて発信しながら通いかけてたんですけど、あんまり遠いと通い切れなくて……」

「さ、ササキさん、概念送受を会得してるんですか？　い、一体どうやって？　ササキさんは、日本の方ですよわね？」

その驚きが如何ばかりであるかは、彼女の口調が物語っている。

「道佐さんと鈴乃さんと、あとはサリエルさんに色々教わったりして、できるように」

「サリエル君 大天使サリエルですか？ エミリアに諷刺を働こうとして、今はエミリアと魔王の戦場の近くで働いているっていう？ な、何がどうしてそんなことに？」

エメラダの驚きは収まらない。

聖法氣を持つていないはずの千穂がエンテ・イスラの「法術」である概念送受を使っていることも驚きだし、その習得に聖美と鈴乃とサリエルの三人が関わっているとすれば、一体どんな事情があったのかおよそ想像もできない。

「遊佐さんがエンテ・イスラで捕まっちゃり少し前に、色々あったんです」  
千穂は少し照れながら解説する。

「私はどうしたって真実さんや遊佐さんの弱点って天使の人にも悪魔の人にも認識されちゃってますから、いざという時すぐに助けが呼べるようにって思っ、私からお願ひしました」

「そ、そうなんですか」

エメラダはようやく最初の驚きから立ち直ったらしい。

「で、でも痛いんですね。お覚悟もそうですが、概念送受は高等法術ですし普通に法術学院なんかで習えば習得には最低でも一年を要するはずですけど」

エメラダが平放して褒めるので千穂は照れくさそうに笑うが、すぐに顔を引きしめる。

「って、私のことはどうでもいいんです。今は遊佐さんです。多分遊佐さん、おうちに帰ったんです。急ぎましょう」

「で、でも、なんて声をかければいいか……」

「そんなこと、顔を見てから考えればいいんです」

迷うエメラダの手を取って、千穂は再び駅に向かって走り始める。

残念ながら女子高生の千穂とエンテ・イスラ人のエメラダには、タクシーメーターは未知の分野なので、電車で追うのが安全確実なのだ。

「さ、ササキさんって、性格変わりましたっ？」

ずっと年下の少女に手を引っ張られながら、なんだか意味もなく笑いがこみ上げてきたエメラダは、初めて日本に来たときのことを思い出す。

そのときの千穂はエンテ・イスラの騒動に巻き込まれ、想い人との距離に悩み、混乱するごく当たり前の少女だった。

だが今自分を引っ張る少女に、あの頃の迷いは無い。

「せめて気持ちくらいは強くないと、真実さんや遊佐さんにはついていきませんから！」  
千穂は、息を切らしながらもはっきりとそう言った。

その背中に、妙な温しさと頼もしさを感じたエメラダは、

「……あなたが、エミリアの友達になってくれて、本当に良かった……」

そう、心から思った。

「なんですか？」

「いいえ。それよりササキさん、ちょっとその路地に入っていただいていいですか？」

「え？ その路地？」

「はい、近道を思い出したので。」

千穂は駅への道から逃れる方向を指示するエメラダに首を傾げつつも、大通りから一本裏に入るための、車が交差通行できないほどの道へと折れる。

そして二人の姿が路地の中に消えたと同時に、

「ひやあああああああああああああああ………」

千穂の驚きの叫びが、代々木のビル街を突き抜けて道が空へと舞い上がったのだった。

## ※

あのあと、千穂の手廻通り恵美は永福町のマンションに戻っていた。

もちろんライラの出現にショックを受けてはいた。それでも人目も憚らずに空を飛んできたエメラダと千穂を、恵美はいつもと変わらぬ様子でこんなこんとお説教した。

おかげで千穂は、実は恵美の家に行くのが初めてだったということに、自宅に帰るまで気づかなかったほどだ。

緊急の事態に不謹慎ではあるが、もっと恵美が日常生計している場所を見たかったという思

いもあるが、とにかくそういうことを後から考える程度には、恵美は普段と変わらない様子だったのだ。

もちろんいつもと変わらない態度だったからといって、心の内までそうとは限らない。

だが翌日から普通に出勤してきた恵美は本当にいつも通りに見えたので、千穂はつい油断をしていたのだ。

だが、恵美の性格や今の状況を考えれば、一人でどこかのビジネスホテルやネットカフェなどに逗留（とくしゅう）しているというのも考え辛い。  
 となると、おのずと選択肢は限られてくる。

千穂はシフト表の恵美の出勤予定時間を眺めながら、一つ顔（おもて）いた。

「……私ちよつと、心当たりを調べてみます。少し待っててもらっていいですか？」

「分かりました。お手数おかけします」

消沈したエメラダの返事を最後に、千穂は一旦通話を切る。

そして、あまり深く考えることもなく、電話帳に登録された名前を検索し、電話をかけた。

「あ、もしもし？ 佐々木です。実は遊佐さんがおうちに帰ってないみたいなん……」

「うんっ」

電話の向こうの相手は、千穂が何か聞く前から数秒の静（しず）けを上げた。

「……その声は……遊佐さんの行き先、知ってるんですね。鈴木さん」



決して意図したわけではないのだが、どうやら不意を突いた形になったようだ。

電話の向こうで、鈴木梨香が遠慮する気配がした。

恵美の元職場の同僚である梨香も、今や千穂と同じくエンテ・イスラ格みのトラブルに巻き込まれ、真実や恵美の真実をかなりの部分把握している身である。

恵美は梨香を精神的にも頼りにしていた気配があるし、恵美がいるとしたらす中八九梨香の所であらうと決め打ちしたのである。

「参ったな。千穂ちゃん、明日まで待つてもらえたりしない？」

すると梨香は奇妙なことを言い出した。

このとき千穂は、もしかしたら恵美が梨香の家にいないのではないかという千感を覚えた。

「……私はいんですけど、エメラダさんに何も言わずにっていうのは良くないです。親しすぎるからこそ話しにくいときってあると思いますけど、それでも、人のおうちの冷蔵庫について言われても聞け辛くありません？」

「ははは、そりやそうだ。エメラダちゃんには悪いことしたね」

梨香が苦笑する気配が伝わってくる。

「色々聞いたよ。またあの子、随分しんどい思いしたみたいね。お母さんが見つかったんだって？」

「はい。見つかったというか、なんというか」

恵美が榮香に大体のことを明かしていることは予想していたので、千穂は素直に答える。

『でも、私も大体の状況は把握したけども、まー正直な感想として、最終的にはどのみちガチンコでなんとかしなきゃいけない性質の話だな、と思ったのよ』

それは千穂も分かっていることだ。

ライラの登場は確かに劇的だったが、それによって恵美や真奥の立場が大きく動くのかと言われると決してそんなことはない。

せいぜい、今まで何故彼女がひたすら暗躍していたのかの種明かしが行われ、これまで燃つていたわずかな疑問が解決する程度のことだろう。

ライラには大きな目的があつて、その目的を達成するために大きな力を持つ恵美や真奥を出でにしているだろうこともなんとなく分かる。

ただ……。

『別に今の恵美って、急いでやらなきゃいけないこと何も無いんでしょ』

そうなのだ。

究極的には恵美の目的は真奥、西原、藤原の討伐なのだが、千穂にとっては喜ばしいことに、最近の恵美が『魔王討伐』についてどこまで本気なのか怪しく思えることが多々ある。

二度と会えないと思つていた父親とも再会し、エンテ・イスラでオルバに囚われてしまったことについての真奥からの憎りも返した。

エンテ・イスラ東大陸の騒動では魔王サタン敗北後の魔王軍戦隊だったマレブランケ一党も大人しくなり、さらには何かと恵美や真奥達の邪魔をしてきた天界が、向こうから地球への接触を断つたと志波とガブリエルが証言している。

サリエルは今や木崎真弓との未来にしか興味が無く、ガブリエルは志波と天界と真奥の力の前に完全に抑え込まれている。

日本で生活する上で生活の糧を得るための新しい職場にも巡り会った。

となると、今の恵美がやるべきことは、毎日を精一杯生きる、ただそれだけなのである。

もちろん、当面の敵がいなくなったからといって未来の脅威が全て取り払われたわけではない。

だが今や恵美の身の回りには多くの頼りになる仲間がいて、何が起ころうとも迅速に対応できるこれ以上の布陣が完成している。

ここまで来れば、恵美はもはや完全に戦いから引退して、エンテ・イスラの故郷で父親との農業生活を再開しても良さそうなものだが、そうできないのはやはり真奥の存在が大きいからだ。

真奥が日本から動く意志が無いのだから、恵美も日本からエンテ・イスラには帰らない。

「……むう」

「千穂ちゃん？ だしたん？」

「え？ あ、なんでもないです……」

千穂は頭の中で恵美の状況を整理していたら、妙なことに気がついた。

恵美の中で『魔王討伐』の目的が徐々に彩鮮化しつつある。

それでも恵美の中でその目的が中断したり消滅したりしないのは、一応真奥率いる魔王軍によつて、恵美自身だけでなく多くのエンチ・イスラの人々が苦しめられたという事実があり、それは断罪されるべきだと恵美が思っているからだ。

だが、それでも明らかに恵美の真奥への個人的な敵意は以前より衰えており、むしろ千穂が望む皆が仲良く暮らせる状態に移行しつつあるのではないかとすら思えることがある。

だがその状況をシンプルな言葉に置き換えてみると、『恵美は真奥のために日本に留まっている』ということになる。

それはなんだか、気持ちがとてもざわつく響きだ。

「あー、まー千穂ちゃんにすれば複雑か。ちよろつと聞いたけど、恵美ってば昔よりも真奥さんに対する憎しみとかが薄れてるっばいしね」

「そ、そういうことはいいんですー　っていうかそれでいいんですー」

千穂は誰も見えないのに思わず顔を赤らめてしまう。

つい忘れていたが、このお姉さんは整しが良い上に野次馬根性が強いのだ。

そして榮香がこんなことを分析してくるあたり、恵美は榮香に対してかなりの部分を包み隠

さず話したのだろう。

「まー、そこらへんのことはおねーさんそっちで好きにすればいいと思ってるんだけどさ」

「なんでですかそこらへんのことって」

きつと今日の前にいれば、梨香は藤らんだ千穂の類に無闇にちよっかいを出してきたことだらう。

「まあまあ。でね、要するに今の東美ってば、真真さんをブッ倒すってのも、とりあえず横に置いておけることになっちゃったわけでしょう？ 漠然とした目的になっちゃったっていうか」

「え、ええ、まあ」

「そんなとこに販介事の種類でしかない放蕩者の親が突然現れりや嫁にもなるよ。東美にはなんの責任も無いのに、食ったこともないお母さんとやらがどこかで勝手に作った借金を押しつけてくるようなもんでしょ。そんなのに東美が振り回される必要ないもん」

例は東美かもしれないが、感覚としてはとても分かりやすい話だ。

「でね、私はまあ頼みは聞いてあげられるかもしれないけど、やっぱ事情知っちゃってるからどうしても発想がエメラダちゃん寄りになっちゃうんじゃないかなって思ったの。あの子が凄（凄）い力持ってること知ってるから、何かそれを役立てなきゃいけないんじゃないかって、どっかで思っちゃう気がしてさ」

「ああ、それは……私も、そうかも」

「借金なんて例え持ち出したけど、重美のお母さんはオルバとか天候とかいう人達みたいな悪人とは違うんでしょ？ それこそ勇者エミリアよ、世界を救うためにそなたの力が必要なのだ、くらの感覚なんじゃないかなーって思ってる」

「それは、とても当たってると思います」

千穂は深原の病室での志波の請を思い出して頷いた。

「ただ、今の重美にはそういう話を引き受ける義務も、気持ちの余裕も無い」

「はい」

「だからね、私、重美が仕事とかじゃなくて、彼女の人生にとって大事なことをするために忙しいって状況を作っちゃえばいいんじゃないかって思ってる」

「遊佐さんの人生にとって大事なことをするために忙しい状況？」

梨香の回りくどい解説に首を傾げる千穂だが、梨香はそんな千穂の様子を見逃かしたように忍び笑いを漏らした。

「千穂ちゃん、このあと時間ある？」

「え？ あ、はい、今日はバイトも無いので……」

「んじやあ、電話終わったなら重美のいるところメールするから、アボなしで突撃してみなよ。あつちも千穂ちゃんなら丁度いい時期だったことで歓迎してくれると思うし、きっと面白いことになってるから」

「え？ あ、はい、で、でも一度いい時間って？ っていきか、あっち？」

「行けば分かるよ。千穂ちゃん、今高「だったよね？」

「そうですけど……」

自分の学年が、一体恵美にどう関係してくるのだろうか。

「別に急がなくても恵美は逃げやしないから、エメラダちゃんにはもう半日だけ我慢してもらって、恵美に会ってから連絡してあげて、それじゃね、切ったらすぐメール送るから」

「あ、はい、ありがとうございまして……」

た、と言いつ切る前に、梨香は電話を切った。

「って速っ！」

そして電話が切れて三十秒もしないうちに、梨香からメールが来た。

もしかして千穂が連絡することを見越して予めメールを作成していたのではないかと勘繰りたくなるほどの速さだ。

だが千穂は、そのメールの内容にまた首を傾げる。

「……どこ？」

どうやら個人宅の住所のようだ。

場所を検索してみると、豊島区の雑司が谷駅近くのマンションの四階。佐塚からだとうとう上層に乗り入れている都営新堀線（とうえいしんぼりせん）で新堀三丁目まで行き、そこから東京メトロ副都心線に乗り換

える必要がある。

だが、住所と一緒に記された名前が、千穂の知らない名前だった。

「清水真季さん……？」

「……、かな」

十八時少し前。秋も深まって大分陽も暮れた頃、千穂は東京メトロ有楽町線が谷駅と、都電の鬼子母神前駅にほど近い小さな鉄筋コンクリートのマンションを見つけた。

「コンフォートビル四〇一号室。ここ、だよな」

何度も何度も住所と建物の名前を確認しながら、オートロックのインターフォンを押した。外のポストには、残念ながら住人の名を懸せられる表札のようなものは無い。

「はいー」

すると雑音と共に、聞いたことのない女性の声が飛び出してくる。

「あ、あの清水さんのお宅、ですよな」

「そうですけど、どちら様ですか？」

千穂が白旗なさげに声をかけ、インターフォンの向こうの声にも警戒の色が灯るが、  
「あの、私、佐々木と言います。鈴木梨香さんから、最近遊美さんがこちらに……」



「あ、ああ、ああああ！」

葵香の名を出した途端に、雑音交じりの声が一気に高くなる。

「はいはいはい聞いてます聞いてます！ 今聞けますね！ 蓮佐さん！ 佐々木先輩がい  
らっしゃいましたよ！」

がちや。

「あ」

何やら随分<sup>ていぶん</sup>テンションの高い声が出たと思ったら、通話は切られてしまったが、自動ドアは  
開いたので、入っていいということだろう。

「千穂室」？」

色々と予想できない展開が続っていて、千穂も目を白黒させてしまう。

要領がいるのは間違いないさそうだが、結局清水という女性の正体は分からないままだ。

千穂はエレベーターで四階に上がると、すぐに目的の部屋を見つける。

ここにも表札らしきものは掲示されていないが、恐らくは防犯目的とかなんらかの理由があ  
るのだろう。

もう一度息を整えると、千穂は部屋の前のインターフォンを押した。

「ようこそいらっしゃーい！」

反応は直接的だった。

待ち構えていたのではないかという勢いで玄關の扉が開き、千穂より少し年上の女性が蘭国の笑顔で千穂を出迎える。

「わあ！ 梨香さんが言ってた通りだ！ すっごく可愛いー！」

「あ、あの、は、初めまして、佐々木千穂と言います」

「どうも初めましてー きあ入って入って。恵佐さんー！ 超可愛い先輩が！」

「あ、あの」

家主の女性に掃除機に吸い込まれるような勢いで部屋に上げられた千穂は、

「あ」

「ごめんね、心配かけて」

「ちーねーちや、こにちやー」

入ってすぐの洋室で、ソファに腰掛けて気配すかしそうにこちらを見る恵美と、ソファでリラクサス履のぬいぐるみと遊ぶアラス・ラムスと目が合った。

「恵佐さんー」

千穂は引き上げられたままの勢いで、恵美に駆け寄る。

「びっくりしましたよ！ エメラダさんからおうちに帰ってないって聞いて！ 普通にお仕事

来てたから私全然……」

「うん、ごめんね、なんだかヤケおこしちゃって」



恵美らしくない言い訳だが、仕事にはきちんと求めているあたり、確信を持っての行動なのだろう。それだけに、エメラダに心配をかけるようなことをするのがまた解せないが、とにかく千穂は大きく息を吐いた。

「もう……私や恵美さんなんかどうでもいいですけど、エメラダさんにだけは言っておいてあげてください。今の遊佐さんの気持ち、分からないエメラダさんじゃないですよ」

「うん、それは反省してる。帰ったら、きちんと謝るわ」

しおらしく顔を俯がせる恵美。

千穂は恵美になんらかのトラブルが起こったわけではないと分かって顔をなで下ろすが、さりとて何故こんな所にいるのか、そもそもこの洋館の主である清水恵季とは何者なのか、分からないことだらけだ。

千穂のそんな顔つきを感じ取ったか、恵美が千穂の後ろを指し示す。

「彼女、清水さんは……恵季ちゃんね、ドコデそのときの、職場の同僚なの」

「です！」

「です！」

真季に合わせて、アラス・ラムスの元気のいい合いの手が聞こえてくる。

「遊佐さんにはもの凄く色々お世話になったんです！」

「そ、そうなんですか……」

明るさと勢いに圧倒されようになるほど、瀟灑とした女性だ。

碧香も大膽明るいキヤラをしているが、真季にはそれに輪をかけたある種警告しるすら感じさせるほどのパワーがある。

「遊佐さんから色々本先輩の話は少し伺ってました。清水真季です、よろしくお願いしますー！」

「よ、よろしくお願いします。あの、失礼ですけど清水さん私より年上……ですよね？ その「先輩」って？」

手を取られ強引に握手された千穂は目を白黒させる。

「ああ、それは真季ちゃんのカヤラというか悪癖というか」

「悪癖はひどいですよ」

真季は笑って口を失らせながら、手を握ったまま千穂に向き直る。

「私、遊佐さんと碧香さんに、単純なバイト先の先輩後輩以上にお世話になったんです。二人とも先輩って呼ばせてくれないんだけど、色々本さんは、遊佐さんの今のバイト先の先輩なんですよわ？ いやあ私にとっても先輩です」

「え？ あ、あの、こ、困りますー！」

一体何を言っているのだ、この人は。話が全く繋がっていないではないか。

「だから言ったでしょ。やめてあげて、千穂ちゃん真面目なんだから、年上に先輩とか言われたら本当に困っちゃうのよ」

「もうだってー」

真季は相変わず笑顔だ。

「蓮佐さんが笑めるってことは、高校生かもしれないけど凄（サイ）い子なんだろうな——ってなるじゃないですか」

「なるのは真季ちゃんの前自由だけど、その表現はどうかと思うわ」

「蓮佐さん、清水さんに何を話したんです？」

「当たり前障（さわ）りないことしか話してないはずだけど……真季ちゃん、時々夜に直情的で」

困惑しきりの千穂に、更美は申し訳なさそうに手を合わせる。

「それに、梨香さんからもちらほら話が出てたのも悪い出（で）したんですよ。最近友達になった子に凄（サイ）い高校生がいるって。それって、佐々木先輩のことですよわね？」

「さ、まあ、凄（サイ）いかどうかは自分では……」

「蓮佐さんと梨香さんが口を揃えてそう言うんだから、これは失礼があつちやいけないぞって思うじゃないですか普通！」

「はあ」

普通、というのはこの場合、単なる強調の感嘆符くらいに感じて捉えた方がいいだろう。

「ということで、佐々木先輩って呼ばせてもらいますね」

「理由も無く年上の人から先輩とか敬語とか紹介してください！」

「じゃあ年上権限ということで、佐々木先輩って呼ばせてもらいますね！」

「遊佐さん！ なんなんですかこの人！」

「ごめんね千穂ちゃん、この二、三日、真季ちゃんテンションおかしくて」

まるでゆげない真季に、ついには千穂の方が首を上げてしまった。

「だってあの遊佐さんが私を煩（わづ）わづめてきてくれたんですよ！ 応えられなきゃ女が壊（やぶ）るじゃないですかー テンション上げておなきやー！」

「ちょ、ちょっと気分転換に遊びがてら話を聞きに来ただけなのよ」

真季のテンションを言い訳するように千穂に伝える。

「真季ちゃん、それ以上やると千穂ちゃんが怯（おそ）えるからちょっと落ち着いて、ね？」

「あ、はい」

真実の言うことは素直に聞くらしく、ずいぶんその場に腰を下ろす。

真実（まこと）は籠（かご）りついてくる千穂を落ち着かせる、事情を説明しはじめる。

「改めて紹介するわ。この子は清水真季ちゃん。私や梨香の、ドコダその職場の後輩で、早生（はやせい）

多大学の……二年生だっけ？」

「え、早生（はやせい）さん？」

真季が何か反応するよりも早く、千穂もよく知る大学の名を聞いて目を丸くする。

「大したことじゃないです。親に言われて仕方なく行ってるだけで、本音は音大に行きたかつ

「たんですよ」

「え、いやでも、学生多つてそんな簡単な理由で入れる大学じゃなかったような……」

千穂は焦る。

大学全入時代と言われて久しいが、やはりある程度のレベル以上の大学は難関としてのポジションを維持し、入学するにはそれなりの努力が必要となる。

高田馬場にある早生多は、それなりどころか相当の努力が必要となる大学のはずだが……。

「事情はともかく、頑張りましたから！ ノリが体育会系なのは高校までやってた陸上のせいなんで許してください。それでも我慢してる方なんです」

「はあ……」

大学二年生ということとは、最低でも千穂より三歳以上年上のはずだが、一貫して敬語で接してくる真季に千穂は若干意識すら覚えたつあった。

「最初はアラス・ラムスまで先輩扱いでね……」

恵美が少し遠い目をし、

「だって蓮佐さんのご親戚ならそれはもう私にとつては蓮佐さんと同格ですし」

真季がそう言うので、千穂は恵美がアラス・ラムスについてそう説明したのだと認識する。つまり真季は恵美やアラス・ラムスの正体を知らない。梨香も何も話していないのだろう。

「あと可愛いし！」



「やん、まさねーちゃ、きらくももってっちゃやー」

アラス・ラムスが戯れているリタックス熊は、真季の私物なのだろうか。

真季はアラス・ラムスの身長とはほとんど変わらないサイズのリタックス熊を繰り上げてじやれ合おうとするが、アラス・ラムスにすげなく拒否されてしまう。

「可愛いですよねー」

「え、ええ……」

アラス・ラムスが可愛いことには同意するが、それでもこう、なんというか、この何をされてもめげない元気さは本暗に熱を上げるサリエルに通じるものがあるのではないかと思ってしまう。

だが、そう思ったところで、東美が校舎の家にいる理由はその返りにあるのではないかとともに考えはじめた。

そんな千穂の横顔を見て、東美がぼつりと言う。

「私ね、真季ちゃんに、大学や受験の話聞きに来たの」

「えっ!?」

千穂にとっては、まさに驚きの一言だった。

「そ、それって遊ばさん、日本の大学に入らって言うことですか?」

千穂は言ってしまうから「日本の大学」という発言が何層な一言であることに気づきはっ

として真季を見るが、

「まあ海外のミッションスターや卒つてのは結構大きいと思いますよ。遊佐さんの場合は海外の大学の選拔試験を捨てるのはもつたない気はしますけどね」

真季はごく自然に千穂の驚きを受けたので、千穂は恵美が真季にどんな風に自分の出自を語ったのか察する。

恵美はマダロナルドでも、一貫して帰国少女という立場を述べている。恐らくドコデモ時代から、その話は周知のことだったのだろう。

「私の周りで大学行つてて、相談できそうな人つて真季ちゃんくらいしかなくてね」

「光榮です！」

真季は光り輝かんばかりの笑顔だ。

「結局は例のこととでむしやくしやしてて、ストレス解消で件事の後、ご飯食べに行ったりして付き合わせちゃっただけなんだけど……でも、一日だけ真季ちゃんの大学も案内してもらったんだ」

「大学って、学生じゃなくても入れるんですか？」

小中高なら有り得ないことだが、よほど狭いか閉鎖的な立派でない限り、大抵の大学は部外者も自由に出入りが可能であり、一部の学術施設なども申請すれば利用することもできる。

「コマにもよりますけど、聴講生として講義を受けることもできたりしますよ。遊佐さんさ

がに遠慮してましたけど、でも今日のお昼はうちの学食で食べました」

「ええっ？」

千穂にとっては新鮮な驚きであった。

高校の進路指導の中で一部私大のキャンパス見学などの催しが開かれていることは知っていたが、そこまで自由に部外者が出入りできるとは思ひもしなかったのだ。

高校までの常識なら、生徒や保護者でもない部外者が学校の敷地内にみだりに入ってくるなどあり得ないことだ。

千穂のそんな驚きに覚えがあるのか。

「まあ、私も高三でオープンキャンパスとか行くまでは知りませんでしたけど」

と、真季も何かを懐かしむように頷く。

「大学は、高卒相当の資格を持ってれば何歳になっても入学できますし、地域の人向けのカルチャークラスなんかも開いてますし、色々な企業の人や研究者、教大生なんかも出入りするんです。中学や高校みたいに制服があるわけでもないし、研究施設とか図書館とかを除けば基本誰でも出入りは自由です。名門お嬢様大学とかだと、また違うのかもしれないけど」

「へえ……」

千穂はただ相槌を打つしかない。

「目に映るものみんな新鮮で、凄く楽しかったわ。学食も安くて美味しくて、いろんなお土産

べて」

「店を選ぶ？」

「いわゆる生協の学食の他に、カフェテリアとか食堂とかが使うようなちよっとお高めのお店とか、うちの学校はそこそこ選べる方だと思います」

「……」

管轄北高校の学食は当たり前だが一つしかないし、ほとんどのメニューは昼休みが始まる頃には売り切れてしまう。

これまで「大学生活」というものを選択と捉えてきた千穂だが、真季の話の大半は千穂の想像だけにしなかつた話だ。

「まあ唯一の心配ごとといえば、美人の難佐さんが偶然出会った学部の軽い男共のターゲットにならないかどうかってとこでしたけど、そこはアラス・ラムスちゃんの鉄壁ガードで」

真季は額に手を当てて奇妙な笑みを浮かべている。

「そ、それってな、な、なナンバってことですか？」

千穂は知識の上でしか知らない事態を当惑しながら尋ねると、

「ま、そういうことですね。草食系男子なんて言われて久しいですけど、大学にはまだまだ肉食も健在ですよ」

「わー……」

真季の回答は肯定も否定もしていないのだが、また一つ、千穂は大学についての妙な知識を仕入れてしまう。

「佐々木先輩なんか、大学行ったらきっと大変ですよ。サークルのシンカンの時期は、対談係の男共は飢えたハゲタカのように可愛い子に殺到しますからね」

シンカンが何を意味する言葉か分からないが、真季から吹き込まれる大学生活のごくごく一端に触れただけで、千穂は回りかけていた目がさらに回りそうになる。

だが、次の一言に千穂は虚を突かれ冷静になった。

「そういえば佐々木先輩、今高二って聞きましたけど、進路とか、そろそろ回りの声がウズクなってくる頃じゃありませんか？」

「えっ……」

進路、などという言葉は、思えば久々に他人の口から聞いた気がする。

いや、高校生活を送っていれば、もう高二の秋なのだ。千穂の周りにもわずかながら、大学受験を意図した行動を起こす生徒も現れはじめている。

「第一志望じゃない大学に行った私が言うのもあれですし、もの凄くうっざい大人の意見って思われるかも知れませんが、やっぱり目的意識がある程度はつきりしてないと、受験も大学生活も全然モチベーションが上がりませんから、今ぐらいから少しずつ、自分がやりたいってほんのちよっとでも思うものがあつたらリストアップとかしておいた方がいいと思います」

「自分のやりたいこと、ですか」

その瞬間千穂の心の中に、最初に高峯に迫られたときとは違ふ大きな焦りが生まれた。千穂にとって今最も大事なものは、真実や戸屋や津関、そして美奈と鈴乃とアラス・ラムスと、いつまでも平和に過ごしたい、という願いだけである。

だがそれ以前に、千穂は日本の高校三年生なのだ。

高校三年生には高校二年生として、やらなければならぬことがある。

そしてこのまま日常を過ごしている限り、千穂はもう少しで高校三年生に進級するのだ。

「進路……」

高校三年生になれば否が応でも進路について具体的に考えなければならぬ。

マダロナルド總々谷駅前店にアルバイトとして採用されたとき、千穂は同じようにして進路について迷っていたが、今とあのときでは自分を取り巻く環境が全く違う。

今も大学に進学する選択肢は、漠然と常に心にあるが、大学に進学するには相応の努力と時間が必要である。

マダロナルド總々谷駅前店の先輩クルー達の中にも、就職活動を理由に退店する予定の者が何人かいる。

自分もいずれそうやって、自分の生活のかなりの部分を食料館強にあてなければならぬことになるだろう。

今の千穂の成績は、ただ大学生になるだけなら問題も無いレベルだ。

だが、今の真季の語ではないが、そんな軽い気持ちで進学しても後悔の日々を送る羽目になるだろう。

親にも、自身の無い大学生活のためのお金を出させるわけにはいかない。

それに何より、何も努力をせずに行く先を選んだりしたら、自分は真実や理想の傍にいる資格を失う。

「進路かあ。なんだか、またよく分からなくなってきました」

千穂はこれだけのことを一瞬で考えながら、結局何もなかった思いを言葉にして吐き出した。

「それで、進佐さんは、早生多に入りますか？」

ほんやりした質問しかできない千穂だが、真美は笑って首を横に振った。

「まさか、無理よ。先立つ物も無いし、それに受験の過去問題を見せてもらったんだけど、何が書いてあるのかすら分からないレベルだったわ」

「過去問……あの、見せてもらって、いいですか？」

「どうぞ、進佐さんがそういうこと考えてるって聞いて、こないだ実家から持ってきたんです。そう、その赤い背表紙」

ふらふらと立ち上がり真季の部屋の本棚から、早生多大学過去問題集と題された本を手に取り

り、しばらくしばらくとめくりながら、やがて千穂は耳から煙を吹きはじめる。

「こ、これは……」

全く分らないとは言わないが、大体分らない。中には何を問われているのか判断すらつかないものすらある。

「いくらなんでも、勉強なんか何年もやってない私が急にそんな試験受けられるはずないし、そこまで本気で『大学受験目指して勉強したい』ってわけでもないのよ。ただ、大学生ってどんな生活してるんだろーなって興味があっただけで」

「濠佐さん、英語できるんだから少し頑張ればどうとでもなると思いますよ」

そう言いながら真季はやおら立ち上がると、部屋の隅から薄いノートパソコンを手に戻ってきた。

濠佐が使っているものとは比べ物にならないほど世代と機種の新しいような外見の超薄型ノートパソコンを立ち上げると、真季は画面を衷美に見せる。

「それで濠佐さん、農業関係が強そうな首都圏の大学っていうとこんな感じなんですけど」

「農業……あ」

千穂はそのキーボードで目を見開く。

「農業で首都圏っていうとなんとなく東京農研大って感じしますが、明彦も生田の方に農学部持ってますし、扶桑大学なんか無い学部探す方が難しいレベルですからね。あとは一口に



農業と言っても畜産とか生命科学とか園芸とか都市政策とか色々あって、北郷大とか地方の国立とかにも、面白そうな学部いっぱいありますよ」

「へえ、ちよつといじらせてもらっていい？」

「どうぞ、ここ、どの大学にもリンクから飛べるようになってるみたいですから」

惠美は本気八割、興味二割くらいの様子で真子のパソコンをいじりはじめた。

「じゃ木先輩は、進路は何かこれっていうものがあったりするんですか？」

「へっ？」

唐突に振られて、千穂は持っていた進路調査を取り落しそうになる。

「えっと、あの、今のところは英語に強い学校かな、くらいしか……」

なんとなく春光の進路調査票に書いたものを上げてみるが、惠美が農業関係の学部を探すほどには本気ではない。

英語など、農業以上に多岐に渡る分野で研究されている学部で、極端な話どんな学部に行っても英語と無関係ではられない。

「留学とか考えてる感じですか？」

「留学？ いえ、そこまでではないですよー。そこまでではない、ですけど……」

じゃあなんのために英語をやろうと思った、となると、今のところお店に来る外国人のお客さんと話せるようになるくらいしか思いつくことが無い。

「もしかして、やりたいことや勉強したいことが分からなかったりする感じですか？」

「……そんな感じですよ。前は一度、その悩みを吹っ切ったつもりでいたんですけど」

「なるほど」

真季はうんうんと頷くと、パソコンに見入っている専美をちらりと見てから千穂に近づき小声で囁く。

「ある人の受け売りなんですけど」

「は、はあ」

部屋の中には車美とアラス・ラムスしかいないので、真季が声を潜めたところで意味は無いし、専美がちらちらこちらを見ているのとても気になる。

「例をいいのかわからないなら、本当に自分の大切なものに逢り会ったときのために、選択が広がりそうな所に行くことをお勧めしたいです」

「選択が広がりそうな所……？」

「そうですね。佐々木先輩は人生設計する上で、適当に年取の多い男と結婚すればいいって考える人じゃありませんよね。だから、今の時点でやりたいことがバツと思いつかないなら、とにかく普通に勉強頑張って、出願の確切が来るまでは少しでも偏差値と汎用性の高めのところを目指しとくと思います」

「どういうことですか？」

前後の文がなんとなく矛盾している気がするが、とりあえず千穂は先を促す。

「例えば、確かに早生多はレベルが高い大学として名が通っていますが、世間的には無名で偏差値が高くはないと思われてる大学にも、高度で専門性の高い研究ができる学部を擁した所は沢山あります。志があるなら偏差値や知名度よりも研究環境の良い方へ行くべきですし、その方が絶対によい仲間に遇り会えます。まあ、東大とか京大とかいう話になつてくるとまた全然話が違つてきちゃいますけど、そこまではいいですか？」

「は、はい、それはなんとなく分かります。あら、さすがに東大京大は考えないです」

自分でも学校の成績はいい方だという自覚はあるが、東大京大ともなるともはや自分にとってはエンテ・イスタよりも遠い場所である。

「で、ですね、今の時点で目指す方向が分からないなら、なるべくいいところに入って知ればいざやりたいこと見つけたとき、転身が楽になります。最初から目指すのに比べれば幾分遠回りにはなりますけど、目指せなくなるよりはずっといいと思いませんか」

「確かに……」

何かの実体験に基づくものなのかは分からないが、ひたすら朗読くさいテンションの真率の言葉が、妙に心に響いた。

「私の先輩にメガパンタの内定を蹴った人がいました。道を歩けば入り口が転がってる誰でも知ってるような銀行です。就職すれば高給取り間違いないし、超有名企業だから親戚や友人にも

自慢できますし海外への展望だって開けます。でも先輩はそこを厭って就活中に偶然出会った別の会社を選びました。どんな企業に行ったと思いますか？」

「さ、まあ……地元の銀行とか、大手の商社とかですか？」

「いい知識でありそうな選択肢を上げてみるが、真季は首を横に振った。

「先輩は船のスタリューを作る会社に行きました。今は広島で大きなスタリュー磨いています。まあ平たく言えば、造船業ですね」

そんなこと分かるかとは思ったが、千穂も真季が言いたいことがなんとなく分かってきた。

「メガバンクって最高の就職先を願ったせいで就職中から大バッシング食らったらしいです。

就職課にも考え直せって説得されたらしいんですけど、先輩は全く聴かず、俺は日本の造船業を支えるんだって言って飛び出していきました。この間ビルの三階分くらいあるスタリューを作ってオーストラリアの会社に納品したって自慢するメールが届きました。世間的には夢を追いかけて生涯賃金を目減りさせる道に行ったようにしか見えなくてもいいんですけど、大好きな船にまつわる仕事に就いて、毎日仕事に行くのが楽しいって思える環境って、得難いものじゃありませんか？ お給料だってそりゃ銀行に比べりゃ少ないですけど、世間の水準に劣らないんですし」

真季は、大企業に夢や生きがいが無いと言っているのではない。あらゆる選択肢を射撃範囲に入れるための努力をした人間の姿容を語っているのだ。

「世の中いろんな大学や専門学校や会社があつて、それぞれにいろんな選択肢があります。その中で佐々木先輩の選択肢が一番広がりそうな所を、まずは選んでみてはどうかと思ひました。三歳年上なだけで先輩面するおぼさんの、かつたるいアドバイスです」

「いえ……そんな」

「まあ、佐々木先輩に既に水久就職のアナがあるというのなら、深く悩むことはないと思ひますけど、さすがに今どきそれは……」

「えいきゅ……っ!!」

水久就職とはつまり、高校卒業後に結婚の道を選ぶ、という意味に他ならない。

先ほどから顔を上げっぱなしの耳から今度は蒸気が噴き出して、体の中で何かが爆発し顔が真っ赤になつてしまう。

想像力が妙な方向に豊かな自分をこのときはど愧めしく思つたことは無い。

そんな主観分かりやすい反応をしてしまった千穂に、真琴はにやにやと顔を寄せる。

「あれっ、佐々木先輩まさか……」

「違います違います違います！ 私何も考えてません!!」

「こんな美少女のハートを射止めた男がこの世のどこかにいるなんて!」

「あわわわわわわわわ」

「真琴ちゃん、千穂ちゃんをからかわないで!」

「はい」

見かねた恵美が釘を差してきたので、真季はさっと引き下がった。

「ふー、ふー、ふー」

千穂は荒く息を吐きながら、狭い室内で真季と悪い切り距離を取る。

この女性は無防犯な、人との距離の詰め方が、菜香よりも圧倒的に強く強い。

「まあ、冗談はさておき」

「どこからどこまでが冗談だったんですかあー」

割と真剣に抗議する千穂に、真季はあまり反省していなさそうな顔で頭を下げる。

「ごめんなさいごめんなさい。でも、この二、三日ずっとこんなテンションだったんで、つい

楽しくなっちゃって」

それで遊ばれてはたまったものではないが。

「でも、真面目な話ではあるんですよ。今やっというて自分が損しない努力は何かって考えるだけでも、結構方向性見えてくると思えます……って話を」

真季はちらりと振り返りながら言った。

「私は、少し前に蓮佐さんから言ってもらいました。あの日から私、前より大学生活楽しくな

ったんです」

「ちよ、ちよっと真季ちゃん？ そ、それって」

衝突に話を移られて頭を泰らめる東美。

「覚えてますよ。私、お酒弱いし酒癖良くないって言われますけど、記憶飛んだりはしないんです。あの日渡佐さんにもらった言葉は、私の宝物です」

「やめて……!!」

あらの方向から強烈なボディブローを叩き込まれて、東美はその場で卒倒してしまふ。

「い、言ったでしょ? 私はまだ自分の力で何か成し遂げたわけじゃないし! そんな偉そうなこと言ったなんて覚えててほしくないから今すぐ記憶から消して!」

「やです。私、あの日渡家訓と本気で学生生活変わったと思ってるんです。人生のターニングポイントって、本当意外な所にあるなって思ってます」

「バカなこと言っでないで! まったく……!」

東美もこの真事にはやや振り回される傾向にあるらしい。

「まきねーちゃ、まきねーちゃ」

「ん? なあに、アラス・ラムスちゃん!」

するとそこに、真事の足元にリラタス熊を引きずりながらアラス・ラムスがやってきた。

「ばばなの」

「はは?」

「そ」

「ちょ、アラス・ラムス？ 何を言い出すの？」

「あ、アラス・ラムスちゃんだ」

惠美と千穂は、あどけない横顔に恐るべき危機感を抱いて声を上げるが、その爆弾は二人の焦りをよそに天高く放り投げられたのだ。

「ばばなの。ままもちーねーちゃも、ばばと仲良し」

「ちより」

「……………アラス・ラムスちゃん」

「う？」

「その『ばば』のこと教えてくれたら、そのオラッタス願あげる」

「真季ちゃん!!」

「清水さん!!」

年輩もいかに素子を結婚で釣ろうとする真季を惠美と千穂は全力で止めにかかるが、一度出た言葉は取り消せない。

教えたらオラッタス願をもらえる、と同時に理解したアラス・ラムスは、目を輝かせて小さな口を開いた。

「ばばね、まおうなの」

「まおう？ そいうお名前？」



「清水さんやめてください！　小さい子を賄賂で釣ろうなんて恥ずかしいんですか！」

「真季ちゃんさすがに怒るわよ！」

女子三人が下階の迷惑も顧みずくんずはぐれつしはじめても、アラス・ラムスの教頭会は終わらない。

真季は真季で、東英と千穂の反応を見てアラス・ラムスの言葉に信憑性を感じ取ったか、なかなか引き下がろうとしない。

「まおう……なまよ。うん、そう、ばば、まおう」

「まおうさんかあ！　変わった名前だね！」

アラス・ラムスの口を無理に閉じさせるわけにもいかず、東英と千穂は二人で真季の口を止めにかかる。

「ばばはね、おかねすきなの。でもびんぼうで、しつそなの」

「あ、アラス・ラムスちゃん、もうその辺で……」

千穂は、真季のことを真季に聞かれたくないのはもちろんだが、それ以上にアラス・ラムスが真季を許して「野王」と言い切ってしまったことに驚きと落胆を感じ得ない。

ここは心を鬼にしてアラス・ラムスの口を「しー」するべきかと考えた瞬間、

「それで、すごきびしがりやさん」

アラス・ラムスが、そんなことを言い出した。

「へ？」

「……アラス・ラムス？」

真季をクリンチした恵美だが、アラス・ラムスの真実に思わず目を圓か<sup>とら</sup>せた。

「真実さんが、寂しがりや？」

「ばばは、おともだちがだいじ。だから、どこにもいってほしくないの」

「ゆ、ゆ、ゆざさん、ぐ、ぐるじ……」

「ばばは、おかねがだいじで、おともだちがだいじで、おしごとがだいじなの。だからままとちいねーちやもすずねーちやも、ばばがすきな」

「わ、私はそんなことは……」

アラス・ラムス相手に何を言いつたのか知らないが「娘」にはつきりと「ばばがすき」と評されたことに、恵美はとにかく動揺<sup>うごゆい</sup>した。

「ばばもおともだちがすきだから……だから、きつと、ままにめってしたの」

「……アラス・ラムスちゃん、それって……」

千穂は真季から手を離して、アラス・ラムスに向かい合う。

もしかして今、アラス・ラムスはとても大切な話をしているのではないだろうか。

恵美もそれを感<sup>かん</sup>じ取ったか、うめく真季から手を離してアラス・ラムスに向き直る。

「アラス・ラムス、今あなたが言った「まま」って……もしかして、タイタのこと？」

惠美の質問に、アラス・ラムスは正直に頷いた。

「ばばはおしごととおともだちがだいじなのに『まま』はかつてはばばにおしごとをさせようとした。……めっ、よね?」

ライラが、勝手に真実の仕事をさせようとした。

その言葉がどのような意図で放たれたのか、惠美も千穂もはっきりとは分からない。

だが、なぜだかそれはとても腑が通っているような気がした。

ライラが惠美達にエンテ・イスラの世界情勢に絡むなんらかの懸念を持ちかけてくるであろうことはあの場にいた誰もが予想できたことだ。

だが、結果的に惠美も真実もそれを拒否した。

話を聞くことすらしなかった。

なぜ、話を聞く気にすらならなかったのか。

その答えの一端が、今のアラス・ラムスの言葉に隠されているような気がした。

「勝手にお仕事をさせようとした、か……」

アラス・ラムスは真実に連れ出されてしまったからあの場には最後までいなかったし、ライラがどんなつもりだったのか、把握しているとはとても思えない。

だがこれまでになくライラを近く感じ、それでいて交わろうとしない真実や惠美には、アラス・ラムスも違和感は覚えていたのだらう。

そして彼女なりに、その答を際しようとしているのだ。

「……アラス・ラムス」

「なめに、まま」

「このリタタス階は真季お姉ちゃんだよ。アラス・ラムスのは、私が爆りに新しいのを買つてあげるわ」

「ほんと？」

たつた今まで神秘的な顔をしていたのが、爆のようには、アラス・ラムスは顔を輝かせる。

「本当よ、今日はもうおうちに帰らなきゃいけないけど、爆りに断続に寄ればまだお店開いてると思うから」

真美は部屋の時計を見上げると、時刻は十九時少し前を差していた。

「まよっ？ 恵佐さん、今日で爆っちやうんですか？」

恵美と千穂の裸身のタリランチにもめげずに迅速に復活した真季は、それでいてシヨツクを受けたように目を見開いている。

「うん、いきなり遅しかけて二泊もさせてもらったんだもの。これ以上迷惑かけられないし」

「恵佐さんなら別に何日いてももらっても……」

真季は腰りなく本気のようだが、そういうわけにもいかない。

「ありがとう、でもこめんね。私、今家に同居人がいて」

「その、まおうさんとやらでふべべべべこめんまはいこめんまはい」

真季としては全く深く考えずに発した言葉であろうが、亜美は笑顔のまま真季の両頬を片手でホールドする。

「女の子よ、海外にいた頃の友達、最初に話したでしょ」

「ふふふねふふね、ふいまへん……ふはっ……で、でも、本当にまた何かあったら、いつでも連絡くださいね。私にできることだったら、なんでも協力しますから」

「うん、ありがとう、真季ちゃん」

真季を解放すると、亜美は笑顔を心からの笑顔に戻して、真季の肩を指く。

「わひゃっ」

「本当に、助かったわ」

「あ、い、いえ、どういたしまして」

なんだかそれつが回っていないようだが、真季は亜美の肩の上で不器用に首を傾度もこもこくと動かしていた。

その様子を見て、千穂は亜美が何故、真季の所にいたのか、なんとなく察することができた。

「また来てくださいねー 絶対また来てくださいねー」

「今生の別れかというほど名残惜しき全園の真季の部屋を辞した惠美と千穂は、徳川が各駅から副都心線に乗り込む。」

水堀町の家に帰るのだ。新宿三丁目駅方面に向かう各駅停車は、ラッシュというほど混雑していない。

並んで席に座った千穂の隣で、惠美は言った。

「ごめんね千穂ちゃん、結局いつも、私達あなたを巻き込んでばかりで」

「正直、きつきは初めて巻き込まれたくなかったって思いました」

千穂は一瞬だけ地下鉄の窓に映る自分に向かって遠い目を送る。

「でもおかげで、蓮佐さんが清水さんのおうちにいた理由がなんとなく分かりました」

「梨香が言ってくれたの。どうせならエンテ・イスラとか、天使とか勇者とか全然関係ない所で、選手セクトしたらって」

惠美を全力全開で怒っている真季のことである。

普通にしていたってフルパワーで惠美を振り回しちゃうだし、惠美が何か悩みを抱えているとなったらなおさら元気づけようと大暴れするタイプに見えた。

真季は惠美の正体を知っている様子は無かったから、それほど深刻に真季に何かを話したわけではあるまいが、さうして大学入学の話が畢なる方便だったとも思えない。

惠美はいくらか本気で真季に日本の学生生活について相談に行ったのだろうし、その本気を

感じ取ったからこそ、真季も誠心誠意恵美に応じたのだ。

きつと今の恵美には、そういう相手が必要だった。

恵美は壁の上で船を漕ぎはじめたアラス・ラムスの髪を焼くようになってる。

「マダドの仕事終わったら、真季ちゃんと待ち合わせてご飯に行ったり、ジムに行ったり、あの子、アラス・ラムスがいても全然驚きもせずに、一緒にアラス・ラムスの職問着買いに行ってくれたり。おかげでなんだか久しぶりに、気分がすっきりしたわ……その分後で、エメには埋め合わせしなきゃだけど」

「きつと、分かってくれますよ」

「分かってくれても埋め合わせはちやんとしなきゃ。こういうときのエメの要求って大抵食べ物に関係することだから、今から顔が痛いわ」

「あはは」

千穂が小さく笑う顔を見ながら、恵美も微笑んだ。

「……この前のことは、私もやり過ぎたと思ってるわ。この何日かで、それがよく分かった」

「遊佐さん？」

「考えようによつてはだけど、私だって今回、真季ちゃんが何も知らないのをいいことに、彼女をダシにして自分一人がスアキリしたいがために利用したようにも見えないか？」

「でも、お友達って、そういうものじゃありません？」

千鶴は小さく首を横に振った。

「清水さんは別に蓮佐さんに見惑りを期待して受け入れてくれたわけじゃありませんし、蓮佐さんだってきつといつか全然違う形で、それも無意識に清水さんに何か今日のことをお返ししようとするでしょう？」

「それはそうなんだけどね、なんて言っただけかな……確かに私はライラのせいで色々酷い目に遭ってきたけど、ライラの側から見れば、彼女なりに私のために色々な努力を払ってきたところでは、否定しちゃいけないと思っただけ。少なくともその努力は、彼女の目的のためになんか私が必要だった、ってことじゃなく、私が彼女の願だから、って理由だからだと思ふの……ごめんね、言ってること、めちゃくちゃ」

「大丈夫です。分かりますよ」

千鶴は頷く。

「蓮佐さんを『聖剣の勇者エミリア』としか思わないような人と、ノルドさんが結婚するとは思えません。もちろん、ライラさんを全面的に支持するつもりはありませんけど……ライラさんは、蓮佐さんがずっと会えなかった娘だから、どうしてもいいか分からなくてあんなことしたんだと思います」

「まあ、ちょっとくらい歩み寄ってもいいかなって思っただけで、別にあの人をお母さんなんて呼ぶ気は毛頭ないんだけどね」



「いいんじゃないですか、それで、いきなり無理ですよ。実際にお母さんかもしれないですけど、遊佐さんにしてみればいきなり現れた知らない人でしょう？ 血の繋がりがあるってだけで、一日会って全てを理解し合えるなんて有り得ないですよ。普通に両親と十七年一緒にいる私だって、時々喧嘩しますし」

「千穂ちゃんがお父様やお母様と喧嘩するって、なんだかすごく意外だわ」

「別に私だって、そんなにいい子じゃないですもん」

「千穂ちゃんがいい子じゃなかったら、世の中平人だらけよ」

ひとしきり笑ってから、恵美はふと千穂の一言を噛みしめる。

「知らない人……か」

その言葉を、恵美はずっと前に、全く違う人物の口から聞いた覚えがあった。

まだアラス・ラムスの正体がはっきりする前のこと。

「その天使って、誰なの」

「お前の知らない奴さ」

あの男はぬけぬけと、かつて己の命を救った天使のことを語ってそう言った。

確かに、あのときの恵美はライラのことなど「この世のどこかにいるらしい自分の母親」程度にしか思っていなかった。

ライラ本人のことは、知らなかった。

エメラダやアルバートにその存在を聞かされても、そのことで心が動いたかといへば、父が生きていると知ったときほどではなかった。

だがそれでも恵美は、ライラが自分の母親である、ということを知っていた。

恵美が知っていることを、あの男は偉偉大で聞いて知っていた。

だから、なのだろうか。

「自分の母親がかつて、人間の仇敵あいつとなる男の命を助けた」という事実を、恵美は何故、恵美に語らなかつたのか。

「……」

「……………」

恵美のアラス・ラムスを抱きしめる力が少しだけ強くなり、腕の中でアラス・ラムスが身をよじる。

「達彦さん？」

あのとき、ライラのことを恵美に語らないことで、恵美になんの得があったのだろうか。

どんなに考えても、何も無い。

ライラの過去に関する情報を独占したからといって恵美に対して優位に立てるはずもないし、あのとき恵美より優位に立つならアラス・ラムスやイエソドの情報を隠すなりなんなり、いくらでも他の手はあった。

「いいんじゃないですか、それで、いきなり無理ですよ。実際にお母さんかもしれないですけど、遊佐さんにしてみればいきなり現れた知らない人でしょう？ 血の繋がりがあるってだけで、一日会って全てを理解し合えるなんて有り得ないですよ。普通に両親と十七年一緒にいる私だって、時々喧嘩しますし」

「千穂ちゃんがお父様やお母様と喧嘩するって、なんだかすごく意外だわ」

「別に私だって、そんなにいい子じゃないですもん」

「千穂ちゃんがいい子じゃなかったら、世の中平人だらけよ」

ひとしきり笑ってから、恵美はふと千穂の一言を噛みしめる。

「知らない人……か」

その言葉を、恵美はずっと前に、全く違う人物の口から聞いた覚えがあった。

まだアラス・ラムスの正体がはつきりする前のこと。

「その天使って、誰なの」

「お前の知らない奴さ」

あの男はぬけぬけと、かつて己の命を救った天使のことを語ってそう言った。

確かに、あのときの恵美はライラのことなど「この世のどこかにいるらしい自分の母親」程度にしか思っていないかった。

ライラ本人のことは、知らなかった。

エメラダやアルバートにその存在を聞かされても、そのことで心が動いたかといへば、父が生きていると知ったときほどではなかった。

だがそれでも恵美は、ライラが自分の母親である、ということを知っていた。

恵美が知っていることを、あの男は偉偉大で聞いて知っていた。

だから、なのだろうか。

「自分の母親がかつて、人間の仇敵あいつとなる男の命を助けた」という事実を、恵美は何故、恵美に語らなかつたのか。

「……」

「……………」

恵美のアラス・ラムスを抱きしめる力が少しだけ強くなり、腕の中でアラス・ラムスが身をよじる。

「達彦さん？」

あのとき、ライラのことを恵美に語らないことで、恵美になんの得があったのだろうか。

どんなに考えても、何も無い。

ライラの過去に関する情報を独占したからといって恵美に対して優位に立てるはずもないし、あのとき恵美より優位に立つならアラス・ラムスやイエソドの情報を隠すなりなんなり、いくらでも他の手はあった。

「顔、赤いですよ」

「……へ？」

妻美ははっとして、顔に手を当てる。

もちろんそんなことで自分の顔色など分かるはずもない。

だが夜の地下鉄特有の青白い照明の下でそう見えるということは、やはり自分の顔は少し赤らんでいるのだろう。

何故だろう。

分かっている。

今更否定しても、始まらない。

「千穂ちゃん、私……」

「はい？」

その言葉は、さほどの勇気を必要とせず、ぼろりと口から飛び出した。

「……なんだか、それほど嫌じゃないみたい」

発車のベルが鳴り、ドアが開き、電車が動きはじめた。

「へ？ 何が……」

千穂は訳が分からず首を傾げたが、残念ながら次の瞬間起こった出来事により、その疑問を解決する時間は失われてしまった。

「急停車します！ お困りください！ 急停車します！」

突然車内に機械音声による車内アナウンスが鳴り響き、身構える暇もなく急停車したばかりの電車に急制動がかかった。

座っていた二人も大きくバランスを崩し、車内はアラス・ラムスをしつかりと抱きしめる。

「な、なんなのさ」

「さやああっ！」

線路と車輪が軋む耳障りな音がして、電車は上がりかかっていたスピードを一気に落とす。

カシムではないが、何せ津波と新卒を結ぶ地下鉄である。それなりの数の乗客は一斉に慣

性の法則に巻き込まれ、そこかしこで転倒する者が相次いだ。

「千穂ちゃん、大丈夫ぞ」

「わ、私は大丈夫です。それよりアラス・ラムスちゃん……」

やがて完全に停車した電車の中で、車内と千穂はお互いの無事を確認し、

「びっくり！」

アラス・ラムスも大きく目を見開きながらも、それ以上動揺はしていないようできょろきょろと周囲を見回している。

他の乗客も転倒したものの大怪我を負うような者はいなかったらしく、それぞれに既に落ち着きを取り戻しはじめていた。

「えー、ただいま急停車いたしました。ただいま……えー」

少し慌てた様子の乗務員の放送が入ったのは、そのときだった。

「この電車、えー、この先、新宿三丁目駅で赤信号停車ボタンが押されました関係で、急停車いたしました。えー」

えー、と言う度に放送の後ろから、色々な機器が作動する音や、無頼で何かをやり取りする音が断続的に聞こえる。

「お急ぎのところ大変ご迷惑をおかけいたしますが、この電車この場所ですばらく停車いたします……」

「それにしても、凄（すご）い勢（いきどお）いだったわね」

「大きな事故とかじゃないといいんですけどね」

恵美と千穂は腰を落（お）ち着（き）けて顔を見合わせる。

他の乗客も、もはや電車が動いていないことを除けば普段の電車内と変わらぬ様子を見せている。

本を読む者、音楽を聞いている者、携帯電話やスマートフォンをいじる者。中にはあの大騒（おほさわ）ぎにも関わらず座席で高いびきを描（え）いている案（あん）の者もいる。

なんとなく静かになってしまった車内で落ち着（お）かなげに視線を彷徨（さまよ）わせていると、

「えー、お客様にお知らせいたします」

再び車内放送が入ってきた。

「先ほど新宿三丁目駅構内で、お客様が線路内に転落したとの通報がありました。そのためこの電車止まっております。安全の確認が取れ次第、発車する予定でございます。お急ぎのところ、またお疲れのところ大変ご迷惑をおかけいたしますことを、お詫言ひ申し上げます」

「こればかりは鉄道会社のせいじゃないっていつも思うんだけどね……千穂ちゃん？」

真美はなんとなく天井を見上げてそう言うが、千穂の方を見るしなぜか困惑したように肩を八の字に寄せていた。

「どうしたの？」

「あ……いえ、ちよつと変な想像しちゃって」

妙に小声で答える千穂。

「変な想像？」

「遊佐さん、ニュースの隠語って最近ネットとかで流行ってるの知ってます？」

「どういうこと？」

真美が首を傾げると、千穂は記憶を探るようにしながら小声のまま言う。

「例えば谷駅前店だとお手洗いのこと、十番って言うじゃないですか。お客さんに聞かれても分かりにくいように、あれと一歳で『重傷』と『重禁』の違いとか『全身を強く打って』は本当はこんな意味で……ってやつです」



「あー、何が聞いたことあるわ。『線路内に人が立ち入って』は実は痴漢とかって話でしょ？え、まさかそれが原因でっていうこと？」

まさか痴漢のせいであれほどの勢いの急ブレーキがかけられたとも思えないのだが……。

「いえ……最初はそっちなかな、と思っただけです。でもさっきの放電、普通に『線路内に転落』って言うてましたよね」

「そうだった？ あんまりきちんと聞いてなかったけど……」

「新宿三丁目の副都心線のホームって、転落できます？」

「え？」

「少なくとも新宿三丁目はホームドアがあつたはずですよ。それなのに線路に転落って……」

「や、やめてよ。千穂ちゃんらしくもないそんな怖い映像……きつと何かちよつとした言葉の綾よ。ドアとホームの隙間に足が挟まったとかじゃないの？ そういうのよく聞くじゃない」

「そ、そうですね」

恵美に寄せられた千穂自身、何故自分が唐突にそんな不吉な映像をしたのかはよく分からない。だが、どうしても違和感が拭えないのだ。

携帯電話の時計を見ると時間は十九時過ぎ。新宿三丁目は大勢の人が行き来する時間帯。

そんな中、線路に侵入でも立ち入りでもなく、転落である。

気にしすぎ。そんなことは分かっている。

だから早く電車が動いてほしい。どうもやはり自分は真実や恵美と一緒にいるおかげで妙な方向に心積えをしてしまう傾向にあるようだ。

せっかく恵美の頼みが少しだけ寛解しそうなのだ。余計なトラブルは無しにして、さっさと駅に着いてほしい。

だが、千穂の小さな願いは地下深くにいるせいか、天には届かなかった。

突然、車内の照明が一斉に消えたのだ。

「何!？」

トンネル内のわずかな数の蛍光灯の灯りだけが差し込む地下鉄の車内はほとんど暗闇に等しく、そこらじゅうで慌ただしく携帯電話の持ち受け画面の光が明滅しはじめた。

中には慌てつつもカメラ機能の一部であるライトを点灯させて、周囲を照らす者もいる。

千穂の妙な想像に困惑していた恵美だったが、さすがに異変事態に至っては千穂の安全を確保するように左手を千穂に絡めながら冷静なく周囲を見回した。

そこかしこで乗客が携帯電話のLEDライトを点灯させ、不思議と車内の様子は一瞬から端まで見て取れたが、それだけに全員が明らかに動揺の色を濃くしており、既に怯えてすすり泣き出す女性までいる。

「お、お客様にお知らせいたします」

すると、やや上ずったような乗務員の放浪が暗闇に響き渡った。

背後では無機機器と思しきものが騒がしく音を立てており、これが尋常の事態でないことを裏付けていた。

「この電車、只今全車両に於いて警報が、その、消灯しております。異もなく非常灯が点灯いたします。お客様におかれましては、落ち着いて行動し、乗務員の指示があるまで、決して……え？」

慌てつつもなんとか職務をこなそうとする憤慨な乗務員の声が、妙なところで途絶えた。

「な、なんだ……だ、誰か、線路に……」

「なんなのよ……」

車内放送のスイッチを切り忘れているのか、明らかに職務を離れてしまっている強り音に、惠美は顔を皺める。

「だ、誰か非常通報ボタンを押せよ！」

乗務員の妙な言葉に不安を覚えた乗客の誰かが、半ば叫ぶようにそう言う。

惠美もはっとして非常通報ボタンの位置を探す。千穂の傍から離れなければ押すことができない場所にあったため、躊躇してしまふ。

「A1あううより指令！　せ、線路に人がいます！　新堀三丁目駅側より接近……あっ」

そこで乗務員は、ようやく車内放送が繋がったままであることに気づきスイッチを切ったよ

うだ、

だがそのタイミングは、却って乗客に不安しか残さない結果となった。

何か普通ではあり得ない状況に立ち至ったのは誰しも分かっている。それならば例え意味が分からなくても、誰かに状況を教えてもらいたい。

静寂の中では、不安も相まって恐怖は加速度的に増大していくのだ。

惠美は固唾を呑んで油断なく身構えていた。

右腕でアラス・ラムス、左手で子抱を抱え、いつ何が起こってもいいように座席からかすかに腰を浮かせ、不安で眠めく乗客の顔をすり抜けてかすかな異変も見逃すまいとしている。そしてそれは、唐突に起こった。

「まよ!!」

警告は、腕の中にいたアラス・ラムスから発せられた。

十四編成の車両全体が、本来進むべき方向とは逆方向へと動き出したのだ。正常な動き方でないことは明らかで、車内に震動がよがる。

「蓮佐さん!」

「じっとしてて! 私から離れちゃだめよ! くっ!」

今度ははっきりと、衝撃だった。

逆進などという生易しい動きではない。

まるで十両編成の全車両が玉突き事故を起こしたように衝撃で車体が揺れたのだ。

「なんなの、何が起こってるの!? ……またっ!?」

先ほど急切れて以降車内騒音が再開される気配は無い。

三度電車揺れる。

「ゆ、遊佐さん、これってもしかして……」

「そ、そうね、あまり考えたくないけど……」

恵美は千穂の考えを先回りして頷いた。

電車の窓から見えるトンネルの中は、うつすらとだが通常の蛍光灯が灯っているのが見てとれて、衝撃の前後に何か音が聞こえるわけでもないの、例えばトンネルの崩落とか重大事故の発生とかそういうことではないようだ。

そして、放送が切れる間際の「人に隣われているのでは無いだろうか。」

今この電車は、線路上にいた「人」に隣われているのではないだろうか。

「遊佐さん、私は……」

そのとき千穂が決意を込めた眼差しを見せるが、恵美は言葉を遮って首を横に振った。

「ダメよ、千穂ちゃんをこんな中に残していけないわ」

明らかに尋常でない事態にできればすぐにでも車外に出て状況を確認したいところだが、車内も安全とは言いい切れない状態で千穂を残しては行けない。

とはいふ外に連れ出すのはそれこそ状況が分からない現時点では危険が伴うし、こんなときだが「みだりに車外に出すに乗務員の警備に従つてください」の車内注意書きがやたら気になつたりもする。

「で、でもこのままじゃ……んっ！」

遠慮する間にも、また電車全体が大きく揺れた。

「仕方ないわね。千穂ちゃん」

「は、はい」

「最後にホーサービタン<sup>フエーサービタン</sup>を飲んだのはいつ？」

「……」

千穂は、大きく目を見開いた。

「ちよっと大がかりなことやるわ。影響を受けやすい千穂ちゃんがまた気絶しちゃったら大変だから、できるだけしつかり整法<sup>せいぽう</sup>気<sup>き</sup>を練<sup>ね</sup>つてほしいの。できる？」

「大丈夫です。最後に飲んだの、つい最近ですから」

千穂は小さく頷いた。

「津原さんの病室に行った日に、緊急送迎<sup>きんぎょそうおう</sup>を使ったからその日のうちに……」

「後からエノに聞いたわ。凄<sup>すご</sup>い応用の仕方したらしいわね。今度ゆっくり聞かせて頂戴<sup>ごうがい</sup>」  
惠美は小さく微笑<sup>ほくそ</sup>みと、すぐに気を引きしめて顔を上げ、電車の進行方向を睨<sup>にら</sup>んだ。

千穂は恵美の言う通り、緊張で早瀬はやせのように鳴る心臓を抑えるように、大きくゆっくり深呼吸する。

自分の体の中で、暖かい力が大きくなっていくのを感じる。

すると、力がある程度まで大きくなった瞬間しげんく、その力がより大きな力に取り込まれるのを感じた。

千穂は驚くが、自分の力を包むのが恵美の聖法気であることを感覚と本能で感じ取った。

「……千穂ちゃん以外は、太丈実なはず」

恵美は少しだけ不安げにそう呟つぶやくが、もはや迷いを捨てたように顔に意識を集中させる。

「千穂ちゃん、アラス・ラムス。耳を塞いで」

「はい」

「あい！」

千穂は疑問は差し挟はさまず、アラス・ラムスと共に素直に言うことに従う。

その瞬間、

「わ！」

千穂は、体全体に走った鋭く重い衝撃に震き声を上げる。

何か大きな波のようなものが、自分の体を含めた空間を覆いながら通り抜けたような、そんな感覚だ。

「い、今のはなんだ？」

「もういやー 早くここから出して！ いつ動くのよ！」

かすかな違和感を周囲の乗客も感じ取ったようだが、誰も千穂ほどの衝撃は受けていないようだ。どちらかというとき先ほどの異常事態の一部だと解釈されているようで、周囲の混乱の度が増してきている。

「!!」

惠美一人だけが変わらぬ様子で真っ直ぐ進行方向を睨み附えていたが、

「え？」

突然怪訝そうに眉を寄せる。

「……………子供？」

「ど、どうしたんですか？」

「子供が、電車を揺らしてる」

「え？ ど、どうして…………？」

「短い距離だけど、ソナーを飛ばしたの」

惠美は平早く答えると、千穂から手を離して立ち上がる。

「車内は安全そうね。でも…………あれは、危ないわ。普通じゃない」

惠美は迷いなく座席後ろの窓に手をかけると、



「あれをどうにかすれば車内は大丈夫さうね。ちよつと行つてくるわ」

「あつ、遺体さ……」

「だ、誰か窓から外に出なぞ……」

惠美はアラス・ラムスを抱えたまま千穂や乗客の目の前で車両の窓からひらりと外のトンネルに飛び出した。

そして同乗入れずに外から今までいた車両に手を触れると、

「危ないから、出てこないでね」

と、出入り口を封印する法術で全てのドアと窓を閉鎖してしまう。

パニックが起こつて中にいる乗客同士で格闘しが起こるような混雑でなかったのも幸いした。徳義・新宿園は、やはり山手線に分がある。

「……さて、私のゾナーに気づかないわけないわよね!? あなたはどこどころから獲け」

惠美は一面挟んで前方にいる黒い影を睨み据える。

乗車するときは全く意識していなかったが、惠美達が乗った車両は十両編成の五両目だった。前にも後ろにも銀色の車体が闇に落ちたまま衝撃の影響で軋んだ音を立てている。

「あなたのせいだ、副都心線は多分終電まで動かないわ。これが動かなかったら、色々な私欲にも影響大きいのだよ。見たところ魔力は持っていないみたいだけど、帰宅ラッシュの時間にこんなことしたら、魔士が復活しても文句は言えないわよ」

惠美はかつて、鈴乃が新宿駅でやってみせた……というが、やらかした事案で真央が魔王型を車り戻したことをふと思い出して憶えてみる。

地下鉄のトンネル内である。灯りが生きているとはいへ薄暗いことには変わりない。

輪郭がはっきりしない人影が人間の子供程度の身長であることは、返ってきたゾナーの反応で分かつている。

問題は、今の惠美の周りで唐突にこんな暴挙に出る存在が思い当たらないことだ。

魔界の悪魔達はエンテ・イスラのエフサハーン皇都・蒼天臺の騒動で囂りを鎮めた。

天界の天使達は日本に馴染んでいるサリエルやガブリエルらを除き、今や地球との接触を断っている。

かと言って今更日本にいる惠美にエンテ・イスラ人間世界の権力者や敵対勢力が刺客を差し向けてくるとも考え辛い。

エメラダやアルバートが蒼天臺の騒動の後にその辺りの処理をしていないはずもなく、第一そのような危険な異世界の来訪者を、志波や天柙が見逃すとも思えない。

時間にして数秒の眠み合いの末、事案が動いたのは地下鉄特有の臭いを受む風が惠美の背後から電車の進行方向、つまり影の方に渡ったときだった。

「……」

影の隅が、弾かれたように上がったのだ。

そしてそれと同時に、恵美の腕の中でアラス・ラムスがはっとして身を持ち出した。

「アラス・ラムス？」

「……だれ？」

「え？」

「にてる……けど、ちがう。でも、おんなじ。だれ？」

「!!」

アラス・ラムスの奇妙な行動を、抑える暇も無かった。

影が、恐ろしい速さで一足飛びに距離を詰めてきたのだ。

「なっ!! アラス・ラムス！」

恵美はほとんど反射で、アラス・ラムスを聖剣化し、謎の影の攻撃に備えるが、

「な、なんなのさ」

振るわれた腕らしきものを聖剣の刃で受け止めた瞬間、恵美は驚愕の声を上げた。

最初、列車を襲った『子供』が暗い色のローブなりコートなりを羽織っているから輪郭がは

つきりしないものだと思っていた。

だが、それは大きな間違いだった。

今恵美の聖剣と「匿」らしきものを交えている相手は、影そのものだった。

地面から斜めがされたように黒い人の形をした影が、紅い双眸だけを不気味に光らせている。

「ぐっ」

その力もまた、驚異的なものだった。

列車全体をどのように揺らしていたかは分からないが、聖剣を振るう悪魔を攻撃の衝撃だけでたたらを踏ませ、後方に揺さぶっただけでも見者ではないことが分かる。

「な、なんなのこいつは！」

もう何もかもが異常なのだが、それに輪をかけて異常なのが、激突音である。

金属音なのだ。

揺らめく漆黒の炎、としか形容できない影なのに、聖剣と激突した瞬間はまるで剣戟のような甲高い音がトンネル内にこだましたのだ。

柄から掌に伝わる振動もまた、激突したものが金属質である手こたえを物語っている。

「まま！ すこくつよい」

「分かってるわ！」

聖剣であるアラス・ラムスも激突の威力に脅威を感じているようで、いつになく激しい声で警告を発する。

「全く、現実の戻ってくるのが早すぎるわよ！ もう少し非日常に浸らせてくれたっていいじゃないっ！」

冷静に聞くと普通とは何かが明らかに逆転している事実の発言に突っ込む者はここにはい

ない。

真季との休日が平日で、地下鉄のトンネル内で謎の黒い影に襲撃されるのが現実であるとは恵美自身認めたくはないが、きりとしてこの影が偶然自分が乗っている電車を襲ったと考えるほど恵美も楽人家ではなかった。

「でも、一つだけ助かることがあるわ」

恵美は聖剣の柄に意識を集中させると、不敵に笑った。

「中も外も真っ暗だから、闇に光らせなきゃいけないければ結構しつかり戦えるわね」

戦を決めて強敵と戦う際の恵美は、髪の色と瞳の色が天使のそれに変化する「変身」とも呼べる行動をとるが、今回は地下鉄の暗闇の中で光るわけにもいかないのです。ひたすら聖剣そのものの強化に努める。

「おおおおおおおっ！」

アラス・ラムスが何やら驚いているような、高揚しているような声を上げるので恵美は少しおかしくなってしまうが、あまりアラス・ラムスに過度の負担をかけるつもりはない。

謎の影法師に力負けしないようにするのはもちろんなのだが、ただ単に相手を退けるためなら周りの目など気にせずに奮身した方が簡単だ。

恵美の狙いは、全く別の所にある。

「さて、お願いだから保守点検の人達が駆けつける前に決着つけさせて……ねっ！」

今度は、惠美から仕掛ける。

惠美が影法師の顔面を目がけて放ったごく単純な大振りを、影法師は正面に両腕を交差させて受け止めた。

耳障りな金属音が響いて火花が散り、惠美の力は弱き返される。

だがそれは予想の内だ。

惠美は振り下ろした姿勢から宙返りをするようにその場で一回転し、がら空きになった胴体目がけて横薙ぎを繰り出すと、影法師は当然またその攻撃を防ごうとする。

「やっ!!」

その瞬間、顔面に当たる部分目がけて思い切り足裏で蹴りを入れる。

容赦なく脇のある場所を狙うと、相手はさすがに顔をしっぺり屈うような動作をするが、足裏を受け止められた瞬間に惠美は再び影法師の胴体を狙って渾身の突きを叩き込んだ。

「!」

「……!!」

変身寸前まで魔法質量を高めた聖剣の切っ先が一ミリも食い込まず、衝撃が剣を握る右手にはね返ってきて惠美は顔を顰めるが、影法師もまた衝撃を体のど真ん中に受けて背後によろめいた。

「はああああああっ!!」

その隙を見逃さず、惠美は竜巻のように全身を回転させ聖剣を影法師に叩き込む。

その全てが硬い金属音に響き返される手必よしかなかったが、惠美の判断の無い攻撃に怯んだか、影法師は顔面を守るように顔の前で両腕を固く閉じながら大きく背後に跳躍した。

「逃がさないわよ！　せめて正体を現しなさい!!」

惠美の右足が鋭い空気の壁を蹴り、大砲のような音をトンネルに響かせる。

惠美の体はまさしく砲弾の勢いで飛びすぎる影法師へと肉薄し、

「我が力、世間を騒がす者を成敗するため!!」

と過去最も勇ましくけない掛け声と共に、一瞬だけトンネルの中を聖法気の光で満たす。

カメラのフラッシュほどの、目をそらしていれば誰も気づかぬ瞬間の変身。

だがその一瞬で、聖剣は間違いなく敵の体に接触した。

「!?」

今度は、一切の金属音はしなかった。

だが影法師の体に刃が食い込んだわけでもない。

なんの抵抗もなく、聖剣の刃が影法師の体を通り抜けたのだ。

「え?」

アラス・ラムスも惠美と同じように、手応えの無さに違和感を覚えたようだ。

惠美は既に変身を解いた体を空中で転しながら影法師の追撃を警戒する。

だが、

「手応え、あった？」

惠美は自分の目で見たものと、体で感じたものの齟齬に首を傾げた。

影法師の左腕が、人間のそれになっていた。

まるで今の今まで表対自在の金属の衣を纏っていたかのように、ぼろぼろと黒い欠片がトンネルに舞い散り、はっきり人間の腕と分かるものが見えている。

だが相手の鎧を砕いた、という感覚が、全く惠美の手に残っていないのだ。

あれほど硬質の金属音を響かせた影法師の腕なのに、いざそれを砕いてみれば金属どころか衣擦れほどにも手こたえを感じられないとはどういうことなのだろうか。

もちろん砕いたなら砕いたでいいのだが、手加減なしに振るった剣なのに現れた人間の腕に傷一つついていないというのも奇妙だ。

本来なら効果的な攻撃手段を見つけたのだから追撃にかかるべきなのだが、目の前の現象の不気味さに惠美は遠慮してしまふ。

一方の影法師もまた起こった事態が想定外だったのか、紅い瞳で自分の左腕を凝視している。

「中々、抜けた」

「ま？」

「今、中を抜けた」



そのとき頭の中に響いたアラス・ラムスの声は、かつてなくはっきりしたものだだった。

「まあ、今、聖剣の力が中を抜けた。いっぱいの力が体の中を通り抜けて、別のものを斬った」  
「別のもの？」

「まあ、私、あいつ知ってる。これ以上、めっししないで」

「え、でも……」

「影を叩いてもあいつの方が強い。でも、中を斬ったらきっと死んじやう。お願い」

「そ、そう言われても……」

まるで急激に年齢が成長したようにアラス・ラムスがはっきりとものを嘆き、  
「してしまふ」。

しかもその内容が、相手を攻撃するなと来たものだ。

「ど、どうすればいいのよ……」

だが、相手はこっちのそんな会話などお構いなしだしそもそも聞こえていない。

「くっ……」

体勢を立て直した影法師が、人間の左胸を露出させたまま再び攻撃へと転じ、東美に襲い掛かってくる。

「まあ…… お願い…… やめて……」

「そ、そんなこと言っただって……」

アラス・ラムスの意志に反して聖剣を振るいたくはないが、影法師の攻撃の威力は本物だ。体に食らえば恵美とて大ダメージは免れない威力であり、光輝いて自立してしまふ破邪の衣を出さない限りは聖剣で攻撃を防ぐより他に無い。

「こ、このままずっとこうしてゐるわけにも……」

変わったことは確かにあって、影法師は人間の腕になった左腕で攻撃をしてこない。

影に覆われていない部分は脆弱なのか、単に聖剣と打ち合えないだけなのかは分からないが、だからと言ってアラス・ラムスに全力で拒否されている状態でそこ目がけて斬りつけることもできない。

影の損傷が体力の損失には繋がっていないようで、左腕を使わなくなったこと以外は影法師の攻撃の苛烈さは変わりなく、このあとの戦運びに恵美が焦りを募らせたときだった。

「!?」

列車がやってきた方向、つまり東新宿駅側から、強い光が接近してくる。

まさかこの状況で後続の列車が接近してきているのかと血の気の引く恵美だが、すぐに光が激しく上下していることに気づき、電車の動きではないことに気づく。

「遊佐ちゃん！」

「エミリアも!!」

トンネルに響いた声は大黒天称と、思いがけずエメラダ・エトワードアと、もう一つ。

「エミリアアッ」

「っ」

恵美はもし恵美の戦いを感知し得る身近な存在の中で来るかもしれないけれどできれば来てはしくなかつた最後の一人の声に歯噛みする。

恵美が列車内の乗客の目を気にして光を抑える戦い方をしていたことなど歯牙にもかけないかのように、一瞬強い光を放って最速で接近してきたのは、ライラであつた。

「信じられないっ」

恵美は激しい声で言葉を吐く。

「どういうつもりよ！ これまでの私の努力無駄にする気？」

「そんなこと言ってる場合じゃないの！ その子から離れて！ イエソドの矢片でその子と戦つてはダメ!! 早く離れて!!」

「はあっけ」

何をふざけたことを、と思う暇も無かつた。

「まよっ」

接近するライラ、そして後に続くエメラダと天跡に氣を取られたほんの数瞬、普通の人間なら監視していても気づけないようなわずかな間に、影法師の左腕が恵美の体近く伸びた。

「えっ……」

「瞬をさらに懐古にも刺んだわずかな時間に、その全てが起こった。

恵美と影法師の間に、ライラが割って入った。

恵美に付いた影法師の左腕がライラの肩に触れた瞬間、

「ああああああっ!!!」

ライラの建物がトンネルにこたまし、

「……………」

恵美の顔に、生暖かい液体が張りついた。

恵美が、それが何かを理解するより早く、

「やっべー！ 何してんのよあのバカ！」

「ライラ！ エミリアア！」

天称がさらに恵美とライラを庇うようにして影法師と対峙し、エメラダが空中でバランスを

崩すライラと恵美に体当たりするように攻撃する。

エメラダは細い両腕に二人を抱えると飛翔速度を上げて強引に影法師から引き離した。

「え、エメ………命………」

「考えるのは後です!!」

「ま、得って、まだ、千穂ちゃんが………」

「天称さんに任せれば大丈夫です！ 今はあなたとアラス・ラムスちゃんを少しでもあの影が

ら引き離します！」

「待って……待ってよ、千穂ちゃん……ライラ、嘘でしょ、なんなのよ、これ！」

恵美は遠さかる電車と天棒と影法師を茫然と見ながら、自分の顔に手を当てる。

「え、こ、こんなに隣の駅と近いんですか!?」

自分を抱えて乗降するエメラダが、新宿三丁目駅の灯りに気づいて驚てる声も、恵美の耳

には響かなかった。

ふと横を見ると、同じようにエメラダに抱えられているが、美しい肩を完全に絆かれて直の

気を失い気絶しているライラの、血に染まった横顔があった。

天使の体の構造がどうなっているのかエメラダには知る由もないが、とにかく早急には治療を

できる場所に移動しなければならない。

もしライラに万が一のことがあれば、また恵美の心に暗い闇が落ちる。

だが肝心の恵美の方が、完全に冷静さを失ってしまっていた。

「なんなの……なんなのよ、これは。また、またあなたの差し金なの? なんなのよ、ねえ!

どこまで私の人生の邪魔すれば気が済むのよ! どれだけ私の周りの人達に迷惑かければ気が

済むのよっ!!」

「エミリアアっ!!!!」

恵美が取り乱しはじめる気配を感じ取ったエメラダは幾度強い口調で叱責するが、恵美はそ

れすら聞いていなかった。

「答えなさいよ!!」

「エミリアー 後にしてくださいー ホーム様の下働きどりを人目につかないように飛びますー 静かにしてください!」

「ねえー 答えてよ!!」

「エミリア、お願いですから……!」

ほとんど悲鳴のように気絶したライラを責め立てる恵美を抱えてこれ以上飛ぶことはできないと判断した矢先、

「お前ら、本当いい加減にしろよ」

その低く抑えられた声は不意に、地下トンネルの生暖かい風を切り裂く恵美とエメラダの耳にしっかりと届いた。

「ぶわぶっ!!」

その瞬間、エメラダは空中で真鍮のように柔らかな何かに衝突し、空中で思い切りつんのめ

った。

「あっ……」

予想だにしなかった衝撃に、エメラダは抱えていた恵美とライラも慣性のままに放り出してしまい、呆氣にとられる。

だが、エメラダ本人も、恵美もライラも、そのまま新宿三丁目駅の線路に叩きつけられるようなことにはならなかった。

「……ええと……？」

エメラダは気の抜けたような声を上げた。

水のように、綿のように、雲のように、三人に働く慣性を柔らかく受け止めたものの正体を見て、呆けてしまったのだろうか。

エメラダはふかふかのベッドにでも投げ出されたような気の抜けた格好で、ホームドアの上に残かけていた声の主を見た。

「随分ご機嫌な夜を過ごしてんなあ、お前ら」

「は……」

ホームドアの固い壁に、足をぶらぶらさせながら革靴の踵を寄立たしげに何度も当てる。

「今何時が分かるかエメラダ・エトウーヴァ。午後の七時半だ」

「は、はい……」

「日本の生活に馴染みの無いお前に説明すると、午後七時半つつつたら世間じやそろそろ晩飯を食おうって考える時間だ。つまりディナータイムのピークが始まる。ここまではいいな？」

「は、はあ……」

彼は怒っている。エメラダも、それは分かる。

だが、彼の口からこぼれる怒りの性質がどうにもおかしい気がしてエメラダはどう身構えるべきか、なかなか判断できない。

「ディナータイムのピークってことはな、お客さんが沢山店に来るんだ。お客さんが来るってことは、つまり店が滅茶苦茶忙しいってことだ。分かるか？」

「は、はい……分かります」

「なのに、俺は今ここにいる。どういうことが、分かるな？」

「えっと……それは……その……」

判断できないが、何かヤバイ。この状況が、とんでもない急角度で彼の説明に融れているという事だけは、エメラダも理解できた。

「それをなんだお前は!! 昔校俺にあんなに偉そうな高圧態をくせして、ちーちゃん一人もろくすっぽ守れねえとはどういうことだ、ああん!!」

エメラダは、ビクリと身を縮こまらせた。

顔に青筋を浮かべ、完全にブチ切れた様子で、ふよふよと浮かぶエメラダの前に飛び降りて



説教をかましはじめる男こそ、赤いユニフォームとバイザー、黒のチノパンに使い古した革靴を履いた悪魔の王、魔王サタンこと真奥貞夫だった。

「お前らの魔法気は、法術は飾りか？ それとも自分は地球人よりスゲー力持ってるから、地球のトラブルなんか屁でもねえとか余裕がマしてんじやねえのか？ おお？」

「返す言葉もうありません……」

完全に無音となった新宿三丁目駅構内に響くのは、ただただ真奥の怒声のみ。

十九時過ぎの新宿三丁目駅構内がこんなに静かなはずがない。

ホームドア越しに、石像になってしまったかのような大勢の人々の凝固した姿が見える。

真奥が、魔力結界を張り巡らせているに違いないかった。

エメラダは憤懣として、真奥の怒りを甘んじて受け止める。

視界の端で、東美とライラもエメラダと同じように暴音の構内でふわふわと浮かんでいるのが見て取れた。

「まったく、ちーちゃんの方がよっぽど肝も挫わってるし、リスタ管理の心算えもすっかりしてるってもんだぜ。東美があんなパワー出すような戦闘がすぐ傍で起こってる状態で冷静に観念運を飛ばしてくるなんざ、なかなかできることじやねえ」

「仰る通りです……私達はエミリアの異常な力を感知して駆けつけたのですから……」

「東美がどんなトラブルに巻き込まれてるかも分からねえのに、鈴乃や唐屋になんの伝言もせ

ずにノルドの傍から離れたのか、あのバカは」

「つーー」

エメラダはまたもはっとして、肩を落とす。

全く真奥の言う通りだった。

千穂の連絡をやきもきしながら待っていたエメラダは、突如発生した大きな聖法気反応がすぐに恵美のものだと気づき、矢も楯もたまらず飛び出した。

途中で同じく聖法気を感じたらしい天祥とライラに合流したのだが、そのときノルドがどうしているかなど、気にも留めなかった。

頭の中には、アバートの方に何かあっても忠誠が対応してくれる、という考えもあったかもしれない。

「それは甘えた」

真奥はエメラダの心を見透かしたように断じる。

「ちーちゃんは何と鈴乃の親密に概念送受を飛ばしてきたから、ノルドの守りには鈴乃と真壁と漆黒がついてるはずだ。ったくよ」

真奥は腹立たしげに鼻を鳴らすと、ようやくエメラダから目を離して背後に浮かぶ恵美とライラを睨む。

「いい加減に、してよ……なんなのよ。どうして……」

「おい恵美」

「答えてよ……答えないよ」

「恵美」

「ライラ、あなたは……」

「……」

空中に放り出され、魔力結界に包まれているという状況に驚いても尚、ライラに対する恨み言を吐き続ける恵美を落着くのを待つほど、真奥は優しくはない。

「どけ、バカ」

「!?」

真奥の魔力で真横に水平移動させられて、初めて真奥の存在に気づいたらしい恵美は寂に濡れた目を奥界まで開いて真奥を見るが、真奥は一切取り合わずに肩を叩かれて気絶しているライラの傍らに立った。

「何にやられりや大天使がこんなことになるんだ、つたく」

呆れたように傷の様子を確認した真奥は、恵美ではなくエメラダに声をかける。

「おい、今ここで治せるか？」

「い、いえうすぐには無理です。魔力結界の中ですし、状態をきちんと検診しないと……」

「分かった。じゃあ俺がやる」

「へ……と」

もともと「言うエメラダの声を早々にぶった切ると、真奥はもう視線をライラに戻していた。」  
「言っておくが、悪魔以外に治療の魔術使ったことなんぞ数えるほどしかねよのに、まして天使になんか初めてのことだからな。多少粗暴なのは勘弁しろよ」

骨が砕け、皮膚からとめどなく血が流れる状態を放置すれば、天使といえど命に係わる。

むしろ普通の人間など比べるのも馬鹿馬鹿しいほど頑丈な天使をここまで痛めつける力を受けて、命があっただけ幸運かもしれない。

「ひでえな、こりや」

手から揃々しい魔力の光を放射しはじめるや否や、真奥は顔を撃めた。

「砕かれてんのかと思ったが、それどころじゃねえ。熱した万物で滅多切りにされたようにしか見えねえ。一体何とやり合ってこんなことになったんだよ」

真奥は目だけで車美を振り返るが、車美は呆然と視線を宙に彷徨わせるばかりだ。

「う……む」

魔力の放射で傷の修復が促進されているのか、それとも痛みによるものか、気絶したままのライラがうめき声を上げる。

「よくショック死しなかったってレベルの傷だ。治すのにもそれなりに痛みは伴う。できれば気絶したままでもいいよ」

「真実さん……」

「おー、無事だったかちーちゃん。良かった」

そのとき、トンネルの中から天柝には付き添われた千穂が不安げな顔で歩いてきた。

「わ、私は電車の中にいただけで……そ、それより遠佐さんは……」

「そこでボケてる」

真実はいライラの治療をしながらも、結界の中で物理的にも精神的にもふわふわしてしまっている恵美に頭をしゃくった。

「何があったんだよ、本当に」

真実は千穂に尋ねるといふよりも、千穂に付き添う天柝の様子を見てはとんど駄目言のようだった。

「千穂かった、逃がしちゃったよ」

天柝は苦笑してみせるが、彼女もライラほどではないにしても、明らかに傷ついている。

長い黒髪の前めちちが高熱にさらされたように縮こまり、黒の長袖シャツが無残に千切れて覗く肌が痣のように変色している。

「マジかよ」

真実は正直に驚愕の声を上げた。

天柝は、今となっては疑うべくもないが、アラス・ラムスやアシエスの承諾に連なるセフィ

ラの力を持つ女性だ。

老いたとはいえ悪魔大商売のミイオを一掃りに叩き伏せ、真魔の魔王様の魔力も平気で受け流し、オブリエルを戦わずして潰滅させた天祿を手負いにするほどの相手だったのか。

真魔はライラの傷を見て、何が起こったのかを想像して瞠目する。

「これで昔の傷りは返したからな。もうこれ以上、仕事の邪魔すんなよ」

真魔はさらに魔力を集中させて、ライラの肩の傷をハイスピードで癒していく。

「ライラさん、怪我してるんですか？」

「はい……魔王が、治してくれています」

千穂の問いに頷きながらも、エメラダは真魔から目が離せなかった。

今更真魔のことを血も涙も無い悪魔だとはエメラダも思っていない。だがそれでも、悪魔が魔力で誰かを癒す、という光景が、エメラダには信じられなかった。

悪魔の魔力は、力の弱い人間ならその氣に当てられただけで体に異常を来す有害なものだ。その先人親があつたからなのか知らないが、魔術で起こる奇跡の全ては悪魔以外には有害なものばかりなのだと思っていた。

そこまで考えたエメラダは、悪魔に「治療」の觀念があつたことにすら、驚いている自分がいることに気がついた。

如何に自分が、人間が「敵」のことを何も知らずにいたのか、まさきと実感した。

もちろん、真奥本人が言っていたように、魔術で治療できる相手や症状は著しく制限されるだろう。魔力が人間に有害である事実が覆われないわけで、寧ろく天使であるライラだからできる治療もあるのだろうか。

エメラダは、ふと自分の傍で心配そうに真奥の様子を見る千穂に目を向ける。

千穂は今、魔力精界の中で、高度な治療魔術を用いる真奥を誰の保護も受けずに見ている。

彼女が、魔力に対して一定の耐性を持っている証だ。

漆黒の病室の中でも、ノルドは真奥の魔力に当てられて気分を悪くしていたのに、千穂は全く反応を見せなかった。

「彼女は……こんなに強くなったのに……」

自分はどうだ、真奥の言う通り、地球人とは比べるべくもない圧倒的な力を持っているながら、友達一人を守ることすら覚束ない。

「私達は……こんなに弱かったんでしょか……」

「んなことはないよ、あんま自分を責めても始まらないからその辺にしときな」

そんなエメラダの悔悟に手を差し伸べたのは、千穂と同じように真奥とライラの様子を見守る天使だった。

「あんた達はできることが大がかりだから、その分失敗したときの面倒も大きいってだけだよ。千穂ちゃんはある程度の遠の遠感にならないようにこの場にいらればそれでいいけど、あんた達

はそうじゃない。大きな力を持つてゐるから、自然と面倒事に巻き込まれたときには大きく力を發揮しなきゃならなくなる」

「天神さん……」

「失敗にどじるくらいなら、最初から力を捨てて、目も耳も塞いで孤獨に生きるしかない。でも、あんた達はそんなことできやしないだろう？　なら」

と、天神は千穂と真奥に目をやった。

「あとはこの子達みたいに通ふだけさ。その瞬間、やるかやらないかをね」

「やるか、やらないか」

「私は基本面倒くさがりやだからね。大きな力持つてゐるからって世の中全部の揉め事を解決するつもりも、する義務も無い。ただ『あんときやっときや真かった』って後悔もしたくないからなんとか行動してる……ま」

その瞬間、奇妙なことが起こった。

「行動したからって必ずいい結果が出てゆーと、それもまた違うんだけどね」

真奥の魔力の放射が鎮まり、どうやら治療が完了したようだ。

ライラ自身はまだ目覚めた様子は無いが、呼吸は落ち着き、胸の傷も目をこらしても判別できないほどに消え去った。

だが、傷が癒えたことよりもはつきりと、ライラの体には見過ごすことのできない大きな変



化が現れたのだ。

「ま、真奥さん、これって……」

「まー、あいつがあのーなったんなら、こいつだってあのーなったんだろ」

真奥は目の前の現象に大きな反応を示さないが、千穂には劇的な変化だった。

「これがサリエルさんとかが言ってた『堕天』ですか？」

「さあなあ。堕天がそもそもどういふ現象なのか俺は知らないし、そんな大層なものじゃねえとは思うが」

真奥は首を横に振る。

「頼むからちーちゃん、ここで俺が治療しなけりや危なかったかもしれねえってことだけは証言してくれな。なんだか後々、このせいで各方面から責められてそれとない予感があるんだ」

真奥と千穂は奇妙な顔で空中に横たわるライラを見下ろす。

長く美しい蒼銀色の髪が、紫色に変色したライラを。



魔王メンドーオウスを倒る



「な、何が起こつたんだ？ 一体これは……？」

ノルドの動揺は激しいものだった。

天祢に付き添われてライラが、エメラダに付き添われて恵美がタクシーでヴィラ・ローズ館に戻ってきたときには、二人とも憔悴しきつており、ライラは髪の色まで変わってしまっている有様だ。

「エメラダ、大丈夫か？」

「……」

恵美の目は、ノルドの呼びかけにも答えないほどに虚ろだった。

「これは……どういうことですか？」

ノルドは天祢とエメラダと千穂に尋ねる。千穂は何から話したものが迷ったが、それよりも先に、ライラに肩を貸す天祢が後ろから答えた。

「話すと長くなるし、外でするような話でもない」

天祢はすぐには応えずに、目で一〇一号室を開けるよう促した。

「蓮佐ちゃんには私が付き添うから、あんたはほら、教文に肩かしてやんな」

「は、はあ……ライラも、一体何が……」

ノルドはライラの髪色が変わっていることはそれほど気にならないようで、恵美を見送るとごく自然にライラの身を受け止めた。

エメラダはそれを見ながら、ノルドはこの瞬間に期せずして一つ修羅場を回避したことに気づく。

たまたまタタシーから降りてきたのがライラより恵美が先だったのでノルドもごく自然に恵美に声をかけたのだが、もしライラを優先しようものなら恵美がどんな反応を見せたか分からないものではない。

何せ恵美は、ガイラ・ローザ營隊に到着するまで目の焦点も合わず、口の中で延々とライラに問いかけていたのだ。

何故だ。何故私の人生を不幸にしようとするんだ。何故私の周りの人達を傷つけるのか。なんの権利があつて。

「エメラダ殿、魔王は」

ガイラ・ローザ營隊でノルドの身辺を警戒するために待機していた鈴乃が聞くと、エメラダは少し困惑しながら營隊の衝を振り返った。

「その……お話をそのままにしていたから……って」

「そうか。仕事に戻ったのだな」

「は、はい」

エメラダにしてみればとんでもないトラブルの後に、状況の整理もせずにそのまま戦場に戻るのかと驚愕したのだが、どうも鈴乃にとっては真実のその行動は驚くべき事案ではないら

しい。

鈴乃は鈴乃で、エメラダのそんな反応に気づいてこともなげに言う。

「デリバリー業務の開始が閉店に迫っていると書いていたからな。本館店長も不在がちだというし、魔王はあの店の時間責任者だから戦場に居るのは当然の選択だ」

「そうなんですか？」

「そうだ。アルシエルやルシフェルにも聞いてみるといい。きっと私と同じ反応だ。千穂殿も、別に疑問を差し挟まなかっただろう？　ここまで送るのは、天幕殿一人いれば安心だからな」

「た、確かにー」

まるで現場にいたかのように状況を言い当てる鈴乃にエメラダは目を丸くした。

「密に近所付き合いをしていると、それくらいは分かるようになる」

「はあ……」

「とにかく、まずはエメラダ殿も体を休めて、それから何があったか聞かせてくれ。この場所にながらにしてエミリアの力を磨くことができることができたくらいだ。とんでもない戦いだっただろう？」

「私も最初から現場にいたわけじゃありませんし、あれを戦いと言って良いものか」

エメラダは腫しい顔で腕を組んだ。

「それに、肝心のエミリアが……」

「……ああ」

丁度一〇一号室に招き入れられようとしている恵美の背を見て、鈴乃は頷いた。

「何か、とても辛いことがあったようだな」

「タキシードの中でずっとタイタに対して恨み言を呟いていました」

「真くない傾向だな」

鈴乃は恵美が三日も家に帰らなかった話を知らない。

それでも恵美がこの数日をタイタのことを考えないように過ごしていたであろうことは分るので、鈴乃なりにその意志を尊重しようとした。

だがその結果は、あまり芳しくなかったようだ。

一〇一号室の扉が開いた瞬間、恵美はハッとして顔を上げると背後にいたノルドと千穂を弾き飛ばさんばかりの勢いで放すだった。

「エミリア君」

「遊佐さん？」

「私、入らない」

「え？」

「その女と、一緒の前座になんかいられないわ」

「遊佐ちゃん、このアパートには魔王はいるけど殺人鬼はいないよ」

天幕が因縁しながらもそう蒸化すと、惠美は憔悴した目を少し上によげた。

「私は上で待たせてもらうわ」

「上？」

「魔王の部屋よ」

惠美はヒスヒスツツクに叫ぶと、傍らにいた千穂の手を掴んで引きずるように引っ張っていく。「タイトの話なんか聞きたくもない」何が起こったかなんて私には関係ないわー私はいつも、二階の部屋で、アラス・ラムスと一緒に魔王や千穂ちゃんが帰ってくるのを待ってたのよ!! 今日こそうませてもらうわー そっちはそっちで勝手にやって!!」

「ゆ、道位さん、わ、わ、わ」

千穂は惠美の力につんのめりそうになりながら、二階へと引っ立てられる。

「アルシエルー ルシフェルー お邪魔するわよ!!」

「居座るのは構わんが、因々しくも夕食を食べていくつもりなら、さやえんどうの下ごしらえを手伝え。あ、彼々木さんはお疲れでしょうし、ゆっくうなさってくださいね」

「邪魔するなら少しは申し訳なさそうに入ってくださいよな」

惠美が共用階段の扉を引きもぎらんばかりの勢いで開けて中に飛び込むと、中から声屋と漆黒の惠美の顔入なと慣れつこになった反応が聞こえ、やがて戸板がへし折れるのではないかとと思うほどの大音響で二〇一号室の扉が開けられた。



「……………」

ノルドは娘の行動に呆氣にとられ、

「こりやあ相当嫌われてるね。困ったもんだ。」

天柙は全然困ってなさそうに肩を揉め、

「エミリアー……………」

エメラダは捨てられた子犬のようにしょんぼりと肩を落とし、

「エメラダ殿、すまないが、私の部屋で待っていてくれないか。今日のことを現場で見聞きたエメラダ殿が行けば、エミリアを余計に刺激してしまうかもしれない」

「……………はい。そうですわね」

悄然とするエメラダを慰めるように鈴乃はその肩をなでる。

「エミリアは、エメラダ殿を信頼していないわけではないのだ」

「分かっていますよ。ただどうしようもないんですよね。どうしたって私とエンテ・イスタは切り離せませんし、娘女の『勇者』の部分を刺激してしまいますし」

エメラダは少し悲しげに、それでも湿っぽくない瞳でヴィラ・ローザ城の共用階段を見上げらる。

「今の彼女が、『逆佐理美』なんですわね。『逆佐理美』のことはもう日本の皆さんと一緒に解決するべきです。私は、彼女がどんな選択をしても、それを支持しますから」

「思いがけず、日本は居心地がいいからな。折角だからエメラダ殿も長逗留を検討してみてはどうだ」

「私の職責はそれを許しませんし、私はどんなに日本が便利で食べ物美味しくてもうセント・アイレが落ち着きます」

「そうか」

エメラダの答に微笑んで頷いた鈴乃は、その手にシリンダー錠の鍵を握らせる。

「少しの間近くに出かけてくるから留守を頼む。もし喉が乾いていたら、勝手に冷蔵庫を開けてくれ」

「……早く帰ってきてくださいね」

エメラダは鍵を受け取って頷くと、そう言った。

「人のおうちの食料庫は、いいと言われても開け辛いですから」

「心得た」

鈴乃は軽くエメラダを抱きしめてその背を撫しむようにばんばんと叩く。

「天祥殿、すまないが」

「はいはい。用心棒でしょ、任しとき。まーここなら上に西屋君と藤原君いるし、エメラダちゃんもいるから誰かが来てもすぐに大変なことにはならんでしょ」

天祥が気の無い声で謝り負うと、鈴乃は一つ頷いてエメラダから離れ、アパートの敷地を出

る。

携帯電話を見ると、時間は二十時少し前。

「たまには夕食にジャンクフードもよかろう」

そう呟いて、雑居の街に踏み出したのだった。

「ん？」

マダロナルド嚙々谷駅前店の自動ドアが開いた瞬間、鈴乃は視界の端に知った顔を二つ見つけてそちらに顔を向けた。

すると向こうもこちらに気づいたようで、小さく手を振ってくる。

「製香殿」

「や」

鈴木製香はソファ座に腰掛けたままそう言った。

「と、アシエス？」

そして、製香の向かいで増く積まれた包み紙の山を前に満足そうな顔をしているのは、アシエス・アーラだった。

見た目は中学生くらいの少女だがその実アラス・ラムスの妹であり、イエソドの欠片のもう

一人の化身でもあるアシエスが何故、製香と二人でマダロナルド饅頭店にいたのだろうか。

「あ、スズノ。私もうお腹いっぱいだよ」

「そうだろうな。アシエス、まさかとは思うがこれだけの量の注文、製香殿に金を出させたのではあるまいな」

日頃ファーストフードを喰わない鈴乃の自にも異様な量のバーガーの包み紙に加え、空の紙コップが四つも置かれている。

アシエスがこれだけの注文をするだけの金を持っているとも思えず、まさか知り合いであるのいいことに製香に金を出させたのかと危惧したが、

「なんかね」

製香は謝念をにじませた苦笑を浮かべてひらひらと小さな紙切れを取り出す。

「志保さんって人に領収書を渡せば、お金は返ってくるらしいよ」

鈴乃は顔に手を当てて天を仰いだ。

「魔王が勤務中でなければ、またお仕置きの手帳を食らうところだよ」

「ホー、マオウって私にだけすぐボーリョク振るうんだモン、ヤシナツチヤウよネ」

「そういう話をしているのではなくてだな。最初から他人の金を当てにするような生き方はみづともないということだ。ルシフェルでもあるまいに」



「こんなところで贈玉に上げられる清原さんも気の毒だね」

真奥達の事情を既にきちんと把握している梨香は、清原の本当の名も把握している。

「まーいいよ鈴乃ちゃん。志保さんっておたくのアパートの大家さんでしょ？ 真実や真奥さんとツルんでる以上無関係じゃいられないだろうから、いつかお会いしたときに譲んで払い戻しをお願いするよ」

「……でもない梨香殿。後で私から志保殿に苦言を呈しておく」

別に鈴乃が謝るようなことでもないのだが、志保には時々妙に考え方が甘い部分がある。

よく言えば寛大だが、金銭的なことに關して実は杜撰なのではないかと鈴乃は思いはじめている。

「それで、二人とも何故この店に？」

「多分鈴乃ちゃんと同じ理由だよ」

そう言うとき、梨香は携帯電話のニュースサイトの画面を見せてきた。

そこには速報で、東京メトロ副都心線で起こった謎の事故について報じられていた。

「副都心線沿いに、ドコダその職場の後輩が住んでるんだよね」

梨香は複雑そうな顔で携帯電話をしようと、かいつまんで真実が難関が谷駅近くに住んでいる清水真平の家に宿泊した事情を語る。

「真平ちゃんていうんだけど、彼女、真実と半分酔っ払ってる感じなのね。それで丁度真実が帰

ったタイムリンドで心配だ心配だって言うから、どうせ何も無い、考えすぎだといひなうて思ひながら来てみたのよ。エンテ・イスラ終みのトラブルなら真実さんも動いてるかなうて思つて何もなきやカロリ―高めの晩ご飯食べに来たと思えばいいやつて……でも通すがら悪寒に連絡しても、電話もメールも繋がるらないしき」

先ほど見たあの様子では、とてもではないが携帯電話の着信に気を配る余裕はありほしまい。携帯電話の音が、どんとん小さくなる。

「したらまあよくできたことに、お店の前で真実さんとアシエスちゃんにばつたりよ」

「私は別に意識して来たワタじゃないけどさ」

アシエス是不機嫌そうに顔を動かさせる。

「マオウが膝谷より遠いとこ行つたせいデ、勝手に融合状態になつちやつてサ。そんでまーチカチツンとこでマオウの怒ること怒るコト。さすがの私もちやかすにちやかぜなくデ」

今の発言で、アシエスの口頭の無神経極まる発言は計算によるものである可能性が出てきたが、今はそんなことはどうでもいい。

「ということば、アシエスは断言で何が起こつたか見たのだなと」

「途中からさ。げもっブ」

年頃の女の子にあるまじきお下品なおげつぷをなさつたイェソドの欠片の化身は、腹をさすりながら頷いた。

「アマホとサホはもう焼つた？」

「つい今しがたな」

「エミとエメも一確？」

アシエスの間に製香も身を乗り出して鈴乃を見上げる。

「ああ、皆ヴィラ・ローザ管絃に焼つてはきたが……」

あの状況は簡単に説明できないが、

「エミリアは、これまで以上にライラに対して強い拒否感を示すようになってしまった。エ

メラダ殿すら、受けつけないかもしれない有様だ」

「あの子、また酷い目に遭つたの？」

製香の顔が痛ましげに歪む。

「私もまだ、詳しいことは分からないんだ。エミリアもエメラダ殿もショックと疲労が酷そう

に見えたし、天孫殿にはライラの様子を見つつ周囲を警戒してもらわねばならんから、時間が

あれば魔土に話を聞こうと思つてきたのだが……」

そこまで言つて、鈴乃は店内を見回す。

「見当たらぬいな。裏か上にいるのか？」

「さつきアシエスちゃんのオーダーこなしてから、あの美人店長さんに連れられてどっか行つ

ちやつたよ」



「エミリアを助けに行ったことを、本時店長に叱責されているのでないか。では、何も頼まずに席を占領するわけにもいかな。すまないが、相席を頼めるか」

「え、でことはおわかりいいノヤ」

「アシエスちゃん、会話になってないよ。でか、さっきもういらないとか言ってたじゃん」

呆れる梨香の傍らに金魚柄のトートバッグを預けて、財布だけ持って大柄な男性店員が立つカウンターに向かう。

「いらっしやいませ、ご注文お決まりでしたらどうぞー」

「ん……と」

鈴乃はカウンターに置かれたメニューをさつと眺めて、たどたどしく指を差していく。

「この、満月バーガーのセットを、ええと……ポテトと飲み物を同サイズで……」

「お飲物をこちらの中からお選びください。赤いマークがついているものは、百円増しとなっております」

鈴乃が注文に慣れていないのを察したか、男性店員は飲み物が表示されている部分を丁寧に手で指し示して、ゆっくり解説してくれる。

「ええと、ホットコーヒーで」

「ミルクとお砂糖はどうされますか？」

「砂糖はいらない。ミルクだけ頼む」

「かしこまりました。それではご注文の内容を確認させていただきます」

注文を終えた鈴乃は、顔にうっすら汗を掻いていることに気づいた。

考えてみれば一人だけでマダロナルドに来て注文するのは初めてのことだ。

大抵恋愛が一緒だったし、そうでなくてもカウスターの中には真実が千載がいて、おおよそ気後れすることもない。

店長の木崎とも顔見知り程度にはなったという自覚はあるが、いざこうして見知らぬ店員相手に注文をする、まるでマダロナルドに慣れていない自分に気づく。

満月バーガーを選んだのは、フェア商品らしく一番上に表示されていたのと、メニューが漢字で書かれていたからで、特別それを食べたいと願ったわけでもない。

「まだまだ、修行が足らん……」

客の立場でこれなのだ。おおよそスタッフ側としてこれらの商品を扱うことなどできないだろう。

千円札を出しながらため息をつく鈴乃だったが、お釣りを手渡される段階でふと、店員が自分の顔を真っ直ぐ見ているのに気づく。

「何か？」

「あ、いえ。お客様はまーくん、あ、真実君の知り合いですよね」

「確かにそうだが、何故それ？」

突然、素性を言い出されて鈴乃は驚く。

目の前の男性店員の顔を思わず見返すが、残念ながら鈴乃の記憶に残っている顔ではない。

「あ、いや、何故っていうか」

大柄な男性店員は、困ったように頭を掻いた。

「いつも真島君や、店に入る前の道佐さんと一緒にいらつしやってたなっと思って思っただけです。あと、その、お祭りの季節でもないのに制服で来る若い人って正直目立つので……すいませんいきなり」

「いや、構わないが……そうか、やはり洋服も考えるべきか……」

恵美の誕生パーティーには洋服を強引に着せられたものの、結局慣れたものを着る癖が抜けずに、あのときの洋服一式は仕舞い込まれてしまっている。

反社会的に店員の胸元を見ると、ネームプレートには平仮名で「かわた」と書いてある。

「真島君、今仕事のことです少しの間だけ裏に引っ込んでるんです。少ししたら出てくると思っんで、来たからお席に伺うように声をかけておきます。清月パーカーとホットコーヒーのセット、お待たせいたしました」

「そうか、かたじけない」

驚きから立ち直った鈴乃は、礼を述べてトレーを受け取る。

「ううむ……」

と言つたものの、なんだか氣になつてしまつて鈴乃はしきりに自分の足元を見ながら奥香達の待つテーブルに戻つた。

「何、どしたの？」

「ああいや、やはり制服は目立つのかと思つてな」

「そりや目立つわよ。私達はもう鈴乃ちゃんつていゝばその格好だから慣れちやつたけど」

奥香は苦笑する。

「そ、そうか、ううむ。冬服なら、厚手で寒いものもあるが、少しは真面目に洋服を……と」

鈴乃は服装のことで没入しそつになつた思考から危ういところで脱出すると、

「私の服のことはいい。それよりエミリアだ。アシエス、一体何があつたか……オイ」

新堀の地下で起こつた出来事の仔細を聞き出そうとしてアシエスを見たまま、顔を強張らせ

た。

「あー、鈴乃ちゃんが注文に立つたの見てから複雑化したらもうその状態だった」

「……んぐぐぐゴゴ」

他人の金で腹いっぱい食べたアシエスは、マダロナルドの一人がけシートにだらしなく身を倒けたままいびきをかいて食後のシユスタを決め込んでいたのだ。

「な……んなんだこの緊張感の趣きはっ」

奥香やエメラダがあればと憧憬し、天幕まで負傷したほどの大事件が起こつたにも関わら

ず、真実と融合状態とはいえ現場を見たはずのアシエスがこの有様である。

元々あまり深く物事を考える性格ではないことを差っ引いても、これはあまりに酷い。

「アシエス！ 起きろ！ 店内での睡眠は禁止行為だ！」

「むにや……」

鈴乃は肩を揺らして揺さぶるが、アシエスは目を開かない。

「んぐ……あむ……うう……マダ、食べられる日……」

「そんなこと聞いてない！」

「これ見ると、実は大した事は起こっていないんじゃないかなーと思っちゃうよね。なんかこう、心配してたのが馬鹿らしくなるというか」

「騙されるな業者殿！ これはアシエスの性格のせいで、実態はそれなりに深刻なはずだ！ おいアシエス！」

「うブ……んぐぐぐダ……」

「真実さん戻ってくるまで、諦めた方がいいんじゃない？」

「アラス・ラムスはあれほど肉親思いだというのに、一体どこでこんな素がつくんだ！」

「環境の違いとか、戦とか？ 今は天使みたいなアラス・ラムスちゃんも、大きくなるとこんな感じになるとか？」

「そんなことがあつてたまるか！ おいアシエス！」

周りの目もあるのであまり大きな声は出せないが、それでも鈴乃はアシエスを眼りの縁から引きずり出そうと必死に呼びかけた。

真真がスタッフルームから戻ってきたのは、丁度そんなタイミングだった。

「あーびびった。怒られるのかと思った」

ライラを治療して天幕連に身柄を預けると、すぐさま店に取って返した真真。

彼を待っていたのは店の前の繁華と、店内の木崎だった。

木崎は今日は事業所に詰めているはずで店に来ないと思っていただけに、目を合わせた途端真真は身を震ませたものだ。

幸いにして木崎は真真が店を留守にしていたことについては一切触れず、明日の仕事の段取りについての確認を取られただけだった。

「貸しだよ。あんな忙しい時間にいきなり店を三十分開けるとか言い出すんだもん。何かと暴つたよ」

川田は幾更にも不機嫌顔を作ってみせる。

「悪いカワっち。ちゃんと理め合わせはするよ。木崎さんになんて言ったんだ？」

「まーくん三十分で戻るって言ったろ。木崎さんが来たの、まーくんが戻る五十分前くらいだっ

たから、本場に三十分で戻るって信じて、お客さんに忘れ物を届けに走っていったって言っただけ。生きた心地しなかったよ。今度理由も聞かせてもらおうからね」

「助かった。すまない」

真美は川田に手を合わせて、深々と頭を下げる。

「で、なんの話だったの？ わざわざ明日の仕事の確認とか、随分改まった話だけど」

「ああ、いよいよ明日デリバリー用のスターターが運び込まれるんだと。でも本崎さんが引き渡し時間に店に来られるかどうか際どいらしくて、万一のための申し送り」

「ああ、そういうこと。いよいよかし。緊張するね」

二階のマッドカフェ業開始からたった二ヶ月と少しで導入される新業態マッドロナルドデリバリー。

導入が決定してからの期間は、真美にとっては身の回りが急激に変化する濃密すぎるスケジュールをこなしてきたため、短いようでかなり長い時間がかかった、という認識がある。

その中でもやはり特筆すべきはイエゾドの矢片の化身アシエスと勇者の父ノルドの出現。それにエンテ・イスラへの親任、極めつけが東美のマッドタラー採用とライラの出現である。

魔王である自分の身の回りでこれだけのことが起これば、それだけで世界変革が成立するんじゃないかと思われるくらい濃密なスケジュールをこなしてきたわけだが、それで真美自身何が変わったわけでもない。

アシエスと融合したことでセフィラの秘密に迫る力を手に入れ、その上魔力を取り戻したところまで目標もやり方も変えるつもりは無いし、恵美が以前にも増して身近にいるのも、元々向こうがこっちにいい感情を抱いてはいないのだから適当にいなせば済む話だ。

魔界も、エンテ・イスラも情勢が安定し、天界が地球とのアタセスを遮断した今、真央が手を煩わせなければならぬ事象など起こりようが無い状況のはずだ。

それでも今日のようなことが起こるのは、身内にトラブルメーカーが潜んでいるか、そうでなければ見逃しているリスクがある、ということだ。

ただ見逃しているといっても恵美絡みのこととなれば、真央にはそれほど関係が無いとも考えられる。

なればこそ今の真央には、積極的に隠れたリスクを暴き出そうという気持ちは無い。そんなことをしても時間の無駄だし、真央にはなんの利益も無い。

今の真央にとって大事なものは、迫りくる新魔界始動を信頼できる仲間達とつつがなく迎えることなのである。

「あ、そういえばまーくん」

「ん？ ……なんだよ、その日は」

呼びかけてきた翔田が妙に凝った目をしていて、真央は鼻白む。

「友達来てるよ」



「友達？」

「いつも遠佐さんやちーちゃんと一緒にお客で来てた、和服美人。三十一番卓」

真美が三十一番卓に目をやると、ソファ席の聖香と向かい合って座る鈴乃の後ろ頭と、その隣で何やら不自然な格好で座っているアシエスの姿が見えた。

「ああ、鈴乃か。なんだよ。あいつも鈴木聖香よろしく事情聴取じゃねえだろうな」

恐ろしくグイラ・ローザ無様に、聖美達が到着したのだ。そして鈴乃は真美に様子聞きに来たのだらう。

「なんなの。本当なんなのまーくん、ちーちゃんという子がいながらなんなのまーくん。あの外人ばい子とか、○しっばい人とかもうなんなの」

「いや、なんなのって、なんでもねえよ。鈴乃はただのお隣さんで、アシエスは言うなれば親戚みたいなもんだし、あの○しっばいどっちかつーと聖美やちーちゃんの友達だ、っていうかちーちゃんを引き合いに出すなって細むから。まだなんでもねえんだって言ってるんだろ」

「まだ。まだね。冗談も大概にしてほしいよ全く。男が一人暮らししてるボロアパートに和服美人のお隣さんとか都市伝説もいいとこだろ」

「カワつちお前人人家をボロアパートとか言うなよ。それに俺一人暮らしじゃねえし。前も話したろ、男友達と三人でルームシェアしてるって」

「ルームシェアの相手が男だということも、僕は最近疑っている」

「勘弁してくれよ」

どこまで本気なのか分からない川田だが、ふと真面目な顔になって、三十一番卓に座る鈴乃の方を見た。

「あの人、何だか妙に悪い感じがしたよ。わざわざまーくん訪ねて一人で来るの珍しいし、まさかちーちゃんや遊佐さんに何か良くないことがあったとかじゃないよね？」

「……」

今度こそ真樹は、実は川田がエンテ・イスラの事情を全て把握しているのではないかという錯覚に襲われた。

鈴乃の要件は間違はなく、恵美と千穂が遭遇したトラブルに関するのだが、梨香のように予め事態を運の不幸を察知していなければ手見できないものでもないだろう。

真樹が木崎に呼ばれて席をはずしていたのはほんの十分程度。川田はそのわずかな間に、ほとんど面識の無い鈴乃の様子を観察して、正しい判断をしたことになる。

「やっぱ進路考え直せて。まだ料理屋やってるご両親元氣なんだろう？ カウンセラーがだめなら教師とか、カワっち絶対人と向き合う仕事に就くべきだって」

「小料理屋も人と向き合う仕事だよ」

川田はそこで話を打ち切り、真樹も任されている二階のカフェレジに戻ろうとすると……。

「シだよ……待ってるんなら家にいろよな」

三十一番路からの視線に気づき、真美はそれを無視して上にとがろうとして、

「はあ、もー」

踵を返して三十一番路に向かう。

「……お客様、店内で眠らないでください」

背もたれに倚け反って空せそうな顔で眠るアシエスに、形式的に声をかける。

「うう……………お腹……………減った」

アシエスは傍目にも明らかに膨らんだ腹を抱えながら、とんでもない夢を見ているらしい。

「おい鈴木製菓、こいつ本店に一人でバーガー四十個食ったのか」

「あと五個つてもこで限界が来て、家に持って帰るとか言ってたよ」

「だからこんなけ食えるのに微妙に過り着けないのはなんでなんだよ」

真美はがつくりと肩を落す。

「今日俺ラストまでだからな。早上がりもしねえぞ。適当に飯食ったら帰れ。終電遅くすぞ」

「製菓廠、私の部屋は狭いが一通りの化粧品などは揃っているから、そのときは是非泊まって

いってください」

「俺と会話しろ」

真美はイライラと唇を震わせる。

「別に何があつたわけでもねえよ。東美ともーちゃんが乗ってた地下鉄が密な飯に襲われて、

天祥さんとライラが助けに入ったんだけどライラがやられて、俺が傷を治してやったってだけの話だ」

「それを『何があったわけでもねえ』って言っちゃえる真奥さんの感覚は、一般人視点から見てもおかしいからね」

梨香は携帯電話のニュースサイトを眺めながら肩を震ふる。

副都心線の緊急停止に始まる一連の事故は、現在全く原因不明、と報道されていた。

死者こそいないものの、十両編成のうち三両分が脱輪し、うち二両はドアがこじ開けられたような形跡があった。

乗務員の「線路に人が」という通報と、新宿三丁目駅での非常停止ボタン作動との関連性はまだ判明しておらず、事故から何時間も経っていないため、当然復旧はしていない。

結果的に副都心線に乗り入れている近郊私鉄のダイヤは壊滅的に乱れたままだ。

「ちーちゃんの懸念逆受を受けて俺が駆けつけたのはライラがやられた後で、ひでえことになりそうだったから新宿三丁目周辺を結界で封鎖しただけだ。魔力治療したらライラの髪の色が変わっちゃったけど、死ぬよりはよっぽどいいだろ？ 実際俺に言えることはそれくらいしかねえんだよ。だから食い終わって速攻に休んだらさっさと帰ってくれ」

今すぐ帰れ、と言わないところに真奥の仕事モードを感じる鈴乃と梨香だったが、当然二人はこの説明では納得しなかった。

「その襲ってきた『凄な奴』とは何者なのだ、天幕殿すら苦戦したらしいではないか」

「天幕さんって、私を助けてくれた色黒のお姉さんだよわ。やっぱ普通の人がじゃないんだ」

「だから俺は知らねえんだって。恵美は完全にバニタって話は聞けなかったし、エメラダもチラっとしか見てねえって言うし、聞く時間も無かったしよ。本当に、俺に聞くよりちーちゃんや天幕さんに聞いた方がよっぽど分かるぞ」

「恵美……どうしたの？」

「そういう聞き方するってこた、あんたもある程度恵美から話は聞いてるんだろ？ 親子の確執だよ親子の確執。親父はともかく、お袋とはとことんウマが合わないらしい。そこは俺達部外者がどうこうできる問題じゃない。じゃあ、俺は仕事戻るからな。適当にしといてくれよ。あとアシエスは叩き起こしとけ」

「あ、ちよつと……」

響香が呼び止めるのにも構わず、真美は早口に言い切ると走り去りもせずに二階に上がって行ってしまった。

「なんだよ、そっけないな」

響香は不満げに口を尖らせるが、

「……」

鈴乃は無理に真美を追うことはせずに、大人しくポテトをつまみはじめた。

「どうすんの鈴乃ちゃん、終わりまで待つの。あれ絶対何か隠してる口ぶりだよ」

「梨香殿も分かるか」

「ん？ う、うん」

ポナトを一本ずつちまちまとつまみながら、鈴乃がなぜか小さく微笑むのを見て、梨香は首を傾げた。

「魔王は今、野心なことを言わずにいた。ただ、そのこと自体は事件と直接関係ないし、奥く意図地になるから注目に突けなかった」

「ん？ 何それ」

「ふふふ」

鈴乃はコーヒを一口啜ると、少しだけ二階を振り返る。

「魔王ほどのタイミングで、店を離れたのだろうか」

「え？」

「先ほど、魔王とレジの彼の会話が聞こえてきた」

「さ、聞こえるの？ あそここの会話が？」

梨香は思わずレジの方に目をやる。

「階席の中でも、梨香達が座るこの席はレジからかなり離れた場所にある。

客席は六割埋まっている様子だが、今必死で耳を凝らしても、レジに立っている大柄な店員

が何を言っているかなど全く聞こえない。

「まあ、職業柄な」

鈴乃は響香の驚きを流して説明を続ける。

「魔王は『三十分で戻る』と言って店を出たらしい。実際に三十分で戻ってこられたようだが、話を総合すると千穂殿のS.O.S.を拾ってからでは際どいタイミングがするのだ。それに……」

「それに？」

「つかぬことを聞くが、響香殿のお仕事は就業中に携帯電話の携帯を認めているか？」

「え？ 仕事中に携帯使えるかって話？ そりゃダメだよ。仕事だもん」

「そうだ。仕事中には携帯電話を使えない。なら魔王は、一体どのタイミングで千穂殿の概念送受を受信したのだろうか」

「いでありんく、ってなんだっけ。そっちの世界の、オペレーターの魔法みたいなやつだったっけ？」

「そうだ。千穂殿は短期集中講座で概念送受を心得しているのだが」

「聴か」

響香の態度が突っ込みを、鈴乃はスルーした。

「千穂殿は技術士ではない。必要なエネルギーを無理矢理補給して力を運用しているだけで、我々のように従事空想では使えない。千穂殿は術を補助する道具として、携帯電話を用いてい

るんだ」

鈴乃は千穂が、携帯電話を法術の増幅器として概念送受を用いている理由を説明する。

「何も考えずに聞いていると、千穂ちゃんも危ない電波を送受信してるとしか聞こえないけど」

千穂が概念送受を介在していることを本人から聞いていても、こうして実際に異世界の人間から詳しい理屈を解説されると、改めて千穂の超常性が際立ってくる。

「とにかく、携帯電話が手元に無ければ千穂殿からの概念送受は確実には届かない。魔王は事件が起こった夕食時、忙しく働いている最中だった。だが魔王は千穂殿の概念送受を受信して現場に駆けつけたと言う。これはどういうことなのだろうな」

「ん？ んんん？」

梨香は鈴乃の言わんとすることがすぐには分からず、頭を捻っている。

「休憩中……ってことはないか。ディナータイムで忙しい時間だもんね。こつそり携帯電話をポケットに持ってたってのは真実なんっていうより、このお店の人には有り得なさそうだし……んん？ ごめん、隣番、どういうこと？」

「簡単なことだ。千穂殿のS.O.Sを受け取る前から魔王は店を出ていたんだ。……この満月バスターというやつは、思ったより食べにくそうだな」

「へ？」



鈴乃はバーガーの包みに手をかけて、出てきたバーガーの妙な厚みに軽く驚く。

「むぐぐ……もぐもぐ……これを三十五個とは、一体どういう体をしているのだ」

小さな口で厚みのあるバーガーを頬張りながら、鈴乃は困惑の目でアシエスを見た。

「エミリアの持つ聖法気は、普通の人間のそれとは違う。アラス・ラムスと力を合わせれば、志波殿や天祿殿のような例外を除けば事実上エミリアは宇宙最強の人間と言っても過言ではない」

「うちゅーさいきょーねえ」

現実感のない言葉に梨香は苦笑する。

「歸ってきた敵が何者かは知らないが、エミリアは聖魔を振るって敵と戦った。千穂殿は、エミリアの戦いの音を聞いてのつびきならぬ事象だと考え概念感受を使った。魔王はそれをすぐに受信した……つまり魔王は、エミリアの聖法気を感知して、すぐに店を飛び出したんだ。だから千穂殿の概念感受もすぐに受信できた」

「……うん、でもそれは、どういうことなの？ 何もおかしくないように聞こえるんだけど」

真真が、真美の戦いの気配を感じ取って緊急事態に対応するために店を飛び出した。

一体何がおかしいのだろうか。

「梨香殿にはおかしくないのだからな。だが、我々に見れば大問題だ……うん、私は一個でも持て余してしまふな……野菜か、せめて緑茶が欲しいところだ」

普段一汁三菜の健康的な食卓を心がけている鈴乃にとって、バーガーとポテトのみという夕食は少々バランスが悪すぎるように感じる。

数分で済んでしまった夕食に眉を皺めながら、鈴乃はその事実を告げた。

「真奥直夫は魔王でエミリアは勇者だ。二人は依然として敵同士だ。それでも魔王は、エミリアの戦う想法気を感じして、千穂殿のSのSよりも前に店を飛び出した。大問題だと思わないか？」

「恋愛が危ないと思ったから店を飛び出したってこと？」

鈴乃ははつきりと頷いた。

「以前の魔王なら考えられないことだ」

少なくとも鈴乃が箕塚に住みはじめた頃の真奥なら、真奥のトラブルなんぞ知るか、こっちは仕事に忙しいんだ。勇者なんだからそれくらい一人でなんとかしろ、と説得する千穂や鈴乃相手に数々泣いてみせるところだ。

一緒に千穂が危機に陥っている場合はその限りではないが、今因千穂が現場にいるのを真奥が知ったのは、店を飛び出してからである。

「最近になってその傾向は顕著になりつつあるのだが」

鈴乃は食べ終えたバーガーの包みを丁寧に机に積みながら続ける。

「魔王は、口ではあれこれエミリアに文句を言いながら、エミリアのことをちゃんと大切な仲

間だと考えている。かつてその場の勢いでエミリアのことを「悪魔大元帥だ」などと言ったことがあったが、魔王の中ではそれが事実として成立しかけているようだ」

「ん、んん？ んんん!」

聖香は、鈴乃の辻褄な説明をなんとか自分の中で消化しようとして、

「ん、それって……」

とんでもない結論に達り着いてしまった。

「それって、ん、それって、ええき」

「魔王と勇者という関係を考えれば驚きだろうか？」

聖香の驚愕の声を驚きの共感と捉えた鈴乃は特たりと手を打つが、

「やー、そりや驚くよ。つまりあれでしょ？」

「うむ」

「真奥さんにとって、東美も守るべき女の子になったってことでしょ？」

「……………んんん？」

鈴乃は、予想だにしない発言に笑顔が固まり、眉が奇妙な勢いで上がる。

「や、え、何、つまりそれって、きやー何それ、あれでしょ、つまりあれでしょ？ 敵味方の垣根を越えてしまった禁断の愛じゃない？ きやー何それー 超絶えろんですけど!」

「あ……あい？」

「そういうことよね？ 敵だったけどずっと長いこと一緒にいたおかげで憎しみや恨み以外の感情が芽生えて、遂にはそれを自覚しはじめたわけでしょ、真奥さんが？」

「んんん？ 待て、製香殿？ それは何か違うー、それは何か違うー！」

思わず二度言う鈴乃だが、

「何も違わないじゃん。元々敵だった恵美が条件反射で心配になるくらい絆が深まったってことでしょ？」

「違わ……ちが……ちがわ、ない、かもしれないが、そういうことでもなくてだな！」

「大丈夫よ安心して、別に真奥さんが恵美を異性として意識してるとかそんな風に思ってるんじゃないのよ？」

「ならばなんなのだ、その奇妙なにやにや笑いは！」

「だあってさー？」

製香は先ほどまでの深刻な顔が嘘のように、華やかな笑みを浮かべた。

「人間関係ってのはシンプルな方が、分かりやすくって皆ラタビヤン！」

「は？」

「恵美と真奥さんの場合、今まで人間の勇者と悪魔の王様っていう立場の間に、宿敵とか親の仇とか侵略の隣者とかがそういう色々な要素が立ちはだかつてたわけでしょ？」

「ま、まあそうだが」

「どれも普通なら到底乗り越えられない障害だよね？ でも、真兇さん側からは、もうそれを乗り越えちゃってるってことだよね？ もしかしたら悪業が偉ない目に運ってるのかもしれないって思った途端に店飛び出しちゃうんだもんね？」

確かに被害の言う通りなのだが、鈴乃が査閲していた話の流れとは微妙に違（ちが）うし、なぜかそれを認めようとするとう心の中がざわつく気配がして、鈴乃は激しく首を振った。

「いや、しかしだな、それはあくまで魔王側から見た話であって、エミリア側からは特別魔王に歩み寄ったわけでは……」

「鈴乃ちゃん？ 何か焦ってる？」

「な、何を……焦ってなど？」

「いや、妙に顔が赤いから」

「あっけ」

鈴乃は慌てて自分の頬を触るが、もちろんそんなことで自分の顔色は分らない。

「い、いや、それは」

「あ、そっか、鈴乃ちゃんはずっとちゃんと通ってエンテ・イスラの人間側なんだもんね。魔王が勇者にすり寄ってるちゃ、手放しで喜べないか」

「ぐ、そうだ。そういう……」

「……なのかな？」

ほとんど飛びつくように梨香の言うことに同意したが、飛びついた瞬間には自分がそう思っていないということを心の冷静な部分が警告してくる。

なぜなら、飛びついたこと即ち、最初からそんなことは考へてすらいなかったということだからだ。

だが梨香は鈴乃の複雑怪奇な心理には気づかず、満ちげに微笑んだ。

「そっかー真実さんは恵美に歩み寄れたんだー」

「う、ま、まゝ、そうかもしれないがしかしたな」

「それって、とても素敵なことだよな」

「……………うん？」

梨香は両手で頬杖をつく。

「別に恵美と真実さんがくっつくとか思っちゃいけないけどさ」

「う、うん…………」

「やっぱ友達同士が角張る合わせてるってのは僕から見えて気持ちいいもんじゃないもん。私、今なら千穂ちゃんのお持ちち、ちょっと分かるよ。人間も聖魔も、殺し合わずに済めばいいな——って気持ち」

「梨香殿…………」

「くく」

梨香は困ったように笑った。

「それに私も……さ」

「うん？」

「……んん。今は本当に、千穂ちゃんの気持ち分かる。痛いくらい。どうして千穂ちゃんがあやつて気丈に振る舞えるかも分かる。自分でも意外だけど、今でもあの人達が邪魔だったこと、全然気にもならないし。たまたま……千穂ちゃんと比べると、私の方はどーもそーゆー事が無さそうなんだよな」

梨香はそう言うとき、トレーを横に避けてサーブルに突っ伏した。

「何時まで経っても、携帯電話を買いに行きそうにないし」

「携帯電話？」

突然なんの話だろうと鈴乃は首を揺るがす。

「なんでもない」

梨香は心なし固い声で、そう言うだけだった。

「さて、私は帰ろうかな。いい話聞けたし、一応状況は分かったし、恵美が落ち着かんなら今んとこ私は首突っ込みない方がいいって分かっただけでも収穫……あれ？」

一人で何かを吹っ切ったかのように顔を上げた梨香は、ふと向かいの店を見て目を睨いた。

「アシエスちゃんどこ行った？」

「ん？」

鈴乃は驚いて顔を見ると、今の今までだらしなく強欲な夢を見ながら寝こけていたアシエスの姿がいつの間にか消えている。

「まだ温かい。そう薄くには行っていないと思うが」

鈴乃がアシエスの座っていた椅子に触れると、人肌の温度がかすかに残っていた。

「トイレかな」

「……いや、私はなんだか嫌な予感……が」

そのとき鈴乃は、マダロナルドの階段を重い足音が下りてくるのに気づいて思わず振り向いた。

するとそこには、張りついた笑顔の裏に恐るべき憤怒を隠しながら歩いてくる真奥貞夫の姿があるではないか。

一階まで下りてきた真奥は一直線に鈴乃と榮香の所に駆けてくると、笑顔のまま魔王サタンの名に相応しい地獄の釜が聞くような声を出す。

「お前ら、アシエスになあにを吹き込んだ」

「……へ？」

「俺と？ 真奥が？ なんだった？」

「け」



「ついで」

梨香が思ひ切りうめき声を上げ、鈴乃は鈴乃で頼に手を当てて抱いてしまう。

話に夢中で完全に泊断していたが、アシエスは二人の話が佳境に入ったあたりで既に目覚めていたのだ。

それなのに、目覚めた気配を微塵も感じさせなかったのは果たして意識してのことなのか。とにかく二人の顔を突いて、アシエスは二階に駆け上がった二人の話をアシエス流に補正して伝えたに違いない。

「い、いや、その、それはなんというか言葉の綾であつてだな……」

「僕も依頼も頼もあるかバカ野郎、冗談でも言つていいことと悪いことがあるぞ」

「つ、つまりあれよ！ 敵も助けちゃう真実さん魔王の館！ かつこいっでことよー」

「責めるなら俺の目を見て言え」

「す、凄いと魔王！ は、拍手だ！」

「鈴乃、柄にもねえこと勢いでやると、後悔はすぐに襲つてくるもんだぜ」

「肝に銘じる！ もう既に後悔したヨ」

顔を真っ赤にしながらかつてふためく鈴乃。

「そ、その、アシエスはどうした？」

「ハウスだ」

真奥はとんとんと自分の頭を指差す。

「首に纏つけとかねえと本当何してかすかも何言い出すかも分からねえだけ東美よりずっと厄介だこのバカ」

完全に大抵いである。

そして、この馬鹿、と言った瞬間真奥の顔が五月蠅そうに歪んだ。

尋らく融合状態になったアシエスからの猛抗議を受けているのだらう。

「……お前も、今日木崎さんがいて良かったなあ。俺の怒りは木崎さんのおかげで耐じられていると言っている。話は済んだんだろ？」

「は、はい……」

神妙な顔になる鈴乃と梨香は、

「お済みのトレーはお頭かりいたしますので……またのお越しをお待ちしております」

真奥真矢の顔に悪魔の王の覇気の片鱗を見た気がして、素直に店を後にした。

「あれが、歩み寄ってる顔かねえ……」

「ちよっと目覚めが悪くなった」

すっかり沈んだ顔でとぼとぼと輪ヶ谷駅前までやってきた二人。

「あ、しまった」

「どうしたの？」

製香が煙宅するためにバッグの中の空間入れを探しはじめたとき、鈴乃がはっとして顔を曇らせた。

「いや、魔土に依えようと思っていたことを忘れていたんだ。まあ、仕事が終わるのが深夜ではどうしようもないか……」

「どんな用だか知らないけど、今から戻ったら叩き出されるだろうから、メールでも入れておいたら？」

「それしかあるまいな」

鈴乃は携帯電話を取り出すと、ぼちぼちと慣れない手つきでメールを打ち始める。

「よし、これで……」

なんとか文面を作成し、読み直しておかしなところがないか確認し、いざ送信しようとなつた段で、鈴乃はふと指を止めた。

「……………」

「い、いきなり止まってどうしたん？」

鈴乃がネジの切れた人形のように表情まで固まってしまったのを見て、製香は何事かと慌てるが、

「初めて、だな。そういえば」

鈴乃がぼつちとそう呟いて、再び体のネジを回しはじめた。

「何が？」

「いや、大したことではない。思えば随分長いこと隣に住んでいるのに、魔土にメールを送るのが初めてだと今気づいたんだ」

そもそもつい最近まで、真奥のメールアドレスも知らなかったのだ。

電話番号だけは万が一に備えてずっと以前に聞き出していたのだが、何せ敵同士とはいえ隣人同士は毎日顔を合わせる、用があれば意地悪しの会話の方が早い相手にメールを送るなどそうそう無いことだ。

鈴乃が真奥のメールアドレスを知ったのは本当について先日。

恵美を捜しにエンテ・イスラへと赴いたときなのだ。

「……………」

「な、何？ そんな奇妙になるような話をし忘れたのか？」

「いや、そういうわけではないのだが」

煮え切らない態度の鈴乃に首を傾げる恵美。

鈴乃はほんの少しだけやるせなさそうな顔をして、首を横に振った。

「初めてのメールがこの内容ではいささかつまらんと思ってたな」

鈴乃は文面が完成しているメール画面をさらに操作し、恵美や千穂相手でもまず使わない機能と呼び出し文面に添えた。

「本当に、つまらん」

そう言つて、送信キーを押した。

メールの送信が完了したのを見て携帯電話を閉じると、鈴乃は改めて聴音に向き直った。

「正直私も、今日何が起こったのか分かつてはいるわけではない。だが詳細が分かつたときには、製香廠にも必ず連絡する。少しの間、待っていてほしい」

「うん。まあ力にはなれそうにないけど、恵美を元気づける会とかやるんなら幹事は任しうて。んじゃ、私帰るね。皆によろしく」

「ああ。道中気をつけて」

製香が手を振りながら轆ヶ谷駅に消え、鈴乃も踵を返してアパートへの道を歩きはじめた。

「柄にもないことを言えば、すぐに後悔が襲ってくる。そんなことは分かっているさ」

鈴乃はまた携帯電話を取り出すと、メールの送信済みフォルダを開いた。

宛先に恵美と千穂ばかりが並んでいるその画面の一番上に表示されている「悪土」の文字。

「でも、不謹慎と今は後悔は無いな」

真裏に送ったメールの文面をもう一度だけ見直してから、鈴乃は軽い足取りで夜の繁華の街を帰路に着いた。

「おいまーくん」

鈴乃と梨香が降り、融合したアシエスも結局満腹だったのかよて寝を始め、ディナーのピークを過ぎた二十一時、

この時点での売り上げジャーナルを帳簿に添付するためにスタッファームに戻った高奥を、木崎が呼び止めた。

「はい？」

「今、スタッファームの君のロッカーの中から、何か重い物が袋手に落ちる音がしたぞ。携帯か財布か何かがポケットからこぼれたんじゃないか？」

「え、マジですか」

「もの重い音がして驚かされた。壊れていても知らんぞ。早いところ見ておけ」

「え、あ、すいません」

高奥が慌ててロッカーを開けると、折角高奥に買わせた新しい携帯電話がロッカーの床に落ちていた。

背面のイルミネーションが光っており、誰かからメールの着信があったことを知らせている。恐らくはこのメールを受信したときのバイブレーション動作で落ちてしまったのだらう。

反射的に着信を聞くと、なんと鈴乃からのメールであった。

「あいつまだ何か……………うん」

真美は今が就業時間中であることを思い出し、迅速に携帯電話を片付けるとロッカーの扉を開け、本来の作業に戻る。

「……………木崎さん、二十一時の売り上げジャーナル、貼っておきました」

「ん？ ああうん、ご苦労さん」

真美はそのままずっとスタッフルームを出ると、足早に仕事に戻るうとする。

「まーくんどうしたの、なんか顔青いけど」

すると途中で川田が声をかけてきた。

自分でも自覚はあったが、そんなに一気に顔色が変わったのだろうか。

「いや……………その」

一休餘乃はどういうつもりなのだ。ただでさえアシエスに妙なことを吹き込んでくれた上に、あんなメールを送ってくるとは。

アシエスが起きていたら、まだどうも大惨事を覚悟しなければならないところだ。

「俺……………今日ちよっと家に帰りたくなくて……………」

「は？」

「できれば、どこか別の所で一夜を過ごしたい……………」

「何気神も悪いこと言ってるの、頭打ったかなんかした？」

川田はどこまでも辛辣だった。

「なんなら隣の作業は僕がやるから先に帰ったら？ 同居人と美人のお隣さんが待ってるんでしょ」

やっかみ半分からかい半分で言った川田の言葉に対する反応は劇的だった。

「もつと面倒な奴が待ってるらしいんだよおおお!! 帰りたくねえよぞって、家に面倒事が持ち帰ってるんだよこれは!! 俺は自分の仕事をしたいのにどいつもこいつも面倒事ばかり持ち込んできやがってなんなんだ畜生、自分のことは自分で片付けろよ本当に!!」

「ま、まーくん!!」

「鈴乃も鈴乃だよなんだあのメールは!! 朝にもねえことすんなって言ったばっかだろが!!」  
 仕事中の真奥には珍しく本気の感情を露わにしながらばたと駆け上がり、

「何か……悪いこと言ったかな」

川田は呆然とそれを見上げる。

だが、真奥が怒るのも無理もなかった。

鈴乃から送られてきたメールには、こうあったのだ。

「仕事が終わったら早く帰ってこい♥ エミリアが待ってる♥」

「帰りたくねー!!」



真美は仕事上がりの深夜の0時半、デュラハン式号を押して歩いて帰っていた。

鈴乃のメールを受け取って以来仕事がいまいち手につかず小さなミスをいくつもしてしまい、余計にテンションも下がっている。

真美は携帯電話を聞いて鈴乃のメールを見直すと、小さくため息をついて足を止めてしまった。

「まさか……この時間まで待つてゐるってことはねえかな？」

ハートマークのことは最近ありがちな鈴乃の気の迷いだとして放っておくとしても、真美が待つてゐる、とはどういうことだろうか。

新宿三丁目駅での様子を思い出せば、とてもライラや天称などと冷静に話をできる状況とも思えない。

当然エメラダと一緒に水稲町に帰ったものだとはかり思っていた。

千穂が待つてゐる、ならなんとなく分かるのだ。

実は千穂の家というのは安全ではない。

千穂は両親と暮らしているのだから社会常識的には夜になったら家に帰るのが当たり前なのだが、勇者でも法術士でも魔導でもない、身を守る術を持たない千穂をアパートから離れた場所に帰す、というのはこの状況では結構勇気のいる選択である。

いくら天称や志波の協力が得られているとはいえ、今回も天称が現場に駆けつけるのにはそ

れなりのタイムラグがあった。

だからこそ、なるべく千穂の両親に気遣いつつ千穂を真美や鈴乃や志波の目の届く所に保護して置く、というのなら分かる。

だが、実際に待っているのは真美だと言う。

背後から戦車で撃たれても傷一つ負わないと皆が思っている真美が何故、わざわざアパートで真美の帰りを待っているのだ。

というか、あの時点で鈴乃がその旨メールで送ってくるということは、真美を待たせているのはノルド、或いは西蔵ということになる。

「帰ったら、大喧嘩の最中とかだったら嫌だなあ……全くと」

漆原の病室でライラを監視し、その後も接触を断っているため、真美は未だライラがどこに住んでいるかは分からないが、真美とライラがヴィラ・ローザ無線で丹波最悪の親子喧嘩など繰り広げていた日には、日本が潰滅するかもしれない。

「まあいつも通りの静かな夜だから、それは無いんだろうけど」

真美は立ち止まったままデュラハン式号のスタンドを立てて、背後を振り返った。

「で、お前が俺の時間潰しの相手をしてくれるってのか？」

「あ、バレてた」

「何故バレねえと思ったんだよ」

振り返ると、いつもと変わらぬトーガとツシヤツの大天使、ガブリエルが立っていた。

何せ大柄だしそもそも存在がうるさいガブリエルである。人通りの無いこの時間に、気づくなど言う方が無茶だ。

「ミキティからの御達しでね。まさかまさかでエミリアが襲われたろ。単独行跡してるアバートの関係者の護衛に就くように言われてるんだ。」

「俺に護衛なんか必要ねえよ」

「エミリアにもいらないと思ってたけど、結局襲われただろ？」

「どっちにしろ、お前が護衛ってたけで嫌だ」

「そう言うなよ。こっちは宮仕えなんだからさ」

「誰が宮だ誰が」

「あ、佐々木千穂なら安心して。僕が送り届けて、実家帰道にばっちり警戒網を張っておいたから、何かトラブルがあってもいつでも対応できるよ」

「誰も聞いてねえし、お前がちーちゃんを送り届けたって話もちーちゃん家の周辺に何かしたって話もその響きだけでいかかわりさ織載だ、バカ野郎」

「天使がいかかわしい真似するはずないだろう？」

「お前初対面であーちゃんに何言われたか覚えてるか」

「あははー」

真央は今度こそ体の志から疲れを感じて、その場に座り込んでしまふ。

「何、勤務明けでお疲れ？」

「お前にトドメ刺されたようなもんだよ……おい、アパートに妻美が待ってるって、マジなのか」

「え？ あーそういえばいたね。佐々木千穂が家に帰ったのは十時くらいだったけど、そのときにはまだいたと思うよ。そのあとのことは知らないけど」

「帰っててくんねーかな……獅子咆哮に俺等さ迷むなよな……」

「まあまあ、そうは言っても君が帰る家は一つしかない！ さあ立つんだ悪魔の王！ 元氣に足を出そうじゃないの！ 元氣に帰ろうアルシエルのご飯が君を待っている！」

「ああああああああもう頭張ってる俺に誰か心機やかに仕事に打ち込める生活をプレゼントしてくんねえかなあちくしょおおおお!!」

うざい、という言葉以外では表現のしようのないガブリエルのテンションに打ちのめされて、真央は頭を抱えようずくまりたくなってしまう。

だがここですくまっついていてもいい結果は見えそうにないので、仕方なく自転車を押して再び歩きはじめると、ガブリエルが横に並んできた。

「ねえ、一つ聞いていい？」

「なんだよ」

真実を顔を上げずに答える。

「なんで、ライラの話を聞こうとしないの？」

「聞く理由が無い」

「なんでよ」

「なんでもだよ。何か複雑な理由を求めるようならすまねえが、本当に聞く理由が無い、ただそれだけだ」

真実が特別感情も込めずに言った。

「昔、命を助けられたことは感謝してる。感謝してるが、もう十分あいつの掌の上では随分やってた。今日のことであいつの命も助けた。利子含めてもとづくに儲けはサマラだ」

「ふむふむ。なるほど。なるほどと言ったものの、まだちよつとよく分からないな。これまで日本で起こった色々なトラブルに柔軟に対応してきた君らしくもなく、ライラの話を一言も聞こうとしないのは、損にならない？」

「損で、何がだよ」

「だって、君もイエソドの子連とライラが密接に関わってることばもう分かってるんでしょ？ 今後のこと、聞いておいて損は無いと思わない？」

「……ガブリエル、お前がキ育てたことあるか？」

「は？」

「唐突な通寶問に、ガブリエルは目を瞬く。」

「俺、アラス・ラムスと暮らしはじめですぐ、保険に入ろうか検討したことがあるんだ」

「保険？ それって医者にかかる用のかじやなくて、生命保険とか火災保険みたいなやつ？ 魔界は長期的なリスクの管理に力を入れているの？」

魔王の入れる保険とはどんな保険だと一瞬悩むガブリエルだが、話をきちんと聞くと、結局入っていないのだということが分かる。

「掛け金もバカにならんし、健康診断が必要なのか色々あって結局入りはしなかったけどな。なんでそんなこと考えたかっていえば、お前のせいでこれから俺が死ぬことも万が一とはいえない得るんだって気づいたからなんだ」

「あ、僕のせいなのね」

ガブリエルははたと手を打つ。

そういえばあのとき、魔王を殺すことも視野に入れて力を解放したことを思い出した。

「ただな、なんで保険かけるかっていえば、要するに先々何が起こるか分からないから、悪いことが起こったときのためにかけとこうってなるわけだろ」

「うん、まあね」

もう遠目にヴィタ・ローザ館の灯りが見えてきている。

「連にな、先のことがあったら、保険会社の調査なんか成り立たねえんだ」

「うん、まあ……」

「俺は、アラス・ラムスの将来に何が起るかなんて、知りたくない」

「それは保護者としてどうなの？ 悪いことを予見できるなら、それは知っておくべきじゃないの？」

「その予見できちまった悪いことが、絶対不可避のことだったらどうする」

真実<sup>マコト</sup>は黙<sup>もく</sup>り言い放った。

「お前はあの場にいなかったが、大家さんはアラス・ラムスとアシエスは、お前らの天界に帰らなければならなくて言ったんだ。あの大家さんがだ。大家さんはずっと前からタイラと繋<sup>つな</sup>がってた。なら話を聞けばアラス・ラムスとアシエスを天界に帰さなければならなくなる。だが、俺にも恵美<sup>けみ</sup>にも、そのつもりは無い。アラス・ラムスを遠いとこになんかやりたくねえし、アラス・ラムスも俺達と離れたがらない。なら、何もかも今のままでいい」

「……俺が言うことじゃないけど、知らないから免<sup>めん</sup>れられることはかりじゃないよ？」

「本当、お前にだけは言われたくねえな。注意しとけよ、今は寝てるが、アシエスはお前のこ<sup>こ</sup>と見るだけで殺したいっていうつも言ってるからな。いつ大家さんの隙<sup>ひま</sup>突いてお前の寝首<sup>ねくび</sup>掻くか分からんぞ」

「あー、もう何度が夜討<sup>やうとく</sup>ちされてる」

「そのまま死ぬば良かったのに」

「酷いな。本当酷いな——」

そんなことを言いながらも二人は着実に足を前に進め、ヴィラ・ローザ銃塚に降り着いたときには、もう時刻は一時に迫ろうとしていた。

真奥はデュラハン武装のスタンドを定ると、ガブリエルに向き直る。

「護衛ご苦労、もう帰っていいぜ」

「一応今の話は最後まで聞かせてよ。気になるじゃん」

「最後までって、何が最後なんだよ……」

真奥は面倒くさそうに鼻を鳴らした。

「……一香気に食わないのは、そこなんだよ」

「え？」

「知らないから免れられることばかりじゃねえ。なら俺達はお前やライラがやってきたことを知る努力をしてやるくらいはするべきかもしれねえ。だがな」

真奥は自分の胸を指差すと、小さく言った。

「知ったことに対して、なぜ俺達が力を尽くしてやらなきゃならないんだ？ そんな義務を負わされる謂れはねえよ」

「世界が減じるって言われても？」

「知ったことじゃねえな」



「君連の子孫の未来が問われるかもしれないんだよ？」

「人間の子孫が死に絶えれば悪魔にとっては好都合だし、悪魔の子孫なんて考える頃には俺は死んでるだろうからその頃の奴らが必死になってなんとかしろよ」

「君連には力がある。俺の誰にも無い力が。それで事態を解決できるかもしれないのに、動かないっていいのかい？」

すると悪魔の王は、顔を歪めながらニヤリと笑った。

「……本音が出たな？」

「ええ？」

「なら俺はこう返してやるよ。」どうして力を持つてるってだけで、誤の分らない責任を一方的に押しつけられなきゃいけないんだ」ってな」

「お……おとお？」

真奥の論法に一瞬ついていけず、ガブリエルが言葉に詰まる。

「つまるところお前らは『勇者エミリアよ、魔王サタンを倒せる力を持つのはそなただけなのだ』見事魔王を打ち倒して参れ」をもう一度やりたいんだろ」

その瞬間、真奥はすつと表情を潰す。

「それで悪魔は何を手に入れた。ええ？」

「えつと……」

「俺には悪美から命を救われる理由にいくらでも覚えがある。俺はそれだけのことを悪美にしたら、その恨みを晴らしてすっきりしたいってのはあいつ自身の意志だ。だけどエンテ・イスラの人間共はあいつの気分に乗っかって、自分達も一緒に背負うべき重荷を全部あいつに押しつけたわけだろ？ 力があるってだけの理由で」

それこそは、エメラダがずっと後悔し続けてきたエンテ・イスラに住む全人類の替だ。

その替が先だって悪美をエフサハーンに囚え、彼女の心を縛った。

「俺をあと一步まで追い詰めて、逃がしたからって後追っかけてきて、いざ倒せそうになったら仲間の裏切りだ。そのあと俺とエメラダとアルパートと鈴乃がどうにかするまでお前ら天界に歸らされ続けた人間達の未来を、どうしてあいつが救ってやらなきゃならないんだ。まして俺なんかが、救ってやる理由はどこにもねえ」

「……それは、エンテ・イスラの人間達が罪深いから救ったってことかい？」

「まだ分かってねえな」

真裏はガブリエルを小馬鹿にしたように口を塞める。

「なんで俺や悪美が、今の平穏で順調な生活を捨てて、お前らのカビの生えた計画の片棒担がなきゃいけないんだよ。冗談じゃねえよ」

「ええええ？ そ、そんな勝手な……」

「勝手はどっちだ」

真実が吐き捨てた。

「一つ聞くがよ、金持ちが世界中の貧しい人に自分の金をばらまいて、代わりに無一文にならなきやいけない義務でもあんのか」

「えっと……」

「貧しい人は、ひな舐みてえにただ口開けて施しを待ち続けてればそれでいいのか」

ガブリエルは反論できずに黙り込む。

「俺や恵美が誰よりも強い力を持ったら、今の自分の生活の全てを投げ出して世界中を助ける責任を負う義務があるのか。ええ、その責任は、誰に負わされたものだ？」

真実の声に、紛れもない怒りと苛立ちが湛しる。

「俺はお前らのそういう態度が気に入らないんだ。「力を持ってるんだからやってくれよね」。

そういう態度で来るのは、そういう態度で来ても力を持ってる俺達が「そうだね、僕らには責任があるから頑張るよ」って言うと思ってるってことだよな」

「そ、そこまでは……っていうか夜中だからちよつと静かに……」

「違うってのか。じゃあどういう了見だっただけ言ってみろ」

「ほ、僕はともかくライラは決してそんなことはないよ。彼女は自分も命がけて必死に滅びを食い止めようと頑張ってたんだ。エミリアやノルドを守りながら、エンテ・イストラを可能な限り正しい世界に戻すために……」

「ああ、なるほどな。それであの態度が、よく分かった」

ガブリエルが珍しく誰かを弁護しようとするが、真栗はそれをはねのけた。

「やっぱそうだ。お前ら鉄は傷つけても壊れねえって思ってる奴だな」

「え？ て、鉄？」

突然話が飛んで、ガブリエルは目を白黒させる。

「鉄は強いよな？ ちょっとやそつとの衝撃じゃ壊れないし、どんだけ傷ついてもなかなか頑丈さは失わないよな」

「う、うん、まあ……」

「だからって、隠っていいのか」

「え？」

「傷がつかねえなら隠っていいのかって聞いてんだよね」

完全に怒声であった。

町のどこかで、真栗の声に呼応した犬の遠吠えが聞こえた。

「頑丈なら投げても壊っても隠ってもいいのか？ 傷つきにくい素材であれば、粗末に扱うのが正しい使い方か？ 力があればどんな仕打ちをしても壊れねえってのか？ 俺や東美や、声屋や操屋や鈴乃がお前らの言う通り隠ってやった後、お前らは俺達のその後の生活を保障してくれんのか？ それとも俺達の生活なんか、世界や人類の未来のためなら大事の前の小事

か？」

「……あー、うん、なるほど、そういうことか」

言い募る真奥の言葉をようやく理解したガブリエルは、小さく頷いた。

「今度のなるほどはちゃんと納得したなるほどだよ」

「……本当に分かってんだろうな」

「分かってるよ。他人にエコだエコだやかましい人の家行つたときに部屋の電気つけっぱなしでクーラーガンガンきかせてたら、なんだコイツってなるよね」

「……そういう例を出してくる当たり、お前もいい具合に染まってきたやがるな」

真奥はこの夜初めて、表情を緩めた。

「とにかくそういうことだ。ライラは俺達に何かをさせたいらしいが、俺達にはライラの話を聞く理由も、責任も、義務も、メリットも無い。エンテ・イスラの政情は定まって、魔界も平和を取り戻して、天界は地球との接触を断つた。後に残った問題は今日ちーちゃんと恵美に怖い思いをさせた奴を排除することと……まああとは、俺と恵美がどう関係を清算するかってことくらいだ。それが全部済んだら、俺達はそれぞれ生きたいように生きる。お前達には一切干渉させない」

「色々突っ込みどころは多いけど」

ガブリエルは苦笑する。

「君が生きたいように生きるってことは、要するにエンテ・イスラ征服をいつか再開するってことでしょ？　僕らはそれを止めるかもしれないよ？」

「それはそれで構わねえさ。俺の野望を邪魔したい奴がいるのは当然だし、邪魔する奴を排除するのは、俺の意思だからな。だが訳も分からず用意されたフィールドで後ろから尊意の顔で襲られるのは、俺の意思じゃねえ。お前さつき、俺が色々なトラブルに対応してきたつってたけど、これまで起こったトラブルは、排除しねえと俺自身や俺の周りの連中が危険にさらされるから対応してたんだ。世の中のためとか思ってたことなんか、一度もねえよ」

「あいしーあいしー。その若さであの魔界を統一した芯の太さと強さ、仲間を思いやる気持ち。ライラは完全に感服してたね。彼女が今のままなら何百年経っても、話は聞いてもらえそうに無いや」

「分かってもらえて何よりだ。じゃあ、いい加減俺は帰るぞ。お前も帰れよ」

「うん、そうさせてもらおうかな」

共用階段の下で、真奥とガブリエルは別れるが、真奥が階段を上がり切ったところで、ガブリエルが声をかけてきた。

「でもね、その話を僕にしてくれたのは、君にとっては失敗かもよ」

「なんだと？」

怪訝な表情の真奥に、ガブリエルは得意げな笑み。

「ほら、僕、君よりも世話り上手だから」

「言ってる。お前がライラと僕でどう警<sup>けい</sup>がつてたか知らねえが、ライラ以上にお前の話なんか聞く気ねえから」

「はいはい。今はそういうことにしておくよ。それじゃね、お休み」

「ああ」

「あと」

「ん？」

「気をつけて帰るなよ」

「は？」

「自覚があるのか無いのかわからないけど、発言には責任持ちなね」

意味深な一言を残して、ガブリエルはこの寒い中サンダルをべたべたさせながら軽い足取りで隣の志<sup>し</sup>波<sup>は</sup>家へと帰っていった。

共用階段の扉を開ければ二〇一号室の扉が見える所まで来て、今更気をつけて帰れもクソも無いと思ふのだが……。

「あー一時かよ畜<sup>ちく</sup>生<sup>せい</sup>。もう声<sup>こゑ</sup>屋<sup>や</sup>も凄<sup>すご</sup>屋<sup>や</sup>も凄<sup>すご</sup>屋<sup>や</sup>も寝てんじゃねえか？」

ガブリエルと話し込んでしまったせいで定計な時間を食った真央は、顔を拳<sup>こぶし</sup>めながら共用階段の扉を開けて、

「うおっ」

思わず叫び声を上げて後ずさってしまった。

「な、な、な、なんだよ……お雨まだ降ってなかったのかよ!」

真美が立っていたのだ。

共用廊下のくすんだ蛍光灯の灯りを背後にしているので表情はよく分らないが、先ほど新

宿三丁目駅で見たのと変わらぬ服装でいるから、一度も家に帰っていないようだ。

真美が予想した通り二〇一号室と、そして二〇二号室からも灯りは漏れていないので、真屋

も真原も鈴乃ももう床についているのだろうか。

この流れなら真美は鈴乃の部屋に泊まることにしたことまでは予想できるが、なら何故皆が

寝静まっている状態で真美一人が起きたまま共用廊下で地縛霊よろしく突っ立っているのか。

「あ……もしかして、起こしたか? わ、悪い」

真美は今更、小さな声で言い訳する。

外でガブリエルと口論じみたことをしたせいで、確かに大声を出してしまった。

真美なら寝入りばなを起こされて背立って文句を言いに待ち構えていた、ということはある

そっか。

「ほ、ほら、今日お前とちーちゃんがトラブルに遭ったろ。それで大家さんがいらねえ気いきかせて、ガブリエルを満腹とかいって奢越しやがってよ。つまんねえことばっか言うからつい



大声出しちまって……魔王に大天使の護衛つけるとか笑わせるよな、はは、ははは……  
恵美？」

「……まで真奥の言葉に全く無反応。真奥はさすがにちよつと気味が悪くなってる。」

「恵美？ ど、どうした？ おーい……」

一応目の前で手をばたばたと振ってみるが、反応が無い。

「……遅いわよ。アラス・ラムスは待ちくたびれてもう寝ちゃってるわ」

「お、おう？ で、でもお前も知ってるだろ。今日の俺のシフト閉店ま」

で、と真奥は最後まで言うことができなかった。

かすかに風を感じた。

気がつくとも真奥は、恵美に抱きつかれていた。

「つつつ？？」

救される！

真剣にそう思った。何が気に食わなかったのかは知らないが、寝入りばなを醒めさせたのが

そこまで不愉快だったのだろうか。

首の後ろに感じる恵美の腕の感触から、真奥は数瞬後に自分の頸椎があらぬ方向に曲がる

予感を覚え凝固した。

二〇一号室の押し入れの魔力をこの場所から操作しては間に合わない。

これまでエンテ・イスラでの決戦からこっち、真美が真美に容赦なく攻撃を加えたことは一度や二度ではないが、ここまで直接的な真美行使に及んだのは初めてのことだった。

これまでか。

だが、覚悟して体を固くしても、その瞬間は何時まで経ってもやつてこなかった。

「……お？」

五秒たつても自分が生きていることに気づき、真美は無意識に閉じていた目を開く。

「……………」

「あ、あのー……………」

視界のすぐ下に、真美の顔が見えた。

肩と首に真美の体の重さが少しだけかかっている。

真美の顔が、自分の胸に当たっている。

この状況はどういうことだろう。出会い頭の直前リフィニアッシュホルドというわけではないが、さりとて一体何がどうしてこうなったか、真美にはさっぱり分からない。

「いいから」

「は？」

思ったよりもはっきりした声が、自分の胸のあたりから聞こえてきた。

「いいから」



繰り返される言葉に、真実マコトは混乱を醸醸くする。何がいいからなのか知らないが、声からは特別怒りの感情が聞こえてこないの、とうとう恵美ケミが何かに怒ってるわけではないことは理解する。

理解したが、理解すると同時に少しずつ冷静になった調子が今のこの状況が客観的にどう見えるかを分析しはじめ、少しずつ血圧ケツパツが下がってくる。

これでは、調子がどう見たって先ほどの鈴乃と葉香の戯れ言の通りに解釈されてしまうではないか。

真実的には鈴乃と葉香の会話を聞いてアシエスが持ち出した「くつつく」という言葉など物理的接触以外の意義で考えたことは無いが、残念ながら今の真実と恵美はこれ以上ないほど物理的に接触している。

ここで真実は、自分がこの場を冷静に切り抜けなければならないことに気づいた。

アシエスは、真実の心や精神の動向ドウキョウを敏感に察知する。ナレバシーや概念逆受カニゲセに燃もえなくて、融合状態なのだから仕方ないことだ。

だが今ここでアシエスに目覚められたら、明日以降周りの人間が真実を見る目は、バラレバワールドや異次元の宇宙に飛ぶよりも酷いことになるだろう。

「私ね」

「お、おう」

何を考えているかまるで分からないが、惠美の声は極めて冷静で、彼女がはっきりと理由があつてこの行動に出ていることは分かる。

なればこそ、急に刺激して事態を悪化させるのは得策ではない。真奥は断固したまま惠美の話を聞くことが現状最善の策であることを理解した。

「誰かに助けてほしいって思つたこと、ないの。体が大きくなる頃には、大体なんでもできるようになつてたし」

「そ、そうか。まあ、人類最強の勇者だもんな」

「あとは、エメや、アルや、昔はオルバだつて必要なきには何も言わなくても助けてくれた。ゾーカ―ってやつよ。だから私、あなたを殺しに行くのを辛<sup>くるしみ</sup>いと感じたことはあつても、やめたかつて思つたことはなかった」

「……………そおか。そりや結構なことだ」

明らかに状況に不適合なセリフだが、真奥はとりあえず頷く。

「でもね、この間、エフサハーンで私は……」

「お、おう、あのときな」

何を言い出すのかまるで分からない惠美に真奥はひたすら相槌を打つことしかできないが、続いて飛び出した言葉は嵐いもよらぬものだった。

「初めて『守つて』もらつたの」

「……あ？」

真美が疑問の声を上げたのは、二つの理由からだった。

一つは純粹に、恵美の言葉の意図がよく分からなかったこと。

もう一つは、恵美の体が小刻みに震えはじめたからだ。

「……どうして、あなたなのよ」

「な、何が……」

「どうして私を守ってくれるのが、私の人生を滅茶苦茶にしたあなただけなの……？」

「……」

ここで、お前を守っているのが俺だ、かってこたねえだろう、というほど真美も空氣の読めな

い男ではなかった。

要するにこれは、ダチだ。

恵美は決して、これまでのエメラダやアルバートや千穂や梨香や鈴乃の友情や離身を忘れて

しまっているわけではない。

だがその記憶でも支えきれないほどに、心が疲弊してしまっただ。

ただでさえエフサハーンの事件で心にダメージを負っていたところに、ライラの出現でさら

に心を大きく揺さぶられた。

ならば、言いたいことを言いたいだけ吐き出させてしまったほうがいい。

それで命が助かるならば、ここはサンドバッグ役に徹するのが上策である。

「皆は、お父さんがずっと私を守ってくれてた」

「ああ」

「でも、あなたのせいでそれが無くなった」

「それに因って言い訳はしねえよ」

「それから私は、ずっと誰かを守り続けなきゃいけなかった。私は……」音頭かったから」

「そうだな」

「今だって、私は誰よりも強いわ……だから」

惠美の肩が小さく震えた。

「お父さんはもう、私を守ってくれない」

「……」

その一言に、惠美の惨い思いの全てが凝縮されていると、真央ははっきり理解した。

再会したノルドは、むしろ惠美が守らなければならぬ存在になっていた。

それでも父の存在は精神的な支えになると信じていた。

だが、凍原の病室で、父は母を庇った。

かつて命がけで守ろうとした娘の圧倒的な力を目の前に、ノルドはその命をかけて守る相手  
を、娘の心より妻の身と定めてしまったのだ。

あの場にライラが現れた時点で、どう転んでも家族が平和氣に再構築されることなど、有り得なかったのだ。

「あなただけよ」

「は？」

「あなただけが誰よりも強くなった私を守ってくれた。私の人生を滅茶苦茶にしたはずの、あなただけ」

「……寝はけてんのか？」

「寝はけてもいないし、酔ってもいないわ」

「そりゃさうだ、未成年だもんな」

「戸籍上は二十歳よ。日本の警察には捕まらないわ」

「とても勇者とは思えない発言だな」

「私は勇者でもないもの。闘りがそう呼んだだけ。そんな職業、世界のどこにも無いわ」

今度は、震えながら微笑む気配。涙を流しながら、笑っている。

真実を抱きしめる力が、少しだけ強くなった。

「まさに、悪魔の誘惑よね。あなただけがいつも、私が欲しかった言葉を聞かせてくれた。さ……さ……」



再び真実の血の気が下がる。

ガブリエルは、ここに恵美がいることを知っていてあんなことを言ったのか。

やむを得ないこととはいえ、先ほどの自分の発言には、恵美や鈴乃すら自分が守るべき「周りの連中」として扱っていた部分<sup>1</sup>がいくつもあった。

「ど、どこから聞いてたんだよ」

察<sup>2</sup>れる声で聴くと、恵美はすこしだけからかうように言った。

「アラス・ラムスと一緒にずっとあなたの周りを待ってたのよ。アバートに帰ってきてからのことは、全部聞こえてたわ」

「……最近だ、こんなバツの悪いこともあるかよ。どこの性悪な神の悪戯<sup>3</sup>だ畜生<sup>4</sup>」

真美はガブリエルとの会話を反復して苦笑する。

「私だって、そろそろ自分のために生きていいじゃない？ でも、心のどこかでそうしちゃういけないんだってどうしても思っちゃうの。エメも、ベルも、千穂<sup>5</sup>ちゃんも、私の意志を尊重してくれる。でも、やっぱり私は自分の力を仲間のために振るわなきゃいけないんだって自負は捨てられなかった。別に千穂ちゃんや、周りの人を守りたくなかったとか、そういうことじゃないの。でも、結局私一人では何も解決できない。そんな私をどうして皆は勇者って呼んでたの？ 力があるのに友達どころか自分の身一つ守れない、しかも、ライラなんかに助けられて、これ以上重荷を背負うなんて無理。無理なのよ……っ！」

やがて声が震えはじめ、涙と共に乱れた心が溢れ出す。惠美の身を、抱きしめ返すことは真央はしなかった。

ただ、されるがままになっていた。

これはダチなのだ。ダチに正論を返したって、誰のためにもならない。

「私にできることなんて何も無い。それなのに、皆が私を勇者だって言う。力があるなら、戦ってくれて、その力を貸してくれて……自分の身一つ守れない私に、これ以上何をさせたいのよ……」

「俺はお前がさっさと研修抜けて、一人前のタルーになって欲しいと思ってる」

「……」

惠美の嗚咽が、一瞬間を突かれたように止まる。

「……あなたのそういうブレないところ、最近嫌いじゃないわ」

「俺はいつだって正直に自分の言いたいこと言うからな」

「その代わり、いつだって隠し事してるわよね」

「カードをオープンにしたまま生きてたら、切り札がいくらあっても足りねえだろ」

真央は嘆息すると、初めて自分から惠美の肩に触れた。

「一応言っとくが、俺は別にお前の機を賣いたくてガブリエラにあんなこと言ったわけじゃないからな。そこは分かっておけよ」

「分かってるわよ。だから………<sup>おかし</sup>嬉しいんじゃない」

「ああ？」

「本心からの言葉だから、心地いいのよ。あなたは否定するかもしれないけど、あなたは私を病院にしながら、いつだって仲間……うん、ご近所として守ってくれてた」

「それは必要に……」

「必要に迫られたからって私を守る人は、そう多くないわ」

「……相当参ってんな、お前」

「そうよ。魔王相手に、こんなこと言っちゃうくらいなもの」

真美の胸から顔を離して、泣き笑いの顔で見返してきた恵美の目尻は赤く濡<sup>ぬ</sup>れていた。

「ありがとぅ、魔王。私、元が頑<sup>がん</sup>だから、簡単なメンテですぐ元に戻るわ」

「最近随分と調子悪<sup>ずいぶん</sup>そうだったのは、酷使<sup>こくし</sup>されすぎてエラーが困<sup>こま</sup>ってたってことでいいな」

「ええ、今日のこれは深刻なエラーよ。ノーマルな状態じゃないわ」

恵美は小さくため息をついて、真美から一歩離れた。

「……恵美？」

だが、今度は真美の手を握ったままだ。

「一っだけ聞いていい……？」

「あ？」

「もし……私がこのまま弱くなっていったら……あなたは、私を守ってくれる？」

「おい、深刻なエラー状態から抜け出てねえぞ。何言ってるんだ」

「言ったでしょ。今日はまだノーマルな状態じゃないの」

恵美は少しだけ顔を赤らめながら言った。

真美は恵美に握られたままの左手にある腕時計が、間もなく一時半になろうとしているのを見て、またため息をついた。

「世界が変わっても、真実是不変じゃないんだろ」

「え？」

「勇者」の名乗りに誇りを持っていたお前も、確かにいたんだろ」

「……あ」

真美が言っているのは、あのときのことだ。

日本で真美と出会って、千鶴がエンナ・イスラの真実を知った、あの日の彼城でのことだ。

「俺自身そんな自覚ねえけど、俺がお前を守ってるんだとしたら、それは強いお前がどうにもならないことを助けてやってるだけだ。俺は、弱いお前になんか興味ねえ」

「……深刻なエラー状態なのに、言ってくれるわね」

「弱ることも強いことも構わねえよ。でも弱さを武器にする奴は嫌いだ」

真美はなんでもないので言う。

「俺が認めるお前は、勇者だ。勇者だって感涙り散らして、友達助けたくて必死で頑張ってるお前だ。たまのエラーならともかく、常時なよなよしてる奴は俺の魔王軍にはいらなない。」  
 「黒魔大元帥」は、心技体が誰よりも強い者にしか与えられない称号だ」

「……そっか」

東美は何か納得したように頷くと、ようやく真実の手を離した。

「技や体はともかく、心がマンナエルに劣つてると思われるのは嫌ね」

「うわ、ひでよ」

「だってそういうことでしょ？」

「まあ、魔王軍云々は置いといても、実生活で凄惨以下ってのは普通にどうかと思うぜ」

「あはは」

東美はようやく、快活な笑い声を上げた。

何故だろう、真実はその笑顔が、とても珍しいものに感じられた。

「やっぱりあなたは私の宿敵ね。優しい言葉を期待したのが間違だったわ」

「大いなる間違いだし、何バか言ってたって感じたな。もしお前が敵じゃなかったとしても、今のお前はとてもしゃないがそれに値しねえ」

「そうね。自分でもそう思う。ちよつと、不思議なくらい今日はダメだわ」

「人間だから凹むことがあるのは構わねえんだけどな、周りが微妙な反応起こすから、最低限

誤解されない行動を心がけてくれ」

「あら」

恵美は顔を赤らめたまま微笑む。

「私と抱き合ってたのを見られたら、誰がどんな誤解をするのかしら」

「日本語は正確に使え。『合つて』はねえよ。お前が出会い頭に飛びかかってきただけだ」

「交通事故に遭つたみたいと言ひ方しないでよ」

「俺にしてみりや人生最悪の接触事故だ」

限りなく本気の態度をつく真奥。だが不思議なことに、恵美は全く気分を書した様子には解か  
つた。

「傷つくわ」

「言つてろ。じゃあ俺もう寝るぞ。明日も仕事だからな」

真奥は恵美の横を過つて共用廊下に入り、二〇一号室の扉に手をかける。

「うん、ありがとう。遅くにこめんさい」

「……おう」

背後からかけられた声に、真奥は振り向くことはしなかった。

そのままドアの鍵を開けて中に入り、それ以上は恵美を見ることなく後ろ手に扉を閉める。

カーテンの隙間から月明かりだけが差し込む室内では、真奥と押し入れにいられなくなった

漆原が、壁の上で眠っている。

勇者がずっと魔王の帰りを待ち構えていたというのに、この悪魔大元帥は油断するにも程がある。

炊飯器の電源は切られており、コタツの上にはラップに包まれた、ふりかけをまぶしてあるらしい握り飯が三つ置かれていた。

どれもいびつで、とても普段真実が目にする握り飯とは似ても似つかない。

「なんなんだよ、一体……」

真美は壁一枚隔てたすぐ傍にいるであらう真美に聞こえないように小さく呟き、

「下手くそ」

鼻を鳴らしながら、その少し強んだ握り飯を手を取った。





星川と照瀬、両方おなじくおなじ



「諸君ー いよいよだー」

木崎真弓の号令に、マダロナルド轄々谷駅前店の全クルーが姿勢を正す。

「様々な困難があつたが、今日晴れて、轄々谷駅前店はデリバリー対応店舗として正式に稼働するー」

賽は投げられた。

本日午前十時より、轄々谷駅前店に於いてデリバリー業務が正式稼働する。

配備されたデリバリー業務用ジヤイコルフは三台。

真つ赤に染め抜かれたボディに熾然と輝くマダロナルドマークが眩しい。

「記念すべき初日のデリバリークルー達は、研修で学んだことを思い出し、全力で業務に当たつてほしい」

「はいー」

朝の時点で出勤している全員の声が唱和する。

初日の轄々谷駅前店の宅配担当に選ばれたのはクルーの中では真真と川田。

真真が電話注文の応対をメインに担当し、木崎が状況に応じてあらゆるホジションに対応することになっている。

つまり真真と川田が宅配に出ている間に入ったオーダーは、木崎自らバイクを駆って届けるということだ。



「諸君ー いよいよだー」

木崎真弓の号令に、マダロナルド轄々谷駅前店の全クルーが姿勢を正す。

「様々な困難があつたが、今日晴れて、轄々谷駅前店はデリバリー対応店舗として正式に稼働するー」

賽は投げられた。

本日午前十時より、轄々谷駅前店に於いてデリバリー業務が正式稼働する。

配備されたデリバリー業務用ジヤイコルフは三台。

真つ赤に染め抜かれたボディに熾然と輝くマダロナルドマークが眩しい。

「記念すべき初日のデリバリークルー達は、研修で学んだことを思い出し、全力で業務に当たつてほしい」

「はいー」

朝の時点で出勤している全員の声が唱和する。

初日の轄々谷駅前店の宅配担当に選ばれたのはクルーの中では真真と川田。

真真が電話注文の応対をメインに担当し、木崎が状況に応じてあらゆるホジションに対応することになっている。

つまり真真と川田が宅配に出ている間に入ったオーダーは、木崎自らバイクを駆って届けるということだ。

く。

「馴染むわね」

恵美は、支給されたインカムを装着すると、マイク位置を調整しながら気分が高揚するのを感じた。

恵美と同じく、今日からしばらくの間は二所のカフェ、キッチン、ホール担当タラー全員が就業中の無線インカム着用を指示されていた。

タラーの数も増え、オペレーションの数や種類も一気に増えたため、迅速に情報伝達を行うために導入されたのである。

恵美は口元のマイクが視界に入る度、これまで以上に「仕事をしている」感覚が積り澄まされる。

全タラーが着用しているものの中でも、恵美のインカムは電話着信した際にオーダーを取るための特殊仕様だ。

デリバリーにはお客様の住所、電話番号等の個人情報、PC入力が不可欠なため、受信機に片手を添えられる普通の電話機での対応は効率的にも接客的にも好ましくないとのことから本職が導入されたものである。

またこの手機は、宅配業務に出たタラーとのやり取りをするのにも欠かせない。

デリバリー用のバイクにはナビが積んであるわけでもないし、タラーも地域の地理に明るい

者ばかりではないので、有体うていに言つてクルーが通子になってお届けに手間取ることがないようには、いざというときには店舗から指示出しができるのだ。

スリムフォンの地図アプリを使うという手もあるが、全従業員がスリムフォンを持っている訳でもない。

デリバリーの出数によっていずれは宅配業務専従クルーの採用も検討されている。

クルーは所属した店の事情に通じてなければいけない、ということと、全ての業務を万端まんぽんなくこなすことができるエキスパートは一定数確保しなければならない、という木崎の信念から、最終的には全てのクルーが全ての仕事に満ずることになるだろう。

「さよみー、聞こえるか」

「……あ、はい！」

インカムから聞こえてくる木崎の声に、惠美はワンタンボ返事が遅れた。

慣れない呼ばれ方に、まだ迅速な反応ができない。

「研修期間の君の働きぶりを見ても、君はそのボジションに相応あつたしい人材だ。初日にデリバリーの司令塔となる人間は君しかいない。今日はよろしく頼む」

「分かりました。ご期待に添えるよう努めます」

「頼んだ」

惠美は少し離れた場所から、親指を立てて励ましてくる木崎に微笑み返す。

## ※

タルー達の間で「ホーリー・ネーム命名」と呼ばれている『事実上の研修期間卒業』の儀式は、あの日の翌日増突に行われた。

朝にもなく真奥に咽音を吐いてしまったあの夜の次の日。

不思議なことに自分でも全くそのことを後悔しておらず、妙にすがすがしい気持ちで朝を迎えた。

そしてランチタイムの少し前に出勤し、真奥の映画をやり過ごし、ようやく体に馴染んできたマドロナルドの制服に胸を通しホールに出た途端、

「おはよう、さえみー」

丁度前を横切った末崎に、笑顔でそう挨拶されたのだ。

「お、おはようござ……います」

本当に突然のことでもさしく豆鉄砲を食らった鳩のような顔をしていると、

「道佐さん、もしかして研修抜けた？」

「え？」

そう声をかけてきたのは先輩女性タルーで真奥や川田と並ぶベテランタルーの大木明子、通

「你アキちゃんだった。」

「本崎さんから渾名、呼ばれたんでしょ？」

「あれは渾名、ですか？」

「うん」

明子は面白そうに口元を緩ませながら言った。

「最初はみんなそんな顔するんだよ。本当にいきなりだから、私も最初は驚いたんだ」

「はあ……」

まだ意味の分からない要領だったが、そこに川田がやってきた。

「うちの店では本崎さんに渾名を呼ばれはじめたら、そのクルーは一人前になったって暗黙の了解なんだよ。なんて呼ばれたの？」

「え、えっと……」

本当に突然のことですぐに思い出せなかったが、

「確か……そうだ、さえみー、って言われました……」

「おお」

すると、川田と明子が声を揃えて驚いた顔をする。

「珍しいパターンかもね」

「うん、でも考えてみればさくらさんはフルネームで四音だから、無理に苗字や名前で区切るよ



りその方が口調込みが良かったのかも」

衝突な命名に盛り上がる美奈達に惠美は目を白黒させるが、すぐにもっと大きな変化に気づくこととなった。

「さえみー、今日はウーロン茶の原紙が少ない。ピークにランブ点灯しないよう注意しておいてくれ」

「さえみー、十書の清掃を頼む」

「さえみー、今日は二度、トレーパーバーの向きを間違えていたぞ。忙しいときはどやってしまいがちだから注意するんだ」

本時の言葉遣いが明らかに変わった。

これまでは惠美のことを「源佐さん」と呼び、何かを指示したり教えたたりする場合にも言葉遣いはですます調だったのだが、真美や千穂や川田と接するときと変わらぬ口調になったのだ。口調が変わったからといって指示や指導が雑になったわけでも高圧的になったわけでもない。そのことについてなんとなく明子に質問すると、

「あー、これは私の想像なんだけど」

と前置きして、考えを聞かせてくれた。

「飲食業ってやっぱり仕事キツイことが多いじゃん？ 研修期間中に辞めちゃう人もいるかもしれないし、もしそうになった場合にも悪い印象を残さないように、そうしてるんじゃないかって

思つても、健修は誰より丁寧な方が印象いいしね」

それはとても納得できる考案だった。

「確かに言われるまで気づかなかったけど、僕の時もそうだったな」

川田も自分の新人時代を思い出しているのか、明子の考えにしきりに頷いていた。

「何にしるこんなに早く薄名呼びになったの、私が知ってる限りちーちゃん以来だよ。研修明けの時給は普通より大分高めになってると思つたよ。これは償けたくないなあ」

明子が朗らかに笑ひ、恵美は思わずかしこまってしまう。

## ※

それ以後今日まで、半分以上のタルーは恵美のことを「さえみ」と呼ぶようになった。千穂や川田はそれまでの呼び方が口に馴染んでいたので「恵佐さん」と呼んでくる。

そして、

「すまない、誰か下にメンサブラシの手筒があるか見てくれないか。上のがぼさぼさになって使い物にならないんだ」

「はい、今見てみます。あったら持ってきていきますから」

「恵美……お、おう」

真美一人が、いつものように恵美を呼ぶようになった。

インカムからの複雑そうな返事に、なぜか恵美は自然と微笑んでしまう。

恵美から恵美に接する態度は店の外と中ではほとんど差は無くなったが、恵美は店内で真美に接する態度を意識してこれまでと変わらず先輩として立てるようにしていた。

真美はタルーの中でも随一のベテランなのに、入りたての恵美が外と変わらぬ態度で接すれば、眉を皺める者も出てくるだろう。

真美もそれは分かっているのか恵美の態度に特別文句を言ってくる様子は無いが、どこか複雑なものがあるようだ。

不思議なもので本当に入りたての頃は、真美を先輩として立てるのは演技半分のところが多々あり、それに勝じて先輩面をしてくる真美に苛立つこともあったのだが、あの夜以降なぜか恵美は自然に真美に接することができるようになっていた。

後輩として素直に接することができるようになった、と言えはいいだろうか。

「うふふふふ」

「ど、どうしたのアキちゃん」

真美の指示を受けて機械のメンテナンス用ブラシを渡しはじめた恵美の姿を見て、明子が奇妙な声で笑い出し、川田が軽く驚く。

「いやね、さえみーももう随分慣れてきたじゃない？」

明子は早速、恵美を呼びはじめた。

「なのに最近真実さんが逆になごちなくなってるのが何が面白くて」

「あー……時々よく分からないよね、あの二人。確かにここんとこ、建設さん弱の力が抜けてる感じはするけど……」

川田の目には、数日前までの恵美は何やら重い悩みを背負っているように見えていたが、ここ数日はそんな気負いは感じられなくなっていた。

「もともと真実さんとかーちゃんとかえみー、友達なんでしょう？ カワっち気づいてる？ ここんとこーちゃんがまた面白んだ」

「なんだろう、アキちゃんが凄く悪趣味なこと考えてる気がしてならない」

「カワっちには見抜かれるなー。いやね、この何日か真実さんとえみーが会話してるところを見るちーちゃんの顔がね、不思議な動きするのよ」

「不思議なっていうこと」

「まずね、まるで母親のような暖かい笑顔になって、それから科学者のように何かを疑問に思う顔になって、最後に幽霊を見た人みたいに顔が白くなるのよ」

「あー……」

川田は明子の話に大きく頷くと速達に連れ目になった。

「まーくんはいつか、月のない夜道で後ろから刺されるべき」

「だよねだよね！ あれってそういうことだよね！」

川田の分析に明子は我が意を得たりとウキウキしはじめるが、

「アキちゃん、カワっち、どうした、手が止まってるぞ」

そのときインカムから本時の声が聞こえて、二人は慌てて本来の仕事に戻ったのだった。

午前十時を待つことなく、フライングの電話が四本もかかってきて、囁々各駅直店の緊要は否が応にも高まっていた。

電話対応を任された惠美の最初の仕事は、PC入力の関係でどうしても通常メニューのデリバリー対応が十時からになってしまうことへのお詫びだった。

やがて時計が十時を差し、店内のオペレーションが朝メニューから通常メニューへとシフトしたその五分後。

「ウェブオーダー、入りました」

インカムから入った惠美の声に、思わず手の空いている従業員から拍手が起こった。

早速川田が、マダロナルドのデリバリー用に関与された黒い保温用デリバリーバッグを抱き、万が一に備えて肘と膝を保護するためのプロテクターを着用し、プラスチックのタダと紛失防止用のコードがついたスターターのキーを腰につけ、初のデリバリーオーダーに対応するため

に店を飛び出した。

そして雨田が出た五分後にはまたWebによるオーダーが一本。さらにはそのオーダーの直後、「お電話ありがとうございます。マドロナルド・タタ谷駅前店、渡辺がお伺いいたしますー」  
初めての電話によるオーダーが入ったのだ。

「恐れ入りますが、お客様の住所とお電話番号を……はい、かしこまりました、ご注文を確認いたします。ダブル鶏片バーガーのセットが……はい、只今のお時間ですと……」

通話中にも慣れた手つきで情報を入力した惠美は、一つ前のオーダーのデリバリー先の住所を確認してからインカムで指示を出す。

「同一方面。往復五丁目方面。前後五分以内です」

「まーくん、両方行けるか」

「了解しました」

惠美の情報から木崎が判断し真奥が了承する。

迅速に二つのオーダーが完成し、真奥が手順通りそれらを保温バッグに詰め込み、

「分かりそうですか？」

「ああ、この通なら大体分かると思う。お客様の番号は、これだな」

真奥は惠美に手渡された伝票を改めて一通り確認してから、壁に張り出されたデリバリーエリアの詳細地図を確認。

「ここが、五丁目ってことは伝票の11番があの急な坂の下あたりだな……21番は……よし、大丈夫だ。何かあったら連絡する」

「分かりました。いってらっしゃい」

「……………ああ」

真美はごく普通の笑顔と言葉で自分を送り出す恵美に激しく違和感を覚えながらも、仕事なのでそれ以上深くは考えずにデリバリー用のヘルメットを手に取り店を飛び出した。

なんとなく視界の端で、明子<sup>アカネ</sup>がこちらを生暖かい目で見ているのを感じたが、とりあえずそれも気にせずに店を出ると、真新しいホンダ・ジャイロルーファに跨った。

キーを差し込んでひねり、エンジンスイッチを入れると、エンテ・イスタで閉き慣れた高いエンジン音が響き渡る。

「行くぞ、レッド・デューラハン一号!!」

店のバイクに、ナンバーが若い方から一号二号三号と勝手に名前をつけて、真美は雄々しく健塚<sup>タケノカ</sup>・椿<sup>ツバキ</sup>ヶ谷の街へと繰り出したのだった。

「思ったより少ないですね」

「そうだな。フライイングの股のことを考えるともう少しあっても良さそうなのだが、まあ仕

方が無い」

重美と本崎は一階のカウンターで並びながら、普段通りの仕事に従事していた。

既にランチのピークは過ぎたが、現時点で入ったデリバリーオーダーの数はまだ十件だ。

減を辞しての導入で店舗全体が意気込みを見せていただけにこの数字は若干拍子抜けと言わざるを得ないが、

「初日にオペレーションが破綻しても困るし、今日は慣らし運転の日だと割り切ろう」

本崎はもう切り替えが済んでいるようだ。

「特に今日は快晴だ。スタートの日和としては悪くないが統計的に悪天候の日の方がオーダー数は増える傾向にある。シフトの人数が少ない雨の日が来たら、さっさとその日こそ我々の真価が試されることになるだろう」

絶好のスタートと日和なのに気合がいまいち空回りする結果、というのも皮肉だが、こればかりはどうしようもない。

そのとき、十件目のデリバリーに出ていた真央が、九件目のデリバリーに出た川田よりも早く店に帰ってきた。

「お帰るまーくん、お疲れ」

「お帰りなさい、何か備考は？」

「学生の集まりみたいで、誰が家の主たか分からなかったからお客さんについては言えること



は無いな。マンション前の道が狭いのに車通りが滅茶苦茶多かったから、書くならそっちかな。マンションの前につけるより、少し手前からエンジン切って歩道歩く方が安全だ。」

「分かりました。入力しておきます」

デリバリーを注文したお客様やデリバリー先の地理情報などについて、情報を共有するための全ての新規注文で所感を手入力することになっているため、恵美が「近隣の車両通行多し、駐車注意」の情報をP.C.に入力しようとした瞬間だった。

店の電話が鳴って、三人は顔を合わせる。

「お電話ありがとうございます。マダロナルド・ロンド・谷崎前店、渡佐がお伺いいたします」

恵美はP.C.の前に響けていって、慣れた様子で対応する。

「カワっち、また戻ってないんですか」

「エリアの一番端だったからな。あの道は細い道も多いし、一方通行も……」

恵美の横顔を見ながらそんなことを話していた真風と本崎だが、

「……っ」

恵美の息を呑む気配がして、二人は何事かと彼女を見ると、これまで予感等を伝えて書きそ  
うな笑顔の応対をしてきた恵美の顔が熱気っている。

「……遠にイタズラでも来ましたかね？」

「分かんが……」

今のところ悪戯電話や、行つてみたらデリバイラー先が存在しないといったトラブルは無いが、もしかしたらこれがトラブル第一号かと思つた矢先。

「……はい、かしこまりました。ビッグタマドロバーガーのセットをお二つに……」

恵美がマニエアル通りにオーダーを受けはじめて、真奥は首を傾げた。

考えてみれば、これまでコールセンターで働いていた恵美が、悪戯電話好きであそこまで動揺を見せるとも思えなかつた。ならば尚のこと、恵美の唐突な反応の理由が分からないが、とにかくにもオーダーは完了し、伝票を見るときなんと五千円近いオーダーが入っている。

「大丈夫か、さえみり。顔色が悪いが……」

本暗も、恵美の約度ふりに注意するよりも先に心配が立つたが、恵美は首を横に振る。

「なんでもありません。真奥さん、皆様×丁日方印です」

「あ、ああ」

なんでもない、と言う割には声も硬い。何か電話口で妙なことで言われたのだろうか。

恵美は少しだけ息を吐き出すと、真奥にだけ聞こえる声で呟く。

「本当になんでもないわ。大丈夫」

「恵美……」

「新角本暗さんに認めてもらつたんだもの、これくらいのこと、笑顔で乗り切れるようにならなきゃね。ごめんなさい、またまた未熟で」

「いや、それはいいんだが……ん？」

東美は真奥にオーダー伝票を手渡す。

真奥は反射的に届け先の住所と電話番号を確認し、目を見開いた。

住所を見て、東美の表情の理由も分かった。

「おいこれ」

「仕事よ」

何かを言い募ろうとする真奥を制し、首を振った。

「まーくん、できたぞ、行ってくれ」

「あ、は、はい」

本端の聲がかかって、真奥ははっと我に返る。

「気をつけて」

出る間際の東美の声は、一体何について言っていたのだろうか。

真奥はレッド・デュラハン一号に跨りヘルメットのバンドを頭で留めながら、厳しい顔でエンジンをつける。

十件目のデリバリー先は、ウィラ・ローザ世帯一〇一号室だったのだ。

さすがの真奥も出発時点で笑顔とはいかない。

「誰か電話かけてきやがったんだろうな」

惠美の表情からは察することはできなかったが、なんの要諦もなく考えれば、正式に居住している惠美の父、ノルド・ユスティーナだろうが、それなら惠美があとこゝまで顔を強張らせはしないだろう。

「ま、普通に考えてライラだろうな。やつてくれるぜ畜生」

確かにこれならば職場に押しかけたり、家に押しかけたりしたことにはならない。

真奥も惠美もマダロナルドの従業員である以上「お客様」のデリバリー注文には応えなければならぬ。

そしてヴィタ・ローザ館もまた、しっかり轄々谷駅前店のデリバリー範囲なのだ。

「つと、ここの方通行だったか」

青校徒夢か自転車でしか通らない道も、スターターで通ると全く違って見える。

青校の通勤ルートからはんの少しだけ遠回りしてやってきた『デリバリー先』は、日本で最も見慣れた場所であるはずなのに、妙にともよそしく見えた。

「魔王様？ どううされたのですか？」

そこに丁度、首屋が共用階段を下りてきて、スターターで現れた真奥を見て目を丸くしている。

「何かお忘れ物でも？」

「仕事だよ仕事」

真央は「お客様」の前に出るためにヘルメットを脱ぎながら背後に積まれたコンテナを檢查す。

「お客様は、一〇一号室の『代議様』だ」

「そ、それは……」

真央も、このオーダーに隠されているであろう意図にすぐ気づいた。

「おのれ天使め！ 電話一本で魔王様を呼びだてるなど不遜も甚だしい！」

「まあ、そりや確かに電話一本で呼び出されちゃいるけど、この制服着ている以上それは仕事だし、外で「お客様」の悪口は言えぬえからな。そこは察してくれ」

「で、では我々が加勢すれば……」

「だからバーガー屈けるのに加勢もタゾもねえよ。今日もラ何度もやった通り、お客様に商品をお届けして代金を受け取って帰る。ただそれだけだ。お前はお客様の予定に従って動いてくれ。ほら、店出てから十分近く経ってるんだ。お客様には出来たてを届けなきゃな」

「魔王様……くっ……やはり人間や天使の奴らなど、身近に置くのでは……魔王様、お氣をつけください。彼奴らどのような策を弄しているか分かりません！」

「だから俺はバーガー……もういいや。心配ならそこで見とけ。何もねえから。んんっ」

真央は激怒する真央を待機させ、睨みつけると一〇一号室の呼び鈴を躊躇いなく鳴らした。

「大変お待たせいたしました、マダロナルドデリバリーです」

事務的な調子を前面に押し出しそう呼びかけると、

「ああ、よく来てくれた」

予想に反して、出てきたのはノルド・ユスナイーナだった。

てつきりライラか、ガブリエルが出てくると思っただけに拍子抜けではあったが、

「大変お待ちいたしました。まずお飲み物から。それとこちらがビッグダマダローバーとが

デト用のセットです。お熱いのでお氣をつけください」

「……連う人が来るか注文を断られると思ったよ」

「ご注文の要件を満たしておられるのに、それを断るなどということはありません」

デラバラー先でお客様と二、三篇の雑談を交わすのも仕事の範囲内だ。

初対面ときには、ノルドの日本語はアシエスと似たり寄つたりのカタコトだったことを思うと、ほとんど違和感のないレベルにまでなっている。

それが惠美と再会してより多くの日本語に接するようになったからなのか、ライラと再会したことで何がしか裏技的な上達法を授けられたからなのかは定かではない。

真美はそんなことを思いつながら、もしかしたらノルド以外に誰かいるのかと聞かれたドアの向こうをちらりと盗み見るが、一〇一号室の中は薄暗く、中の様子を察することはできなかった。

「……以上で、間違いはございませんか」

「ああ、ありがとうございます」

「恐れ入ります。ではお会計、四千五百三十円頂戴いたします」

差し出された五千円札にも特製不審な点は無。真奥はボーチの中から釣り銭を取り出し、数えてからレシートと注文伝票と典に差し出した。

「ありがとうございます。またよろしくお願いたします」

「ああ」

最後まで、今日の全てのデリバリー先で廻ったことと大差ないやり取りが続き、そして終わろうとした。

「ああ、そうだ」

聞いた保溫バッドを手早く纏めて立ち去ろうとしたそのときだった。

「真奥さん」

「……………はい？」

真奥は顔だけ振り返って返事をした。

そこには変わらずノルドの穏やかな顔があった。

「このチラシについて、一つ聞きたいことがあるんだが」

「……………はい、なんででしょう」

視界の端で真奥がハラハラしながらこちらを見ていることには気づいていたが、真奥はもう

一度ノルドに向き直ると、ノルドは意外なことを尋ねてきた。

「ここに従業員募集中、とあるが、まだ定員に空きはあるかい」

「……………」

真央は眉を皺めた。

「一体どういうつもりなのだろう。まさかノルドが、マダロナルド轄下各駅前店のアルバイトに応募するつもりなのだろうか。」

「私は新聞配達の仕事をしてやっていた。地域の地理を覚える自信はある。雇用免許も、もうすぐ取れる見込みだ。どうだろうか」

そういえば、ノルドとの最初の出会いには運転免許センターへ向かうバスの中だった、と思いつきながら、真央は慎重に言葉を選ぶ。

「従業員の募集はまだ受けつけているはずですが、まずは店にお問い合わせください。店長の木崎がお話を伺います」

「なるほど。分かったよ、引き留めてすまないね」

「では、失礼します。ありがとうございます」

ノルドは今度こそ話を終わらせて、小さく会釈をしてからドアを閉じた。

「仕事中」も周囲への警戒は怠らなかったが、ライラやガブリエルどころか、志保や天摩の気配も感じなかった。



「ま、魔王様」

「貴屋が同要入れずに駆け寄ってくるが、」

「こういうのを、氣につままれたような、つていうんだらうな。何も無かったよ」

「ですが最後、アルバイト募集に応募するような口ぶりでした」

「本当に応募してきたら面倒なことにはなるだろうが……正直そこは本崎さんの判断もあるだろうし、俺が口を出していい問題じゃ……いや、まあ『仕事』にかこつけば俺が嫌つけないってことを狙ったのかもしれないねえが、俺からあんな事務的な話を引き出してどうしたいのかって聞かれるとな」

ノルドがもしマダロナルド嬢が客販前にアルバイトクルーとして応募してきたとして、心配なのは惣美との関係だが、ライラとのことはともかくノルドを父として慕う惣美の気持ちにはいささかも変わり無く、むしろ会話の糸口を掴むきっかけになるかもしれない。

だがいずれにしても惣美には関係の無い話だし、現状免許証を持っていないならノルドが即時応募してきたとしても、採用されない可能性も十分にある。

「ま、いいや、今の俺は仕事だ」

「魔王様、なんなら私が締め上げて問いつめても……」

「やめろ。店子同士でトラブル起こしたら、すぐに大家さんが焼んでくるぞ」

「……くっ」

産屋は悔しげに齒噛みするが、窮めている真裏も奥曲にニラが挟まったような言い知れの違和感を覚えてはいた。

「何か、少しずつ型にハマられてる気がする」

「しかし魔王様、これまで通り、奴らが何を仕掛けてきても知らぬ存ぜぬを避せばそれで良いのではありませんか？ 我らは奴らに利する行動を取らなければそれでいいのです」

「ま、その通りなんだけども」

真裏は頷くと、レッド・デューラハン一号に戻ってヘルメットをかぶり直した。

「なんならお前も、注文するか？ 俺の電話使えばデリバリーオーダー扱いになるぜ」

「申し訳ありませんが、明日の昼食まで既に献立が整っておりまして」

「ん、分かった。だがお前、この前みたいに忠実に台所に潜入されるようなことはやめろよ。

心臓に悪い」

真裏はあの日の夜のことを思い出して遠い目になる。

「面目次第もございせん。我々が寝静まった後、まさかあのような凶行に及ぶとは。エミリアに我が家の茶を触れられるなど、この産屋一生の不覚……」

「凶行……いや、まあ確かに形は悪かったが、味は普通だったからな。毒が入ってたわけでもないし」

「だから不気味なのですよ。エミリアが魔王様のために握り飯などと、どのような魂胆がある

のかまるで想像できません」

「深刻なエラーでも出たんだろ」

真真はあの晩のことを誰にも話していないし、東美も話してはいないだろう。

「ま、あの日以来なんのトラブルも無いんだ。今日のこれも、ノルドがたまたまファーストフードを食いたくなっただって思っただけにすぎない。じゃ、俺そろそろ戻らなきゃ」

「あ、はい、かしこまりました、お引き止めして申し訳ありません。お気をつけて」

声屋の整い礼に送られて、真真はヴィタ・ローザ控室を後にした。

店への道すがら、真真はこの一週間のことを思い出す。

実際、東美と千穂が地下鉄で何者かに襲われて以来、目立ったトラブルらしいトラブルは起こっていないのだ。

東美の「深刻なエラー」は真真にとっては大変な事故だが、幸いにしてアラス・ラムスやアシエスにあの晩のことがバレた様子も無い。

エメラダは従来通り東美と一緒に永和町にいるし、天祐と志波も警視庁の動きを見せない。

ライラも地下鉄事故の日のことがよほど堪えたか、東美の「深刻なエラー」の二日後くらいに一度アパートにやってきたのを見たきりで、それ以後姿を見ていない。

そのときはまだ髪色は紫色のままだったが、真真はそうだった理由や、そもそもライラがどこに住んでいるのかなどとも知りたいとは思わなかった。

「平穩無事な毎日が一番だ」

真央はスターターのエンジン音に絡れてもう味く。

やがて店に戻った真央は、真美と、出勤してきたばかりらしい千穂の心配そうな表情に迎えられた。

「真央さん」

千穂が駆け寄ってきて、真央の顔を見上げる。

「大丈夫でしたか？ 渡佐さんから、一〇一号室にデリバリーに行つたって聞いて……」

「お父さんはなんの用だったの」

真美も深刻な顔で尋ねてくる。

「いや、それが」

と、真央はヴィラ・ローザ建設での出来事をかいつまんで話す。

「つまり、ノルドにバイト募集のことを聞かれたこと以外は、何も変わったことは無かつたんだ。俺としては、ライラとガブリエルに包囲されて帰れぬくらいのことでも覚悟したんだがな。

真美、お前が受けた電話、ノルドからだつたんだよね？」

「……ええ」

「その前に顔つき悪しかったよな。俺、お前の顔が凄かつたから警戒してつたんだが」

「顔が凄いとは何よ顔が凄いと」

恵美は真奥の言い方に文句を言ってから、首を傾げる。

「私は、一人で食べるには注文量が多すぎる気がするから、絶対後ろにライラがいるんだと思つてたの。それでつい硬い口調になっちゃったんだけど……」

「確かに硬い量ではあつたけどな」

四千五百三十円という金額は、マダロナルドの客単価としては際立って高い。

ひと頃木崎の興を賣うために毎日三食買つていったサリエルですら、一度の注文で三千円が安いところだつた。

「それが全部セットでも、七人分くらいにはなりますよね」

デリバリーでの請求金額には配達料が含まれるため、実質ノルドの注文総額は四千二百円程度ということになる。

「まさかアシエスじゃあるまいし、ノルド一人でこれ全部食うのかな」

「アシエスちゃんと一緒に飯食べる気かもしれないよ」

「どうだろうな。アシエスが天使の出入りする可能性のあるあの部屋に入り浸ることがあるのかどうか」

「でも、今はカブリエルと一緒に志波さんのお宅にいるんでしょ？」

「そりや大家さんの人徳つつーか、力技っていうか……そういえばこの前、鈴木梨香がすごい勢いでアシエスに晩飯タカられてたけど、何か聞いてるか」

「何それ？ 私知らないわよ!?」

恵美は薬書の名を聞いて顔を強張らせた。

「アシエスのハンバーガー製品四十個とドリント四つの注文分、あいつが金出してたぜ」

四十個という数に、千穂も恵美も目を丸くしている。

「後で謝っておかなきゃ……これ以上エンテ・イスラのゴタゴタに薬書を読み込みたくなかったのに」

「それは今更だし、バーガー四十個がエンテ・イスラのゴタゴタから来る被害なのかは議論の余地があるな」

「あはは、でも、アシエスちゃんさすがですね。四十個とか想像できない」

アシエスの話題が出て、ようやく固い雰囲気（こきけい）がほどけはじめ。

「ま、結局警戒してたようなことはなんにも無かったんだ。仕事に戻ろうぜ」

「はい」

「そうね……つと」

言うが早い、恵美のインカムに電話のコール音（コールおん）が鳴り響き、恵美は慌ててデジバレーダー（デジバレーダー）タ入力用のPCまで駆けつけてゆく。

「お待たせいたしました。マダロナルドはたが……わっ！」

電話の口上を途中まで述べた恵美が何かに驚いて身を凍らせる。

「……………」

そして、苦虫を噛み潰したような顔を真美と千穂の方に向けてから、種々という感じでインカムから流れてくる声に注意を戻した。

「……はい、はい、こちらこそお世話になっております、はい……」

「『お世話話』になっております?」

千穂は、真美の電話の相手が誰なのか見当もつかず真美と顔を見合わせる。

「ええ、確かに……ですがその、正直に申し上げましてこの距離では配達手数料が無駄になるかと懸念しますので直接ご来店いただいた方が、あ、構わないと……かしこまりま……え、デリバリースタッフの〆指名ですか。あの、当店は指名制を取っておりますもので、確認のために少々お待ちいただいてよろしいでしょうか、失礼いたします」

真美はこの上なくげんなりした顔で通話を保留にし、インカムを店内無線に切り替えた。

「木崎さん、向かいのセンタッキーの笠江店長からお電話です」

「え」

真美と千穂は、お互いインカムから聞こえてくる真美の声に声を揃えた。噂をすれば影が差すにも程がある。

「……笠江が、なんだ?」

真美がデリバリーに出ていたので二階のカフェにいた木崎の、困惑した声が返ってくる。

「その……デリバリーをしてほしいと」

「正気か」

本崎の呆れ果てた声に真奥や千柳のみならず、他のタルーも心の中で全然的に同意するが、さうして歩いて十秒かからない場所にある向かいの同業他社店も、理屈の上では間違いないデリバリー圏内にあるお客様なのである。

「それで？ 向こうがこの距離で配達手数料を支払ってくれるというなら何も問題は無いが、さえみーがいちいちそんなことを聞いてくるということは、まさか私に配達してほしいとでも言ってきたか？」

「……そうです」

「……………はあああああああああ」

本崎の大きなため息に、タルー全員が悶噓を存んで聞き入った。

「仕方あるまい。新業態開始の挨拶とでも思えばいい。向こうも同じ商店街に属する以上、顧客となり得る相手だ。……普通ならまずあり得ないがな」

そりやそうだろう。

「堀江に……いや、お客様に私が何うとお伝えしてくれ。それとまーくんは帰ってきてるか」

「あ、はい！」

突然呼びかけられて真奥はつい直接二階に向かつて大声で応答してしまう。



「よし、ちーちゃんと一緒に二階を覗む」

「三分かりました」

真真と千穂と恵美の遠事が唱和した。

「大変お待たせいたしました。木崎が伺いますので、ご注文を……………あ、あの、恐れ入りますが、木崎一人で運ぶことのできる量でお願いいたします」

恐らく電話の向こうで、サリエルは狂喜乱舞しているのだろう。

恵美が電話で頷きながら入力していくメニューの数と合計金額は加速度的に増えていた。

「あいつは私の肩をバーガーとコーラで潰す気か」

二階から下りてきた木崎は、伝票を見て噴き出した。

結局一万円に届こうかというオーダーが入力され、この近距離でお届け予定時刻は二十分後とはじき出されている。

「……………まあ、一人であれだけ食う奴もいるんだから、何もおかしいことはないわな」

「サリエルさん、また変な太り方しなければいいんですけどね……………この量、本商に一人で食べらんですかね」

「いくらなんでもセンタッキーの従業員にマダロナルドのセットを強制的に食わせるようなマホはしないだろ。バワハワにしても斜め上すぎる」

どこまでも平常運転のサリエルの行動が、このときばかりは真真の心にわずかながら余剰を

与えてくれたのだった。

マダロナルド・雑貨店・谷崎商店のデリバリー業務開始日は、極めて平和に終わつたと言つていいだろう。

デリバリー件数は三十件。そのうち電話による注文がノルドやサリエルの分も含め十二件もあつたことを考えれば、木崎の主張は正しかったことになる。

デリバリーに出た場合の平均往復時間は約二十分であり、向こう一週間はどの初日のデータを基にオペレーションを構築していくことになるだろう。

一週間のうちに荒太の日や、初日の業務で中心的な役割を果たした真奥、川田、恵美が不在のシフトの日などが、次の開門として立ち回れることになることになると予測される。

「あー……しっかしあれだな、やっぱり慣れないことの連続だから、疲れたな」

「そうね。私も久々の電話対応だったから必要以上に緊張しちゃって肩凝ったわ」

閉店業務を終えた真奥と恵美は、揃って静かな商店街の真ん中で伸びをする。

「この時間まであんなに人がいたのも久しぶりだったからな。いやーでもやっぱり、コウタいなくなのはキツイなあ」

「コウタって中山さんのこと？ アルバイト辞めるの？」

千穂は高校生なので夜十時で退店したが、デリバリー初日の今日だけは、オーダーストップである閉店三十分前の午後十一時半まで、水崎、真実、用田、明子、恵美、そして近々就職活動をするために退店が決まっている中山孝太郎がシフトに入っていた。

「就活だよ。前途ある若者に就職せずにバイトやっつてろって訳にはいかねえしな。とはいえ俺が入った頃から一緒にやっってきた仲間だし、やっぱシフトに入れば頼りになったから皆コウタが抜けるのは痛えと思ってるはずだ」

「じゃあ用田さんもなの？ 確か同じ年だって聞いたわ」

「カワつちは実業を継ぐから在学中は辞めない。俺は俺の道もあると思っただけだな……さてと、お前も気をつけて帰れよ……って」

真実がデユラハン式号を駐輪場から引き出し、躊躇うとすると、

「なんだよ」

恵美がトートバッグの端を掴んできて、真実は顔を壁めて立ち止まった。

「私もベルの部屋にアラス・ラムスを運ぶに行かなきゃいけないんだから、一緒に帰らまじょうよ」

「……………なんだよ、深刻なエラーの再発か？」

全力で洗面を作ってみせるが、恵美の方はあまり堪えていないようだ。

「二人で帰れば、アラス・ラムスも済むわよ」

一体なんだというのだこの間から。

態度が軟化したなどとは生易しい話ではない。

あの恐怖の晩以来、恵美はまるで人が変わったように、真奥に色々な感情を見せるようになっていた。

この数日は、これまでのような高圧的な態度をほとんど見た記憶が無い。

朝方にアラス・ラムスを鈴乃に預けるためにアパートに現れたときも、極めて明るい表情と態度で魔王軍一同大いに困惑したものだ。

千穂は恵美のこの変化に気づいているのだろうか。

恵美と真奥に仲良くしてはしいと常々願っている千穂にとっては、恵美の歩み寄りには願ったり叶ったりだろう。

しかし真奥にしてみれば、恵美から歩み寄ってくる理由もきっかけも思い当たらないせいで、エンタ・イスラで鈴乃が妙な歩み寄りを見せたときのように、自分から恵美に譲歩しようとはどうしても思えないのだ。

大体にして細かい理由は抜きに、真奥と一緒に燃りたがる恵美など恵美ではない。

「もう寝てんだろこんな時間……ん？」

真奥はげんなりしながら携帯電話を手に取ると、青面ディスプレイがメールの着信を知らせていることに気づいた。

「ちーちゃんど……誰だ？　これ」

携帯電話に登録されていないメールアドレスからのメールだった。

文面はただ一言、

「真っ直ぐ帰ってきてくるように」

とだけある。

「おい、東美、このメール、お前に同時送信されてる」

「分かってる。今見たわ」

東美も険しい顔で頷いた。

「心当たりは？」

「分からねえ。分からねえが……」

真実は、その登録されていないメールアドレスをどこかで見たことがあるような気がするのだ。

もう大分前のことになるが、そのときもそのメールは千穂のメールと並んで送られてきたようだな……。

「まあ、俺とお前にこんなメール送ってくる奴なんか、そう多くはねえな」

「そうね」

「……大丈夫か？」

後援するような顔でスリムフォンを腕にしよう恵美に尋ねる真美。  
 十中八九アパートで待ち構えているであろうメールの送り主と対峙するだけの余裕が恵美にあるのかどうかを心配したのだが、

「大丈夫。もう、あんな無様な姿は見せないわ」

若干強がっているような気配はするが、それでも恵美は気丈に頷いた。

「フザけた展開が続ってるようなら、今度こそ容赦しないかもしれないけどわ」

「あんな無理すんなよ」

「あら、優しいこと言ってくれるわね。悪い相手には言わないんじゃないやなかったの」

「揚げ足取んな。またお前にヘタレられたら面倒だから言ってるんだよ」

はね返ってくる気の強い響きに、真美は口の端を片方だけ上げて応じた。

「誰だか知らねえが、余裕がまして帰ってやるとするかな。恵美、お前の誘いに乗ってやるよ。」

二人でゆっくり歩いて帰ろうぜ」

「いいわね。ついでに途中のコンビニで、おでんでも買ってみる？」

おおよそ魔王と勇者らしくない、いや、真美と恵美らしくない会話をしながら、二人はヴィ

ラ・ローザ後援会へ向かって歩きはじめた。

ちらちらと鳴るデユラハン式号のチューンの音を聞きながら、恵美は顔を上げる。

「そういえば、千穂ちゃんの方のメールはなんだったの。私には来てなかったけど」

「はば同じ内容だよ」

「え？」

怪訝そうに尋ねる恵美を見ずに、真つ直ぐ前を見たまま真美は言った。

「アバートで待つてゐるそうだ」

「おいおい、そうそうたるお出迎えだな」

ヴィラ・ローザ營塚に戻った真美と恵美を正面の庭で迎えたのは千穂、真屋、鈴乃、エメラダに天祥にアシエスに、アシエスに抱っこされたアラス・ラムス、ガブリエル、ノルド、そして志波。

漆原一人が、志波を怒れているのかアバートの敷地の隅に逃げているが、ヴィラ・ローザ營塚に關わるはば全ての存在がここに集結していることになる。

「ちーちゃん、大丈夫なのかよこんな時間に」

「佐々木さんは私がお呼びしましたの」

「……大家さんが？」

志波が何故、わざわざ千穂を呼び出すのだろうか。

「家の方は大丈夫だよ。僕がミキティの指導でちゃんと佐々木千穂が怒られないようにしてき

「だから」

「後でちーちゃんの両親に何かあったら、俺がお前を殺しにくぞガブリエル」

どこまでもあっけらかんとするガブリエルを、天幕のそばにいるアシエスが睨みつけている。

「あのメールはあんたか、大家さん」

「ええ、蓮佐さんにも同じメールをお送りしたのですけど」

「俺はあんたにメールアドレスを教えた記憶も無いし、それに」

真央は目を細めて志波を睨む。

「あんた、ずっと前にも俺に一回メール送ってきてるだろ」

「ええ」

志波はあっさりと認めた。

まだ徳原が監獄におらず、千穂も真選連の真実を知らなかった頃、謎の警告メールが真央

の許に届いたことがあった。

それは、これからまだまたトラブルが続発するという旨の内容だったのだが……

「佐々木千穂さんは、携帯電話を鎌倉に現金送金を受けるそうです、まあ似たようなことをし

たと思ってくださいまし。あの頃はまだ他のセフィラ達と連絡を取っても対応する余裕が無く

て、私一人で日本全体を見渡す必要がありましたので、やむを得ずあのような方法を取らせて

いたいただきましたの」



「俺らをエンテ・イストラから来たと知って、な」

真奥は小さくため息をついた。

それほど以前から、志波は真奥や真美やその背後にあるものを追いかけて暗躍あんぐやくしていたというのか。

「それで、なんでまたこんな豪勢なお出迎えがいるんだ」

「事情が変わってね」

応えたのは天祿だった。

「私もミヤティ伯爵伯爵さんも、一方的に真奥君の肩を持つわけにいかなくなっただんだ」

「どういうことだ」

「中に入れば分かるよ」

天祿が指差す先は、一〇一号室。

「真奥君と遊佐ちゃん、二人には、彼女の話聞いてもらわなきゃならない」

「ヤなことだ、つて言っただろ？」

「私とミヤティ伯爵さん、それ以外の可能な限りの一族を集めて、地球にトラブルを持ち込み  
 そうな君達を容赦なく全力排除するね。エンテ・イストラに叩き返してやるよ」

天祿の声色は本気だった。

「逆に、今夜眠いのをちよっと我慢して一〇一号室に入って遊達二人が彼女の話聞いてくれ

れば、私達は何もしないよ。まあ賃貸契約の更新日だとも思つて」

「勝手に言つてくれるぞ」

真奥は顔をひきつらせながら肩を震めた。

「聞くだけでいいんだな」

「いいよ。ね、怕母さん」

「ええ」

天秤に振られて、志波は頷いた。

「彼女も彼女なりに世界を背負おうとしたのです。だから、今度は閉居座よないと思ひますわ」

「重荷背負つて道間違えてりや世話ねえよ」

真奥は瞳にとろなくそうはやくと、傍らに立つ恵美の背を叩いた。

「行くぞ」

「……………ええ」

恵美も、顔を強張らせてこそいるが、そこには漆原の病室で見た地うきは無い。

「真奥さん……遠佐さん……」

「魔王様、お気をつけて……」

「お願いだから僕が働かなきゃならないようなことにしないでね」

「魔王、エミリア、意に染まぬことがわづかでもあるなら、決して耳を貸すなよ」

千穂が、西原が、漆原が、鈴乃が、それぞれに声をかけてくる。

「ばば……」

鈴乃に抱かれているアラス・ラムスが最後に、奇妙なことを言った。

「めって……しないでね？」

アラス・ラムスは何を恐れているのだろう。

既に恵美がライラに対して強硬な態度を取っていることだけは理解しているはずだが、そういうことも違うようだ。

とにかく、この扉を開ければ全て分かるのだろうか。

真美は疑問も見た一〇一号室のドアノブに手をかけ握ると、中から灯りが漏れているのに気づく。

そして、

「なっ……」

「こ、これって……」

そこには真美と恵美が予想だにしない光景があった。

「こんな夜中に呼びだしてごめんなさい。上がってもらえるかしら」

真美も恵美も、ライラの誘いには従わずに玄関の上がり口で突っ立ったまま果敢にとられていた。

「一〇一号室でライラが待ち構えていることまでは予想できた。彼女は未だ髪色が紫色のままだが、それもいい。」

問題はライラの傍らで布団に寝かされている少年だ。

黒い髪に一房の赤を束らせた少年の顔を、真真も東美も知っていた。

だが記憶と大きく違ふことがある。

肌の色が、くすんだ褐色になっているのだ。

日焼けや生まれつきの肌というのではない。まるで長いこと水に晒した鉄のように、良くない錆びとも言ふべきものが、体を覆っているようにも見える。

唯一記憶にあるその少年の肌の色と一致するのは、布団の外に出された左腕だけ。

「イルオーン……!？」

真真は布団で眠る少年の名を呼んだ。

セフィラ・デブラーの化身イルオーン。

初めて出会ったときにはマレブランケの頭領格に率いられて日本に現れ、その後はずるがダエルとカマエルに使役されているのを確認している。

しかしエフサハーンでの真真と天使達の戦いにはその感はずく、天使達を倒した後、行方は音として知れなかった。

「天神さんと志波さんが、見つけてきてくれたの。今日の昼のことよ」

ライラの言葉に、真奥ははっとして一〇一号室をぐるりと見回すと、部屋の端に長閑真奥が  
 届けたマダロナルドデリバリー（マダロナルドデリバリー）の空の紙袋が纏まって捨てられているゴミ袋を発見する。

「そうなの、あの人にしてもらった注文は、この子に食べさせるためよ」

「相当貧乏（ヒナシ）してるように見えるが、そんな容態の奴にファーストフード食わせたのか」

真奥の言葉に非難の色が混じるのは仕方ないが、ライラは特に表情を動かさなかった。

「アシエスとアラス・ラムスが好んで食べてるそうね。実際に二人にも進められて、セフィラの子達が言うなら、大丈夫だと思っただの」

「にしたって大量に食って体にいいもんじゃ……」

「それに、別に貧乏してるわけじゃないわ。天幕さんたちと一悶着あつて確かに体力を失つて  
 るけど、今苦しようにしてるのは、どちらかというと食べ過ぎ。あれだけの量、この子一人で  
 べロりだもの」

「……」

これにはさすがに、ノルドの注文を把握している真奥と東美は同時に声を上げた。

「セフィラの奴らは、皆そんな大食いなのか？ まさかアラス・ラムスもいつか……」

「そ、そんなことあるはずないでしょ！ それに今はそれはどうでもいいわ！ 用件は、用件  
 は何より！」

呆れる真奥を遡り、アラス・ラムスの将来を患い動揺しつつも声を上げたのは東美だった。

「私達は明日も仕事なの。用件だけ簡潔に話して」

恵美のきつい声色でライラが揺れるかと思いきや、ライラは必死の固持ちで鎮いた。

「私の用を話す上で、この子のことには触れておかなきゃいけないわ……エミリア」

少しだけ娘を呼ぶ声が頼りなさげに上塗り。

「気安く呼ばないで」

娘はその揺らぎを敏感に感じ取って母の言葉を弾き飛ばす。

ライラは少しだけ寂しげにため息をついてから、イルオーンの髪をなでた。

「あなたと、佐々木千穂さんの乗った自動車線を襲った黒い影の正体は、この子よ」

「……」

恵美と恵美は同時に息を呑んだ。

「サタン。あなたがエフサハーンで解決した騒動のとき、この子は逃げたの。アシエス・アー

ラと事を構えたくなくてね。天使に付き従うことを決めたのはこの子自身だけど、セフィラの

同僚と戦うことになるのだけは耐えられなかった。だから逃げたの。この子のことを知る人が

わずかでもいる、この日本に」

「そりゃ気の毒なこったな。大家さん達の網には引っかからなかったのか」

「志渡さんも、イルオーンが来たことはすぐに感知してたわ。でも、そのとき既にイルオーン

は奮闘を始めていて中々尻尾を掴ませなかった。エミリア、あなたが見た黒い影は、守るべき

世界を見失ってセフィラが暴走した筈よ。デブラーが同等の鉄の性質が大きく現れた結果、進化形態・性質すら強き過す超硬質の体を手に入ってしまった。意識が鉄の性質に浸食されていく中で、最も近くにいたセフィラの反応に引き寄せられたのよ」

「……それで、そんなアメコもみたいな子供が、あなたの話にどう関係するの？」

「分からない？」

ライラは悲しげな顔で言った。

「アラス・ラムスもアシエスも、イルオーンのようになってしまふ恐れがあるの」

エンテ・イスラのセフィラの状況を知っている一人なら納得してしまふそうになる話の流れだが、真実はごまかされなかった。

「俺も悪魔も、ヤドリギとかいうやつになってるんだ。それでもアラス・ラムスとアシエスは、イルオーンみたいになつたりするのさ」

「確かにヤドリギを選んだセフィラの存在は安定するわ。でもヤドリギは永遠の機能ではない。ヤドリギが死んだりすれば当然あの子達はまた一人。本人達の意志によつてヤドリギから離れてしまふことだってある。そうなれば、イルオーンのようになくなってしまふ可能性はゼロじゃない。まだこの子達の世界に、この子達を導く『ダクト』は生まれていないの」

「資料を単語が出てきたが、真実はそれをあえて無視して偽み掛ける。」

「……それで、なんだよ。アラス・ラムス達をこんな姿にしたくなけりゃ、経緯の言うことに

「覚えてるか？」

真実の執着的な言葉に、ライラは首を横に振った。

「この前の私は、言葉遣いこそ違うけど、中身は全く同じことを言おうとしてももの見事になた連にフラれたのよ。サタン、エミリア。あなた達のイエソドに対する愛を利用しようとしたの。それが当たり前だと思ってたの」

ライラは壁の上で改めて姿勢を止すと、真っ直ぐ二人の目を見て言った。

「だから、今日は話を聞いてもらいたいんじゃない。あなた達に『仕事』を頼みたいの」

「仕事？」

ライラは頷き、予め用意していたらしきA4サイズの紙束を提示した。

「事業計画の概要、報酬に関する規定、それに契約書の準備稿よ」

真実と恵美は、今度こそ顔を見合わせた。

日の雨で鬱陶とした顔で正座するライラには、あの日瀬原の病室で見せた甘ったれた容顔（ようがん）は微塵（ちり）も無かった。

「依頼したいことは一つ。私と一緒に、エンテ・イスラをあるべき姿に戻してほしい。その引き換えとして相応の報酬を支払うことと、あなた達の現状を頻（しばしば）なわなないことを約束するわ」

「な、何を言ひ出すの」

「もちろん、今日この場で承諾してもらわなくていい。ううん、むしろ承諾しないで、あな



「た達が納得できるまで徹底的に話し合って条件をすり合わせて行きたいわ。もちろん最後まで条件に納得できなければこの話は無かったことにしてもらって構わない」

ライラの一言一言に込められた覚悟が、以前とは段違いであることは二人にも分かる。

「……………それで、私達が拒否したら、どうするつもりなの」

恵美の震える声に、ライラは首を横に振った。

「あなた達が引き受けないというのなら、そのあとのことは気にしないで。こう言々と暗喩に聞こえてしまうかもしれないけれども、結ばないと決めた契約のその後を追うほど、あなた達は暇ではないでしょう？」

「なるほど、確かにな」

動揺する恵美とは違い、真実は無言のまま黙々と、閉じた文庫の向こう側を振り廻った。

「ガブリエルの入れ知恵か？」

「いいえ」

ライラは首を横に振った。

「あなたよ、サタン」

「あ？」

「え？」

ライラの言葉に真実のみならず、恵美も目を丸く開いた。

「私、地下鉄のトンネルの中からの記憶が無い。気がついたら、ここにいたの。髪の色を見て驚いたけど、エメラダさんからサタンが私を治してくれたって聞いたわ」

「……ああ」

「目が覚めたのは夜中だった。そのときにはもう傷の痛みは無かったわ。喉が渇いて水を飲みたくて起き上がったなら……サタン、あなたの声が聞こえた」

真央はがっくりと項垂れる。

「どっからだよ……」

「鉄の話からよ」

真央は今度は頭を抱えた。

「私は、自分がしたことがどれだけ悪かで浅はかだったか、あのときまで分かってなかった。あなた達はもう私が知っている頃とは違う、立派な大人なのに、どこかで自分が長く生きているのいいことに、針等に見えていなかったのかもしれない」

ライラは声と唇を震わせても、目をそらすことは決してしなかった。

「もし話を聞いてくれるのなら、条件は可能な限りあなた達の望みに添うようにするわ。サタンの世界征服を手伝うわけには行かないけど、それ以外の常識的なことなら」

「常識って、何よ」

「決まってるわ」

東美の問いに、ライラはなんでもないのでように答えた。

「私の命までなら、対応できる」

東美は息を呑んだ。

「エミリア、私はあなたに対して一人の人間としても、母親としても、決して許されないことをした。きつとあなたが人生の中で嘗めた辛酸は、私一人を救したところで収まるものではないのかもしれない。それでも、もしあなたが私の命を欲しいというなら、従うわ」

「っ？」

ライラの顔から命を差し出す、と言いつけたことに東美は激しく動揺したが、その瞬間真実にもまた背を軽く叩かれて、はっとする。顔を上げると真実の淡い顔がそこにあり、

「真に受けてんじやねえよバカ」

と詰められた。

「諦めもいいとこだな。有り得ない仮定で話を大げさにするんじやねえ」

「でも、本気よ。それくらい覚悟があるって言いたかったの。もしもが本当にあなた達が私の命を欲しいっていうときには、万難を排して約束は守るわ」

誠意あふれることを言うが、裏を返せばそれ以下の「常識的な報酬」はかなり懸念を利かせるという譲歩の言葉でもある。

「そこまでしてどうして……」

「エンテ・イスラを、あの美しい世界に住む人達の未来を守りたいから、それが半分」  
 ライラの答えは簡潔だった。

「残り半分は、罪を犯した者達を救くためよ」

誰のことを指しているのか、真実<sup>マコト</sup>は特に聞わなかった。

その代わり、雪げた。

「いいだろう」

「え？」

「俺は、よりあえず交際の席に着いてやる」

「本当？ サタン！」

「魔王」 どういうつもり？」

ライラは喜色を浮かべて腰を浮かし、恵美<sup>けいみ</sup>は差支<sup>さしつか</sup>えるような声を上げながら真実の胸章を胸<sup>むね</sup>もうとするが、

「だが交際の席に着く前に、言っておくことがある……おい恵美、敗せ」

「どういうつもりかって聞いているの」

「だからそれを話すから敗せ。おい、服が伸びる」

恵美は口をへの字に曲げて、真実の言う通り手を放した。

それでも尚<sup>なほ</sup>、その目は真実<sup>マコト</sup>に失望したような色を帯びていた。

「……結局あなたは、お金がもらえればそれでいいの？　私の気持ちを……あんなに分かってくれてたのに……」

「報酬は大事だ。内容についてはこれから条件をすり合わせるんだろ？」

「それは、ええ……」

ライラはむしろ、真美の態度が硬化しつつあることを気にしているようで、真美が何を言うのか分からずに目を瞬かせている。

「それに、真美お前、何勘違いしてるか知らんが、別に俺はお前に味方してああ言ったわけじゃない。単純にこいつらの今までのやり口が気に入らなかつたから文句言っただけだ」

「っ……………」

真美は息を呑み、ショックを受けたことを隠しきれない顔になる。

「さ、サタン……………あの、あなたとエミリアの仲が悪いことは知ってるけど、できればあなた達二人一緒に力を貸してほしいの……………だから、あまりその」

ライラはここで初めて慌てたように真美と真美の間をとるなすようなことを言い出すが、

「お前もそこまで分かってて、なんで最後で勘違いしてんだ、ライラ」

真美はライラの言葉も通った。

「俺とこいつは敵同士だ」

「今更改まって言われることじゃないわよ！」

ライラに話しているのになぜか恵美が突っかかってくるが、真央はわざとらしく耳に指を突っ込んで恵美を無視する体制を取る。

「だから、俺を口説き落としたからって、恵美もおまけでついてくると思ったら大間違いだ」  
 「……………」

母子は異口同音にそう言つて、目を瞬かせた。

だが真央は二人の困惑には構わず言葉を続ける。

「俺が」お前との交渉の席に着く前提条件をいくつか提示させてもらう。お前の命をもらうような話よりもよっぽど現実的な話ばかりだから、嫌とは言わせねえよ」

真央はそう言つて、真っ直ぐ上を指差した。

「俺とお前の交渉はライラ・ローザ筆塚二〇一号まで行い、必ず同席者を一人置く。そんで、同席者は声厨、漆原、ちーちゃん、それに俺と融合してるアシエスの四人以外は認めない。

最後にそれ以外の場面では話し合いに応じない。この三つが受け入れられないなら、俺は話は聞かない」

「そ、そんなことさ、それなら、何も問題ないわ」

ライラはサタンがどんな無理難題を言い出すかと構えていただけに、内容のあっけなきに拍子抜けするがしかし、真央はその隙を見逃さなかった。

「おい恵美、聞いたな」

「え？」

「今こいつは、俺と話し合ひ条件として、二〇一号室で貴屋が凄嵐がちーちゃんかアシエスが同席してる状態に限る、って条件を認めたな」

「え、ええ……」

「な、何？ そんな難しいことでは……」

「俺は今言った条件以外のところで、お前の話は一切聞かない。この条件を破ったらこの話は無しだ。いいな」

「も、勿論よ。それくらいのこと、なんでもないわ」

ライラが頷くのを横目で見ながら、恵美は真実の横顔がこの上ない邪悪な笑みを浮かべるのを見た。

そしてその口から、想像だにしなかった一言が放たれた。

「恵美、さっきのお前の誘い、乗ってやるよ」

「……………は？」

「これから毎日、一緒に帰るか」

その後しばらく、一〇一号室をイルオーンの、やや苦しげな寝息の音だけが支配した。







てでもでも運任さんも大切なお友達だからそれが真奥さんの運任なら私……」

「ちーちゃん、ちーちゃん、色々酷い。落ち着いて」

三者三様の混戦を見せる中、

「……………何……………言つて」

真実一人が、顔を真っ赤にしながら呆然としていた。

この喧騒に運任が飛び込んでこなかったのが彼らしいといえはらしいが、もしかしたら腰刀だけは真奥の真意を理解しているのだろうか。いや、そんなことはないだろう。

とにかく真奥は、一盞豆腐酒を浮かべている千穂の肩を叩くと、その耳に囁いた。

「シフト表」

「私……私……へ？」

「シフト表、思い出してみ」

「しふと、シフト表……………シフト表つて…………？」

「シフト表……あつて」

千穂は頭の中のマダロナルド帽々谷駅前店のシフトを閲覧しようとして、なぜか千穂よりも先に真奥の方が真奥の意図に気づき声を上げた。

「魔王様とエミリアのシフトは全て重なっていますね」

「えっ？ ……あっ！」

何故、真実が真実と東美のシフトを、もっと言えばマダロナルド様々谷駅商店のシフトを完全に把握しているのか突っ込むよりも前に、その言葉を聞いて千穂も真実の意図に気づいた。

「出勤時間はバラバラだけどな。帰る時間は大体同じで、休みも重なってる。土日の昼なんかは、おばちゃん達の勢力が強いからな。とにかく少なくとも今月いっぱい、デリバリーの動きが見えてこないから俺と東美はほぼ同じシフトで出勤してる」

千穂が呆然としたところを見計らって、真実はライラに向き直った。

「さっきの条件以外で俺の耳に話が聞こえたら俺は一切協力しない。お前も了承したよな。今更話が通うとか言わせねえぞ」

ライラもまたここまでの会話を反復して、

「えっ、ちよっ……」

ある重大な事実が気がついた。

「ちよっと、ちよっと待って!? そ、それじゃ私、どこで話せばいいの!?」

「俺にもシフトに入ってない日はある。ちゃんと休みの日は教えておくから都合合わせて二〇一〇号室に来いよ。苺屋とちーちゃんは色々用事があるが、苺屋はまず間違いない家にいるし、アシエスだって大家さんちで暇してるんだ。俺が休みの日にお前がうちに来りゃ、事実上俺は話を聞ける状態だぜ」

「そ、そ、そういうことじゃなくて、あなたじゃなくて、その」

ライラも、余裕を失って顔が赤くなりはじめている。

「そ、その条件を守ろうとしたら……」

「言っとくが、店で仕事中にお前の長い話なんか聞いてられねえし、さっきの同席者の条件に恵美や鈴乃やアラス・ラムスが入ってねえからな」

「待って、待って、待ってよそれって、ねえ」

「魔王、あなた、まさか……」

動揺するライラと恵美を交互に見ながら、真央は言った。

真央は、恵美と一緒にのときに話を聞かない。だが、これから真央と恵美はかなりの時間一緒にいて、真央の出した条件に合う状況が生まれない。

恵美と真央が一緒に行動している限り、ライラは恵美に接触できないのだ。

ならば、ライラはどうやって恵美相手に交渉をすればいいのか。

アーバンハイソ水曜日以外の、有り得ない。

「魔王、待って魔王、でも私突然そんな……」

「なんだ恵美、まさかお前、俺同伴じゃなきゃ親子喧嘩もできねえような軟弱者か？ 勇者が聞いて呆れるな」

「そ、そ、そんなんじゃないわよー 弱にあなたがいないからってなんで私がライラと話できないなんてことがあるの！ そんな、そんなことあるわけないでしょっ！」

「なら、いいだろ」

「いいも何も………え？」

「喧嘩も辞め、俺のいない所で存分にやれ。親子だろ」

惠美は呆気にとられて真奥の顔を見る。

今ので惠美が「交渉には真奥を同席させる」という条件を出す手は封じられた。

封じられたというか、そんな選択肢がそもそも自分の中に可能性だ、けでもあったことに、惠

美自身驚きを禁じ得ない。

「……やるわよ」

「エミリア？」

「できるのか？」

驚くライラと、挑発するように笑う真奥。

惠美は頬を紅潮させて、びしりと真奥に向かって人差し指をつきつけた。

「私は勇者よ！ あなたの力なんか惜りる必要ないし、仕事の交渉なんか一人でやってみせる

わよ！ 甘く見ないで！」

そして、そんな宣言をしてしまう。

決してライラに歩み寄ったわけではないが、真奥にいいようにやり込められたのが頬に伝

て、気がつけばついそんなことを言っていた。

完全に頭で考えてのことではない。条件反射によるものだ。

だが、勢いで喉嚨を切った恵美の顔を見て、真美はなぜか満足げに頷き、

「それでこそ恵美だ。安心した」

そう言うとき突然とする一回を残して、真美は一〇一室を出た。

外で待っていた志波にまず声をかける。

「あのガキは、あの部屋に置いという大丈夫なのか？」

「ライラさんが責任を持つと仰ってますし、私もできるだけ傍にいますようにしますわ」

「助かる」

そして、次にエメラダに声をかける。

「そっちで起こったことには俺はもう関与しねえから。そっちはそっちで勝手にやってくれ」

「ふふふ、お任せください」

そして満面の笑みで、エメラダは真美に頭を下げた。

「私はこれからもできる限りエミリアを支えていきますから」

「だから勝手にやれって言ってるんだろ」

次に、アラス・ラムスを抱っこしたアシエス。

「たまに見舞いに来てやれ。どうせヒマだろ。恵美もアラス・ラムスはアパートに預けてんだ

からさ」

「ン」

アシエスは口を引き結んで、力強く頷いた。

「はば……」

「大丈夫だ。俺はイルオーンを怒ったりしない。でもままだイルオーンに痛い痛いされたから、イルオーンが起きたらちやんとアラス・ラムスが謝らせるんだぞ？」

「……あいー」

そして最後に、共用階段で暇そうにしている漆原に声をかけた。

「おい、今日の晩飯なんだったんだ」

「そういうことは声屋に聞きなよ」

「メモ帳程度には役に立てよ。この匂いは豚汁か？」

「分かるなら聞くなっての。まったく、俺のこと暇人みたいに言ってくれちゃってさ」

「お前が暇人じゃなかったらなんだったんだ」

真奥は肩を練めて、漆原の額を小突いた。

「あーあ、やな手癖がするよ」

「そうだな」

真奥の後に続いて立ち上がった漆原は足々しげにばやく。

「真奥、もしかしてライラとエミリアのこと、してやったりとか思ってる？　これで直樹事を

遠くに追いやれたとか思っていない？」

「何がだよ」

怪訝な顔で振り向くと、漆原は手を頭の後ろに組んでため息をついた。

「僕の肩身が狭くなったら、真奥のせいだからな」

「はあ？」

「こちやこちや言いながら共用廊下に消えた真奥と漆原」

「ま、ミキティ・柏母さんが何も言わないなら、契約更新はOKとしますか」

天祿は面倒くさそうにあくびをし、

「うーん、やってくれたなし、うーん。この流れはちょっと非但外だな、うーん」

ガブリエルが珍しく本気で困惑しながら唸り、

「不思議な男だ……」

ノルドは呆然と、二〇一号室の扉が閉まる音を聞いたのだった。





## 終章

真奥も、恵美も、結局のところ、まだ何も知らない。

ライラがこれまでなんのために、どこでどう躊躇してきたのか。

これまでもずっと扱ふところのない行動を繰り返してきたガブリエルがここに来てライラの肩を持つ理由。

セフィラの子達がエンテ・イスラを救うのにどのような意味を持つのか。

閉ざされた天界に存在するセフィロトの樹の状況。

ただ少なくとも、真奥とライラの間に話し合いが持たれる、ということが決まった結果、明らかに変わったことが一つあった。

「息苦しい」

「うるさいな漆原、食事は静かにしろ」

「あと暑い」

「何を言うルシフェル、もう十一月だ。私はいい加減に衣替えをしなければならないと思ってる」

「青原、ベル、お前ら、僕の言いたいこと分かかっててわざと無視してるだろ」

「なんの話だ」

「なんの話だじやないよ!! なんなんだよこの人数は!!!!」

「青原の堪えきれぬ情が遂に切れた」

「アシエスー エメラダ・エトラウヴァー ライター ガブリエル ノルド・エステイナ  
ナー お前ら帰れよ! なんでお前らまで魔土城で飯食べてんだよ? 狭いんだよこの部屋! 知ってるだろ!!」

「青原さん! 今アーブル魔っ登ばしましたよ! お味噌汁が奪れちゃいます!」

「佐々木千穂! お前この状況なんとも思わないわけ?」

「思うに決まってるじゃないですかあつ!!!!」

「おおおつ!!」

千穂からの思わぬ強い反応に、青原は思わず身を引く。

「でも……でも、仕方ないじゃないですか! 私だって、私だって羨ましいですよ! できるなら私が代わりたくらいですよ! まさか、まさか、逆佐さんがこんな……こんなになっちゃうなんて!!」

「ち、千穂ちゃん、あの、ごめんね、その、そういうことじゃ決してないのよ」

千穂に「こんなになっちゃう」とまで言われてしまった青原。

ライラと真奥相手にあんな暖かい切った感嘆は、なぜか今、神秘的顔で真奥の隣に座り、申し訳なきように茶碗を持っている。

「分かってますよお！」

千穂は泣き笑いのような表情で席に戻った。

「私は真奥さんと遊佐さんに仲良くしてほしいと常々思っていたんですもん！ その気持ちには当然なんですもん！」

そしてやけ気味に白米を掻き込み、千穂らしくもなくほったたに沢山の米粒をつけたまま、すぐ隣に鋭い視線を送る。

「ライラさん！ むしろ私は今、ライラさんをこそ恨むべきなのかもしれません！」

「な、なんだか、その、ごめんない……」

エンターイスラと魔界の歴史を裏で渡ってきた大天使が、女子高生の想像の目に慣えながらも、しつかり浅漬けに箸を伸ばした。

「まーまー、大勢で食べるご飯は楽しいじゃないの！ まー白くじら立てない。ちゃんとお相伴に与るために、差し入れはしてるんだからさ。はら、ミキティお手製の肉団子の甘酢あんかけだよー」

ガブリエルはというと、意外にもただやってきているライラと違い、刺繍のキルトパッドの中から何やら特大のタッパを取り出してきた。

中には本人の言う通り、大ぶりの肉団子がぎっしり詰まっており、柔らかな香りのあんとパブリカの甘い香りが食卓に溢えられる。

だが、食卓にそれを添えた男の団体が誰よりも大きいので、胡坐を掻くガブリエルの膝に凍るは容赦なく腹りを入れた。

「お前体、デカいから余計に邪魔なんだっての！ 大体差し入れどうこう以前に全員のご飯とみそ汁食べたらもうチーブルがいっぱいいっぱいだろ！ あと『大家さんお手製』とかやめて本当！ 髪の手どころか命まで漂白されそうだよー」

「そういう失礼なこと言うなよな！ ミキティが皆さんの集まりに是非って言っただけで折角持たせてくれたのにさ。魔窟島県産高級黒豚のひき肉使ってるって言ってたよ？」

「濃煎、大家さんとガブリエルに謝れ」

「黒豚」のところで濃煎がガブリエルの手からさつとタッパをかつきらい、皿に移すと電子レンジに放り込むではないか。

「ちよっと真実！ 濃煎が高級食材に悪魔大元帥の魂を売ったよ？ 軍法會議ものだ！！」

「ルシアエル、安心しなヨー 余らせたら私とエメが引き受けるからサー」

そこに横からまたアシエスが神経を逆なでするようなことを言い、濃煎は頭を掻いた。

「そういう心配もしてない！ つていうか本当お前ら食い過ぎ！」

「真実！ 少しは家主の自覚持って図々しい連中なんとかしろよ！ エミリアも！ お前が覚

「悟決めないから毎日この部屋戰場なんだぞ!!」

「……………面目ねえ」

「……………ごめんなさい。でも…………」

真美は暗い顔でぼそぼそと食事を進め、その隣で真真に寄り添うように座る恵美は、何か言いたげに口を失わせた。

「いいのだ、エミリア」

するとノルドが、穏やかな声で恵美を諭す。

「誰に強制されることもない。お前が決めなさい。私は、お前とライラの意志を最大限尊重するから」

「お父さん…………」

「こいつらの意志よりも、まずこの部屋の住人の意志を尊重しろっ!!」

耐えられずに叫び続ける漆原の傍に、人の人間を離うようにして、近づく影があった。

「もしふえも。ごはんはすわってたべないと、めー」

「もおおおおおおおおおおお!!」

アラス・ラムス相手では怒鳴りつけるわけにもいかず、漆原は今度こそ頭を抱えた。

イルオーンが一〇一号室に運び込まれてから五日が経とうとしているが、結局恵美が永福町のマンションに帰ったのは一度だけで、後はずっと鈴乃の部屋に押しかけ同然に泊まり込み

でいる。

その際はライラも同行したというが、エメラダ曰く二人共あまりにきこちなくて、ほとんど会話らしい会話ができなかったという。

最初のチャンスで双方意い切り願いてしまったものだから、恵美もライラもそれ以後なかなか会話どころか暗喑や言い争いの糸口すら探むことができず、気がつけばこうして恵美が真奥から離れる瞬間を負担すまいとするライラも、恵美や真奥がライラと物理的に揉め事をおこしたときの警戒委員が一緖に動く羽目に陥り、結果がこの魔王城太金食なのである。

真奥としては、ライラの話の話を聞くに当たり自分と恵美を明確に分離するべきと考えたのと、いい加減恵美がライラのことですうじうじ悩んで深刻なエラーが再発し、原因に誤解を与えるような行動に出る心配を無くしたかったが故の、あの条件と提案だったのだ。

恵美とライラがきちんと向き合って話し合えば、報酬まではいなくてもわだかまりが多少は解けて、恵美の調子がいつも通りになるのではと思った結果がこの有様である。

恵美が、全くと言っていいほどライラと二人きりになる覚悟を持てない。

それだけならいいのだが、恵美は真奥がライラに出した条件に身を融すように、仕事時間以外でもほぼ毎日真奥の傍を離れなくなってしまったのだ。

こんなことなら、かつてのようには魔王討伐いつか殺すと傳達窓に騒いで真奥を急張りさせていた恵美の方がずっとマシだった。

こうも四六時中神妙な顔で傍にいられては、どう接していいのか本当に全く分からない。強硬手段で叩き込もうにも、考えてみれば今までのそんなことをしたことはなく、どう強硬に出ればいいのかすら分からない。

おかげでここ数日は魔王城は毎日職員朝礼だし、マダロサルドでも川田や明子のような妙に整しのいい連中から妙な目で見られるし、千穂の熱視線と鈴乃の冷たい視線と米の減り方を見たときの直屋の三白銀と漆原の文句がとにかく心に重い。

「恵美、てめえ発言に責任持てよ。そんな度胸ない奴だったのか？ エラーか？ ああ？」

「そ、そんなことないわよ！ ちゃんと話し合えば、する……するわよ！ い、いつか……」

恵美に直接文句を言えば、いつかやるいつかやるばかりだ。

「だ、第一、あなただってライラと話し合える覚悟が持てないんじゃないの！ 仕事上がりに私と一緒にアバートまで帰ろうってことは、あなたがライラに出した条件を整えさせないようにするためじゃ……」

「店からアバートへの帰り道に同じちゃその側面も否定しねえよ！ だがな、俺は仕事上がりや休みの日にまで好き好んで勇者サマが悪魔と一緒にいたがるとは思ってなかったただだよ！ もう帰れよ本当!!」

心にも無い言いがかりをつけられた真帆は、敢えて恵美が怒りそうな言葉を返して言い放つが、恵美の反応はさらに真帆の予想の上を行った。



「っ！　な、べ、別に好き好んで一緒にいたいわけじゃないわよー　ただ、ただ……もう今はちょっとその、あの、都合が悪くて」

否、上を行くどころか向かってくる途中でスッ転んでそのまま立ち上り「がれなくなったような商切れの悪い反応に、悪い切り座の空気が白けてしまう」。

「『なんの都合なんだか……』」

「ちょ、ちょっと待　あなた達今何が言わなかった？」

「『別に何も』」

西屋と津原と鈴乃が、指名されたわけでもないのに明後日の方向を見て冷たく言い放ち、千穂はといえば、

「真奥さんと道佐さんが仲良くなるのは私が望んだこと。私の願いはこれで半分達成されたようなもの、でも、でも、何、この突然としない感じは……私、そんな嫌な子になりたくないのに、でもどうしてこの状況を素直に喜べないんだろう……不思議ですよライラさん」

髪を隠えたままどちらかというと隣に座るライラに向けて固く取れない表情を延々と放っている。

真奥はすっかり鬱ってしまい、

「全っ然気が体まらねえ……」

ついばやきを口に出してしまつたが、それを袖と繋つように、

「私です。魔王様」

「真奥さん！ 私も気が休まりません！」

「僕ちゃんと警告したよな？ この状況本当どうにかしろよ！」

「本当に、ものには限度というものがあるぞ」

青屋と千穂と漆原と鈴乃から次々に、真奥へとも悲美へともつかぬ顔のある言葉が飛び、

最後にトドメの一言が放たれた。

「本当にごめんなさい……でも、お願い。もう少しこのままでいさせて……」

真奥の傍らに寄り添いながら小さく呟かれた悲美の心からの言葉は、相妻のように食卓を駆け巡った。

「ゆ、ゆゆゆゆゆゆゆゆああん？ あのおお？ それって、それってあのおおお？」

「おおエミだいたーン！ スヒューー……」

「エミリア……その言い方は……あまりにあんまりです」

「頼むから、頼むからこれ以上面倒を魔王様に持ち込まないでくれ……頼むから」

千穂が罕間す南の機嫌を上げ、アシエスが吹けもしない口笛を吹くとして失敗し、エミラダが顔をひきつらせ、真奥は箸と茶碗を取り落しそうになりながら真っ白な顔でそう呟く。

「はばとま、なかよし！」

この状況をたった一人、アラス・ラムスだけが歓迎しているが、残念ながら彼女の愛らしさ

を以てしても、この部屋の空気を和らげることはできなかった。

そしてこのとき一〇一号室では、

「天井抜けたりしないだろうね」

イルオーンの様子を見ている天祢が、生活音というにも迷惑な音が伝わってくる天井と、真剣な顔で睨めっこしていた。

「遠い未来の平和よりは、今日の晩ご飯か。さて、私は何を食べようかね。私はいいって言われちゃ人んちの冷蔵庫も構わず充らすよ」

天祢は手をすり合わせながら、客数をくノルドの部屋の冷蔵庫を開けて好き勝手に晩のおかずを見繕いはじめる。

そんな天祢の後ろで寝苦しそうにうめくイルオーンが、悪夢にうなされているのか、単に上階の騒音に反応しているだけなのかは、彼が目覚めるまでは分からないままだった。

# 作者、あとがく — AND YOU —

運転免許証に限らず、身分証明に使う証明写真の出来っつてどうしてああも納得いかないのか、真剣に考えたことがあります。

特に和々原は証明写真を撮影するようになる頃にはもう眼鏡を着用していましたので、表情もさることながら高い金を払って撮影した証明写真の眼鏡がわずかでも傾いていたりするとそれはもう凹みました。

履歴書はもちろんのこと、学生証や運転免許証など、この年齢に至るまで、

「悪くない」

と思えたことは一度もありません。大体どこか「ああ……」ってなることはかりです。

かつて芝居をやっていたときに恩師から「良い演技をしよう」と思う奴の演技はどつまらないうい、と言われたことがあります。

芝居や表情は日常と同じ複雑な心の動きがあつて初めて受け手に訴えかける力を得られるのであつて「自分を良く見せよう」としか考えていないヤツの表情は魅力満ちではない、ということです。

翻つて自分が証明写真を撮影するときのことを考えると、自分を良く見せよう、としか思つ

でないんだから、そりゃ納得できる写真が撮れるわけもなく。

そもそも「自然な表情で撮ろう」とか撮れるわけないんです。証明写真に写す顔なんか人に見せる用の「改まった表情」なんですから。

日常で証明写真で見えるような「自然な表情」してる人なんか見たことないですわね。

ならば改まった表情は改まった表情として、何かの意気込みを心に抱いて挑めばいいと考えた結果、直近で更新した免許証の写真は納得は行きませんが、表情の良し感して凹むことはなくなりました。

ただ、本書の中で新たな身分証明書を取得した彼の写真は、きつとその意気込みが前に出すぎたんでしょね。きつと規格に適合するレベルの、イキイキとした表情になったことでしょう。絵にならないかなあ。

本書「はたらく魔王さま」12は、自分が自分であるからこそ、自分以外の誰かのために何かをするとはどういうことなのか、姫の種を奪ぐことを怠らずに考える奴らのお話です。

和々原は読者の皆様から願っている分をきちんとお返しできているのか、不安になることもありですが、それができているうちはきつと、お話を書き続けていけるのだと思います。

また、次巻でお会いできれば、そのときまでに頂いたものをお返しできるように頑張ってます。

それではっ！